7．前開（ぜんかい）遺跡

1．はじめに

西区伊川谷町前開は、明石川の支流である伊川をはさんで存在する村落である。地形は、伊川の形成した河岸段丘と沖積地である。

周辺の遺跡を、伊川上流から列記すると、太山寺、前開（59年度調査）の古墳時代及び中世集落址、弥生時代集落址の頭高山遺跡、小寺、長坂等の古墳時代集落址、池上北遺跡の弥生時代集落址等があげられる。

今年度の調査対象地は、久留主谷川と室谷川にはさまれた東西250ｍ・南北400ｍの標高約55ｍの段丘地である。

2．調査の概要

(1) 調査の経緯

対象地に、試掘坑を合計33ヶ所を設定し、試掘調査を行った。その結果、9ケ所の試掘坑において土坑等の遺構や遺物が検出された。

上記の試掘調査結果から、八幡社の東北部、通称室谷と呼ばれる地区に、パイプライン及び排水溝等の掘削によって遺跡の破壊される部分に、トレンチ1～7を設定した。また、その他の圃場で、遺跡の破壊される部分に対しては、設計変更を申し入れ、遺跡の保存に協力を得た。

(2) 基本層序

基本層序は、耕土・床土・黄灰色砂泥・炭を含む褐色泥砂・黄色粘土の地山である。褐色泥砂が、比較的厚い箇所に遺構が検出された。また、黄灰色砂泥・褐色泥砂の2層から遺物の出土がみられたが、全体にきわめて少量であった。検出された遺構は、土坑・溝・ピット等である。

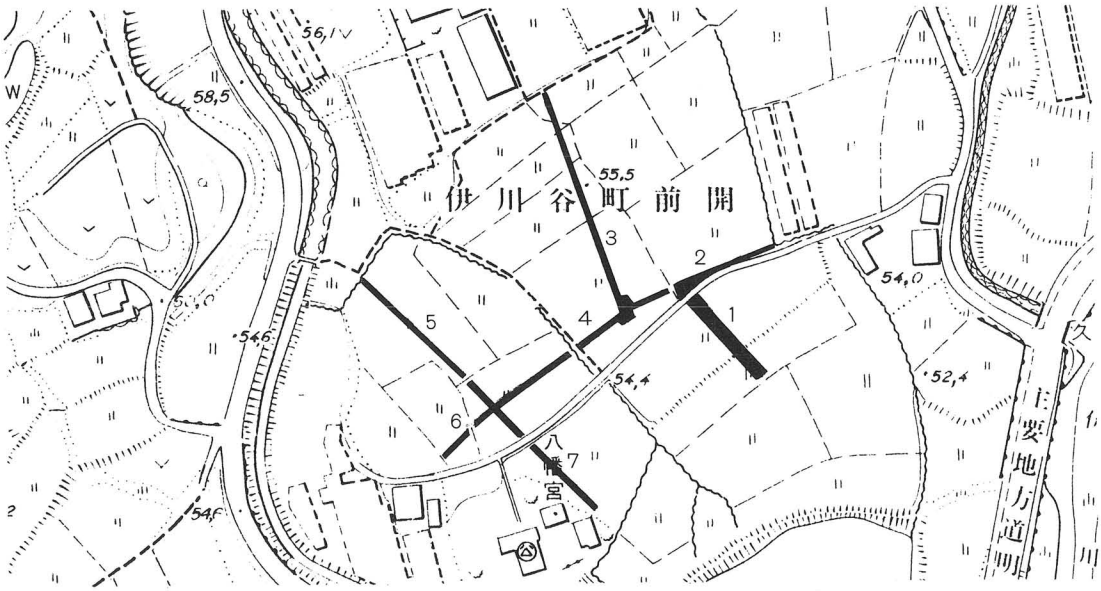


fig. 97　トレンチ位置図 1：2,500

(3) **1トレンチ**　土坑・落ち込み状遺構・ピットが各1基ずつ検出された。出土遺物は、土師器・須恵器・磁器片等10片程度である。

ＳＫ01　土坑（ＳＫ01）は、長方形のプランで西側短辺に小さな突出部をもつ。長辺約1.8m、短辺約1.2m、深さ約0.2mである。土坑内の土は、炭と焼土を含む灰褐色泥砂である。土層の観察により、この土坑は当初短辺0.8mのものを1.2mに北へ拡張したものであろうと考えられる。底面及び壁面は、赤色化するほどではないが焼けている。他の出土遺物は、全くなかった。

ＳＸ01　落ち込み状遺構（ＳＸ01）も、炭を多く含むが、遺物の出土はなかった。ピットは、1ケ所で、建物等の性格付けは困難であった。

(4) **2トレンチ**　層位的には、炭を少量含む褐色泥砂層は存在したが、遺構・遺物は検出されなかった。

(5) **3トレンチ**　南半は、部分的に地山が砂礫層で、遺構は検出されなかった。北半では、地山が黄色砂泥となり、溝とピットが検出された。間層より少量の土師器片が出土した。ピットは、径0.3m、深さ0.2mである。調査区の制約もあり、性格等は不明である。

fig. 98
1トレンチ全景

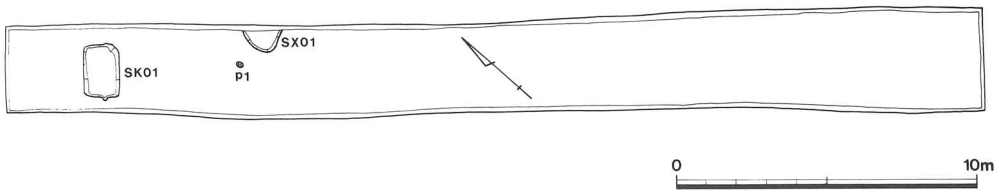


fig. 99　1トレンチ遺構平面図

fig. 100
3トレンチ全景

fig. 101
4トレンチ全景

(6) 4トレンチ　土坑（ＳＫ03）と溝（ＳＤ02）は、2・3・4トレンチの交点で検出され、部分的に拡張し調査を行った。この拡張区で、土師器堝・羽釜、須恵器鉢の破片が少量出土した。

ＳＫ03　ＳＫ03は、杓子状の形態をもち、長軸約4.8m、最大幅約1.8m、柄の部分の幅0.8m（推定）、深さ約0.2mである。長軸の両端に突出部をもち、西側突出部分には、径0.15m、深さ0.3mのピットをもつ。土坑内の堆積は、大きく2層にわかれ、下層は炭層、上層は炭と焼土を多く含む褐色砂泥である。底面及び壁の一部は、赤く焼けている。

ＳＤ02　ＳＤ02は溝状遺構で、最大幅約1.8m、深さ約0.1mで、東西両端が深くなり、深さ約0.3m、西端では、ピットが1ヶ所検出された。溝内の堆積土は、炭を含む褐色砂泥である。土器等の遺物は、出土しなかった。また、土坑と溝の間に径0.3m、深さ0.1mのピットが検出されている。

4トレンチではその他に検出された遺構として、拡張区より西へ約30mの地点で、径約1.0m、深さ約0.1mの炭の詰まったピットが検出された。

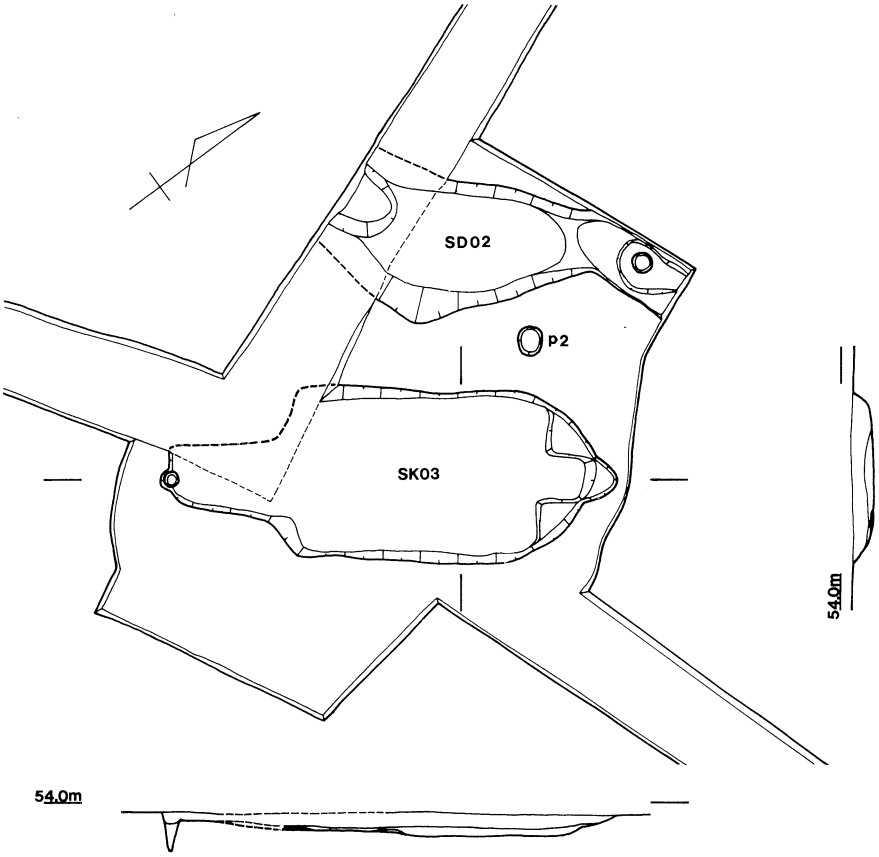


fig. 102
4トレンチ拡張区
遺構平面図

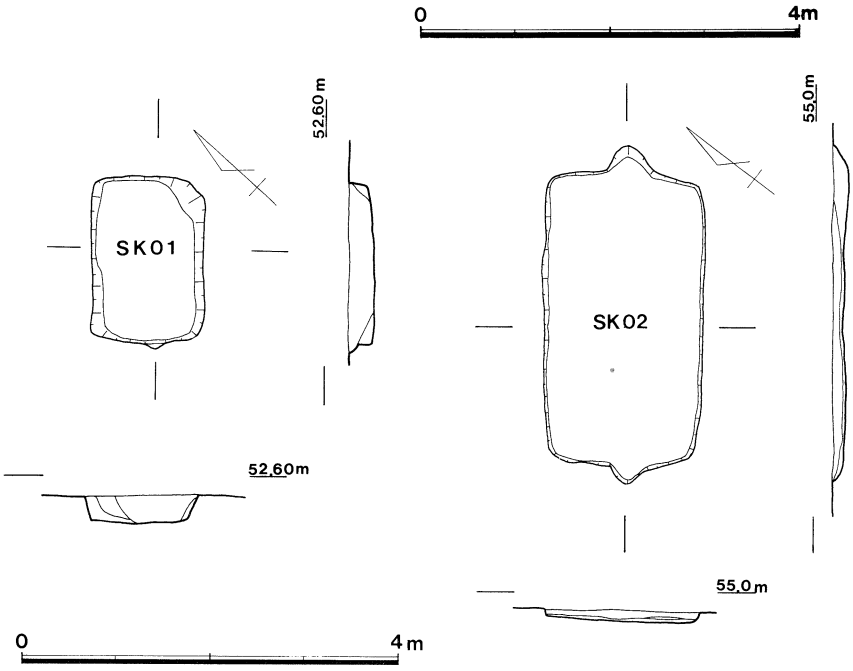


fig. 103
ＳＫ01・ＳＫ02
遺構平面図

(7) 5･6トレンチ　部分的に炭を含む層が存在したが、特に遺構･遺物は検出されなかった。

(8) 7トレンチ ＳＫ04　4・5・6・7トレンチの交点より南へ約８ｍの地点で、土坑（ＳＫ04）が検出された。短辺約1.4ｍ、深さ約0.3ｍで土坑内は、炭が多く詰まり、底面は赤く焼けていた。遺物は、全く出土しなかった。

(9) T. P. No38 ＳＫ02　ＳＫ02は、Ｔ．Ｐ．No38で検出された土坑である。プランは長方形で、短辺に突出部をもつ、炭の詰まった土坑である。長辺約1.8ｍ、短辺約1.6ｍ、深さ約0.1ｍである。長辺、短辺の壁面及び西側突出部分が赤く焼けていた。焼土･炭の他には、出土遺物はなかった。

(10) T. P. No22, 35 ＳＫ05･06　Ｔ．Ｐ．No22のＳＫ05、Ｔ．Ｐ．No35のＳＫ06は、ＳＫ02と同様の土坑と考えられるものである。ＳＫ05は、他の土坑に比べて比較的炭の量が少なく、また、あまり焼けていなかった。ともに試掘坑範囲内での調査で規模等は、不明である。ＳＫ05･06ともに、土器等の出土はなかった。

fig. 104
Ｔ．Ｐ．No.38（ＳＫ02）

3．まとめ

検出された遺構は、短辺に突出部をもつ炭の詰まった土坑が３基、おそらく同様のものと考えられる土坑が３基、炭の詰まったピット１基、その他に溝２条･ピット等である。

出土した遺物が微量で時期や遺跡の性格等を判断する材料に乏しいが、１トレンチの須恵器鉢片、４トレンチの土師器堝片等により13世紀ごろの遺構であると推測される。

遺跡の範囲は、６トレンチを西限とし、２トレンチを東限とする。T.P.No35･38･22、１トレンチを結ぶ範囲で、炭の詰まった土坑を中心とする遺構がひろがることが予想される。

炭の詰まった土坑が、存在する遺跡では、これまでの調査でも遺物の出土量が少ない。土坑は、等高線に平行してその長軸をもつが、その存在に規則性があるのか、また、この土坑がどのような性格をもつものなのかは、今のところ明確にすることはできない。また、これまでの調査例との比較検討等、今後検討しなければならない課題が数多くある。

8．舞子古墳群毘沙門２号墳

1．はじめに

舞子古墳群は垂水区舞子坂２・３丁目の舞子陵に所在する横穴式石室を内蔵する古墳時代後期の群集墳である。かつては10支群、100基以上の古墳が存在していたといわれるが、多くのものが破壊され、現在は18基を残すのみとなっている。

昭和44年に毘沙門２号墳とその東方約50ｍに存在した毘沙門１号墳とともに宅地造成のため盛土･石室などの地上部が破壊され、地表から消滅した。昭和59年度に当該地でマンション建設が計画されたため、同年、試掘調査を実施した。その結果、石室の基底部が確認されたため、今回調査を実施した。当初、調査は石室が遺存すると考えられる範囲を中心に約200㎡で実施したが、途中、弥生時代後期の遺物包含層、遺構を検出したため、工事予定地の東方部約350㎡の調査を行うこととした。また、残された西方部にも遺物包含層の広がる可能性があるため、東方部の調査後、試掘調査を実施することとした。

2．調査の概要

横穴式石室

横穴式石室は昭和44年の造成の際に盛土部分が削平されており、基底になる一段目の石組だけが残存していた。残存する石も造成時に動いたと考えられ内側に倒れ込むものもあり、残存状況は良くない。

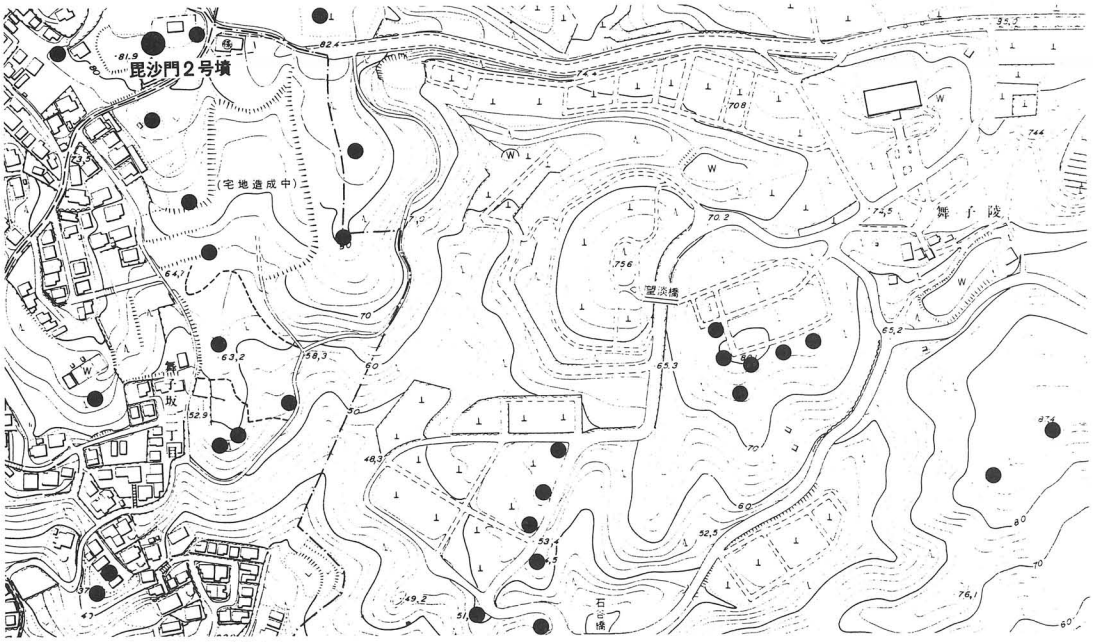


fig. 105　舞子古墳群位置図 1：5,000

石室は幅4.4m、長10m、深さ0.3～0.5mほどの掘形を地山を切り込んで作った後、石を奥壁側より順次置いている。この際、石を安定させるため、さらに地山を掘り、小石を下に置くなどしている。

石室の大きさは全長９m、玄室幅1.6m、羨道幅1.2mでほぼ真南に開口する右袖式のものと考えられるが、袖の位置はその部分の石が失われており判断することが難しい。

また、羨門から外に幅40～50cm、深さ30cmほどの溝が排水のため付設されている。

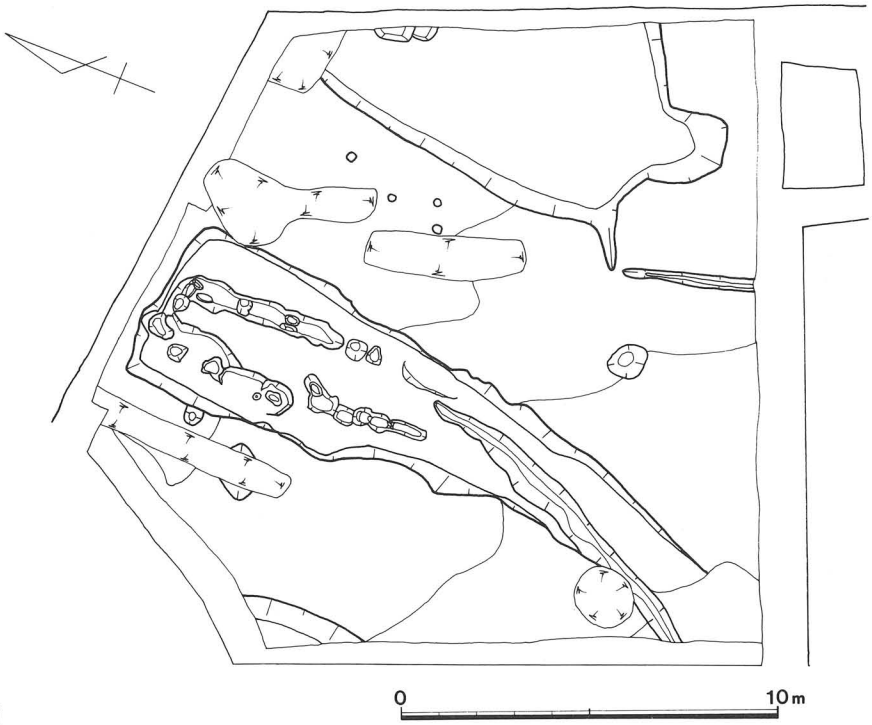


fig. 106
調査区平面図

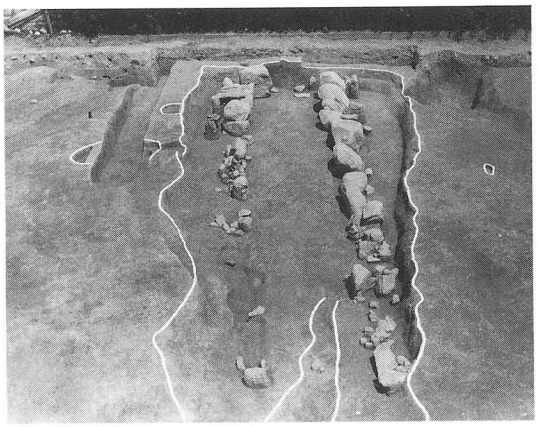


fig. 107　石室検出状況(南から)

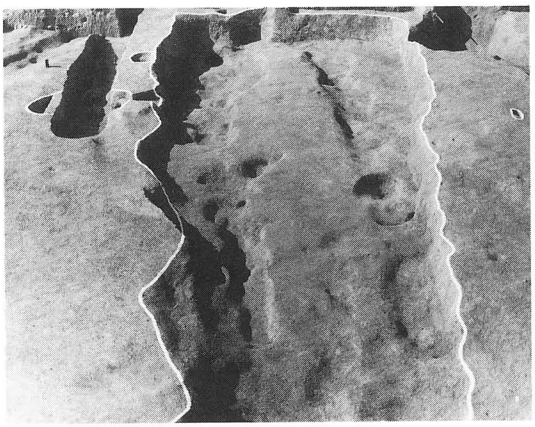


fig. 108　掘形内石室撤去後

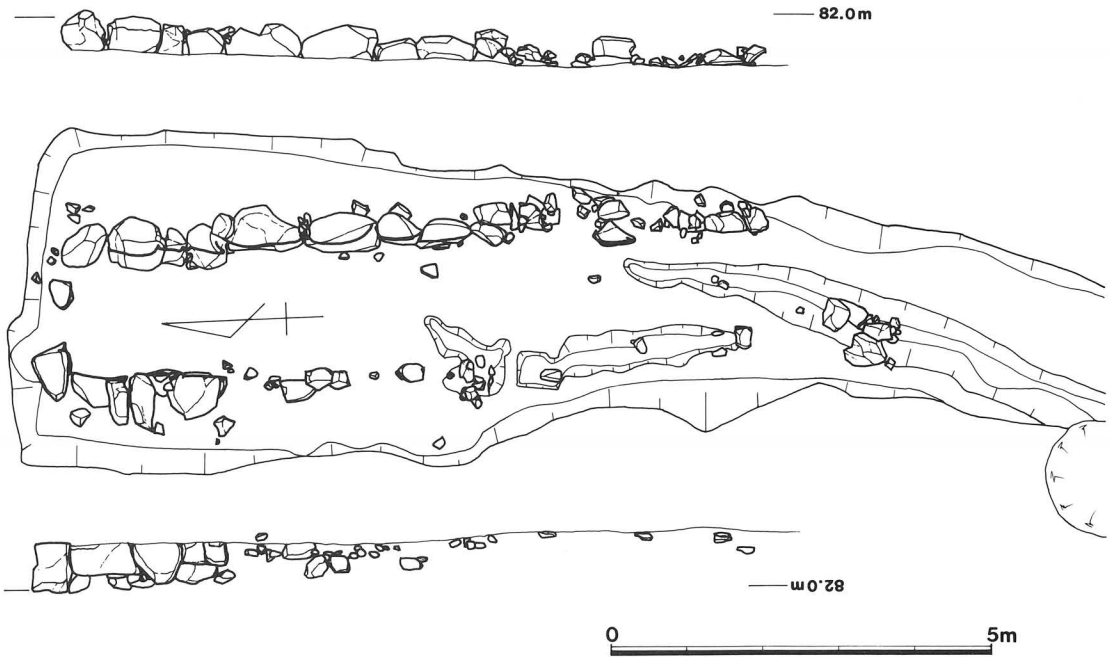


fig. 109　横穴式石室平面図

fig. 110　石室内須恵器出土状況

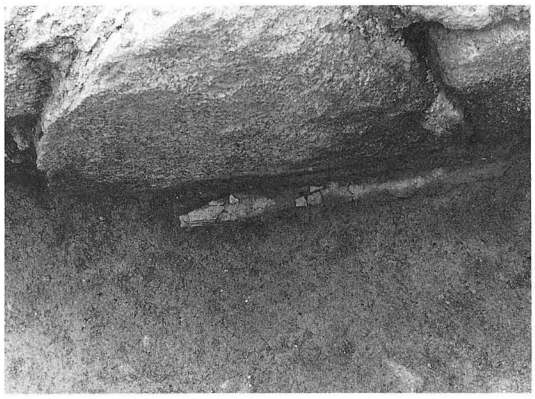


fig. 111　石室内鉄器出土状況

出土遺物　遺物は主に石室内から出土しており、須恵器・鉄器・金環などがある。

須恵器は奥壁付近で坏１・坏蓋２点、玄室中央付近で坏蓋２・壺１・高坏１点が出土したほか、羨門排水口埋土内より細かく砕かれた甕１個体が出土している。

鉄器は奥壁付近で鉄鏃５本・鉄釘２本、玄室の左右両壁にそって直刀がそれぞれ１本出土した。

金環は玄室中央左壁付近より１点、羨道部より２点１対が出土した。

その他の遺構　横穴式石室のほかは古墳に関連する濠などの遺構は発見されなかったが、弥生時代の土坑・柱穴等が検出された。

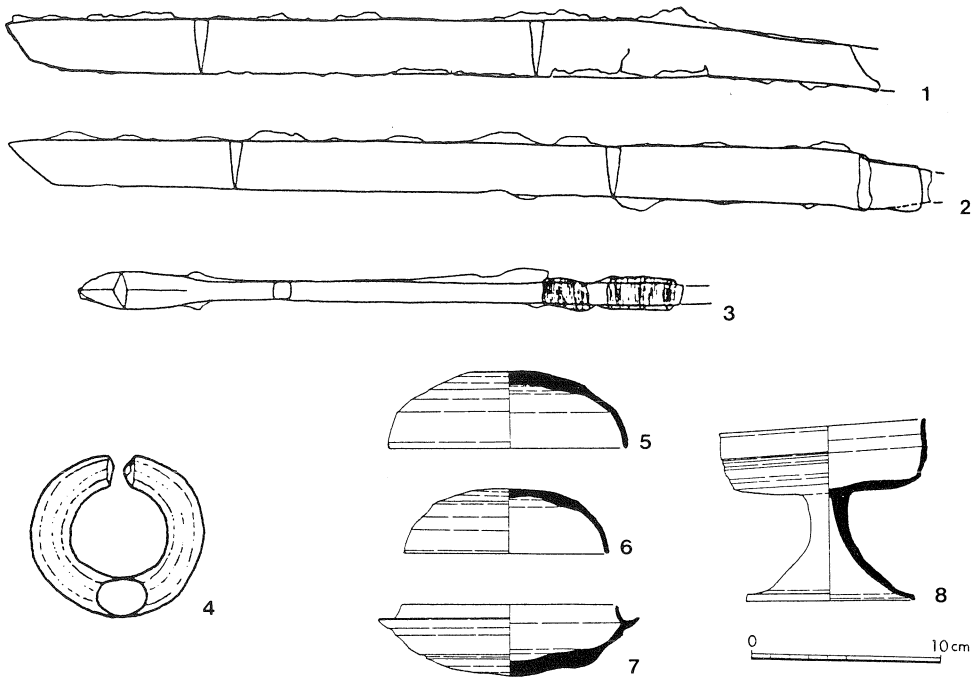


fig. 112　古墳出土遺物実測図 3：S＝1/2　4：S＝1/1

弥生時代の遺構　弥生時代の遺構としては長さ９ｍ、幅５ｍ、深さ0.4ｍの不定の大形の土坑１基、長径80㎝、短径60㎝、深さ30㎝の楕円形の土坑２基、溝１条、柱穴４である。遺構からは土器片が僅かに出土した程度である。また、包含層中より先土器時代のナイフ型石器が１点出土した。

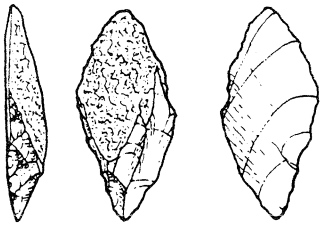


fig. 113　ナイフ型石器実測図 S＝1/2

西方部の試掘　これらの調査終了後、土置場としていた西方部の試掘調査を実施した。試掘トレンチは、１ｍ×10ｍのものを３本設けて実施した。

この結果、各トレンチにおいて地山上に約10㎝ほどの遺物包含層を検出した他、土坑の存在を確認した。

３．まとめ

今回の調査では、すでに造成により破壊され、地上より消滅していた古墳が、工事後も地下に残存していたことを確認した。また、その形態や規模も明らかになり、６世紀後半代に築造された右袖式の横穴式石室を内蔵する古墳であることが判明した。

その他、弥生時代後期の遺物や遺構が発見され、同時期の集落址が東石ヶ谷遺跡からこの付近にまで広がることが明らかとなった。

9．五色塚古墳（ごしきづかこふん）

1．はじめに　史跡五色塚古墳の東側に位置する舞子病院内の遺跡確認調査を昭和59年10月に実施したところ、五色塚古墳後円部北東で幅1.5m、深さ0.3mの溝が検出された。

昭和60年1月から五色塚古墳後円部北側の市営住宅敷地内の遺跡確認調査を実施し、後円部の堀に沿って幅3～5m、深さ0.5mの溝が巡っていることが確認された。

これらの調査結果から、五色塚古墳の堀の外側に溝が巡っていることは、ほぼ確実であると考えられる。そこで、今回、その溝の性格を明らかにすることと、溝の外側に五色塚古墳と関連する遺構が存在するか否かを明らかにするため、再度、舞子病院内の遺跡確認調査を実施することとなった。

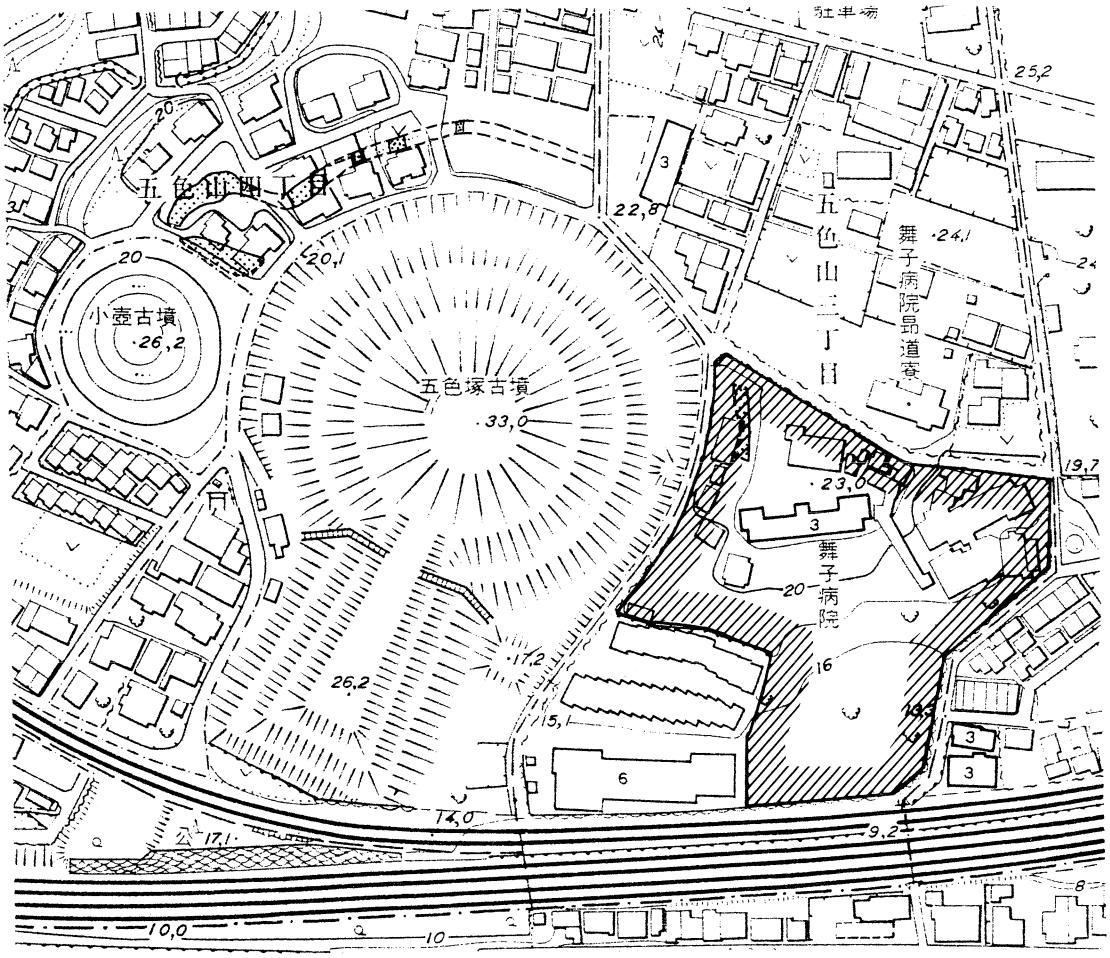


fig. 114　調査位置および五色塚古墳周溝位置図　1：2,500

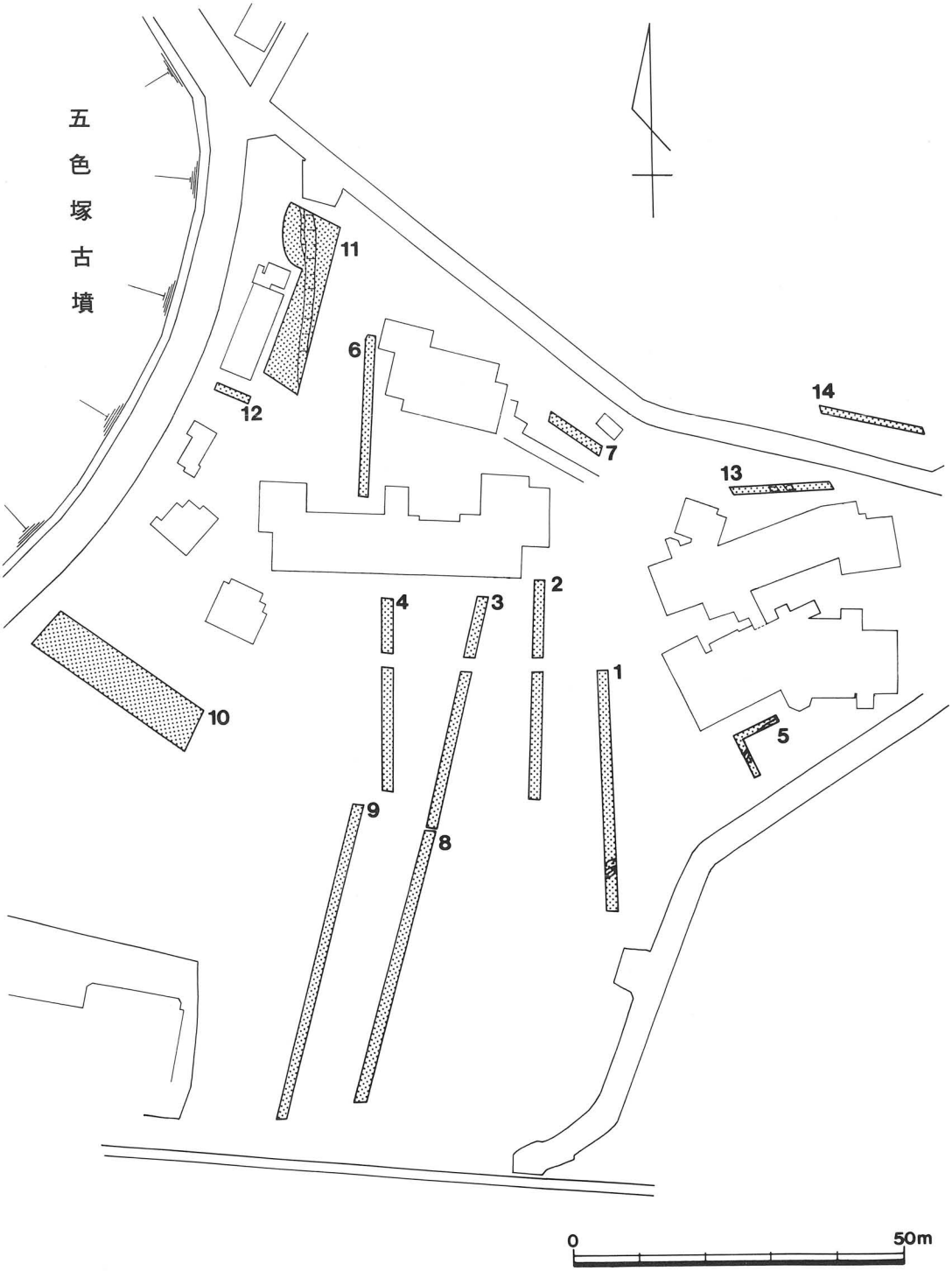


fig. 115　トレンチ位置図

2．調査の概要

A　五色塚古墳周溝（ＳＤ01）　前回の試掘調査の際、溝が検出された２ヶ所のトレンチに接して、今回No.10･11トレンチを設定した。No.11トレンチでは、予想どおり五色塚古墳後円部の堀に沿って巡る溝が検出された。溝幅は約６ｍ、深さ0.3ｍを測り、溝底からは、まとまって埴輪片･土師器片が出土した。No.10トレンチでは、削平が甚だしく周溝は検出されなかった。

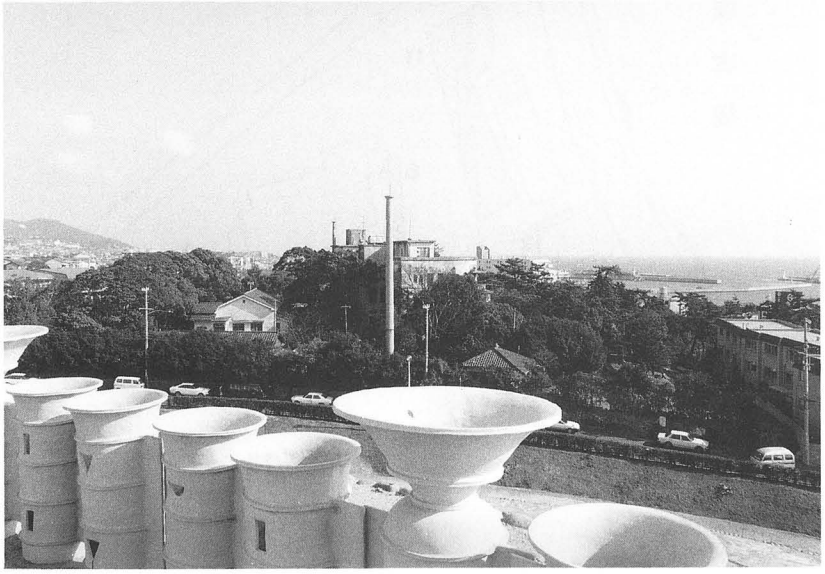


fig. 116
調査地遠景（西から）

fig. 117
五色塚古墳周溝（南から）

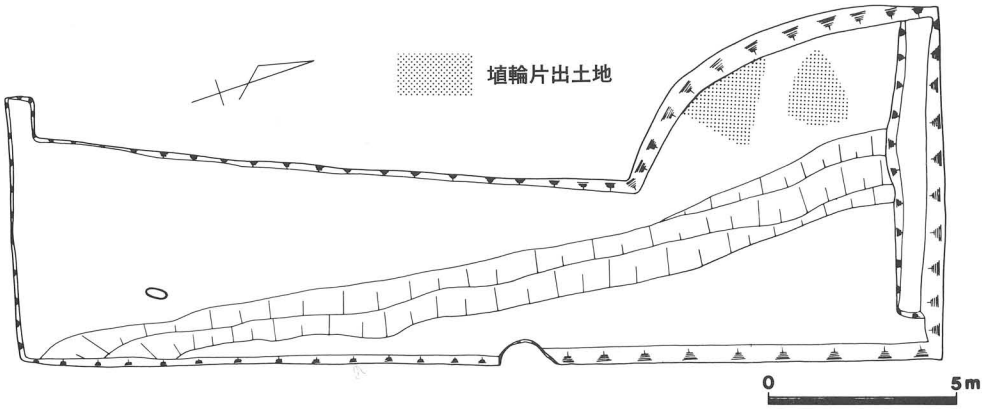


fig. 118　No.11トレンチ平面図

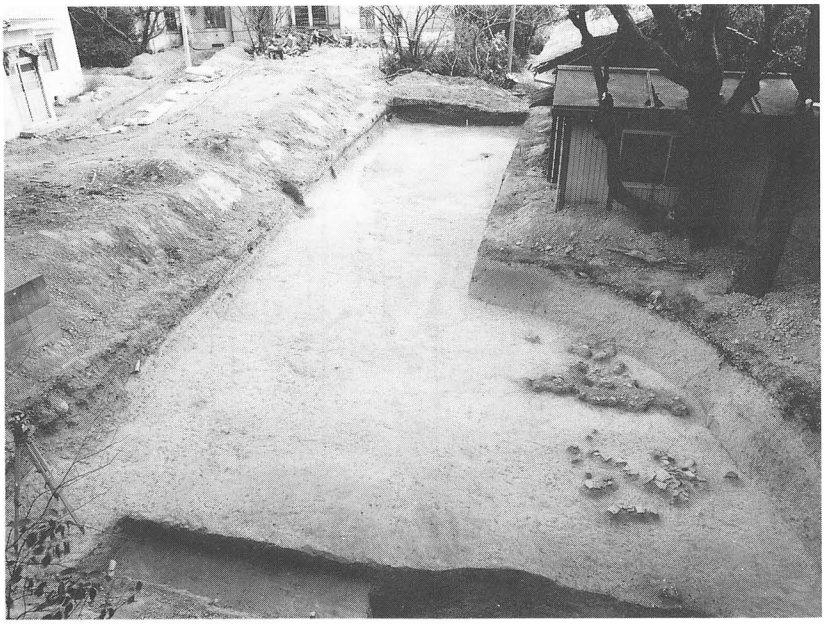


fig. 119
五色塚古墳周溝(北から)

fig. 120
周溝内埴輪出土状況

B　溝状遺構　No.5・No.13トレンチで溝状遺構〔ＳＤ02(No.5トレンチ)・ＳＤ04(No.13トレンチ)〕が検出された。

ＳＤ02は、幅1.6～1.9m、深さ0.8mである。この溝状遺構は、No.1トレンチ南端で検出された溝（ＳＤ03）に接続する可能性がある。溝状遺構内からは埴輪片が出土しており、五色塚古墳と同時期と考えられる。No.13トレンチで検出された溝状遺構は、幅約4m、深さ1mを測る。遺構内からは、ＳＤ02同様埴輪片が出土しており、五色塚古墳と同時期の遺構と考えられる。

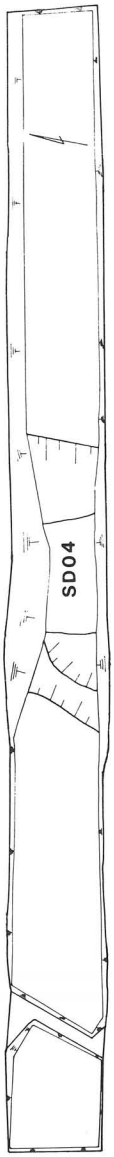


fig. 121
No.13トレンチ平面図

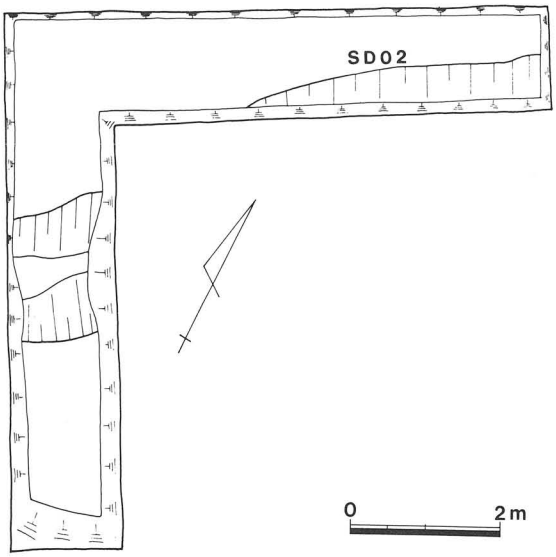


fig. 122　No.5トレンチ平面図

fig. 123　No.5トレンチ溝状遺構

C　墓　地　　病院本館南側の広大な敷地内に6本のトレンチを設定して調査した結果、江戸時代後期以降の土葬墓群が発見された。

土葬墓は、1.1×0.8m、深さ0.5～0.8mの墓壙内に遺体を埋葬したものである。人骨の残存していたものはすべて屈葬であった（ＳＴ04･06･07･11等）。おそらく、座棺で埋葬されたものと考えられる。土葬墓の直上に閃緑岩や蛸壺を塚印として置くものもみられた（ＳＴ10･45）。

副葬品として、染付皿、碗、土師皿、蛸壺、銅製キセル（雁首、吸口）、寛永通宝、元豊通宝、嘉祐通宝、銅製かんざし（ＳＴ04）、銅製指輪（ＳＴ11）などが出土している。

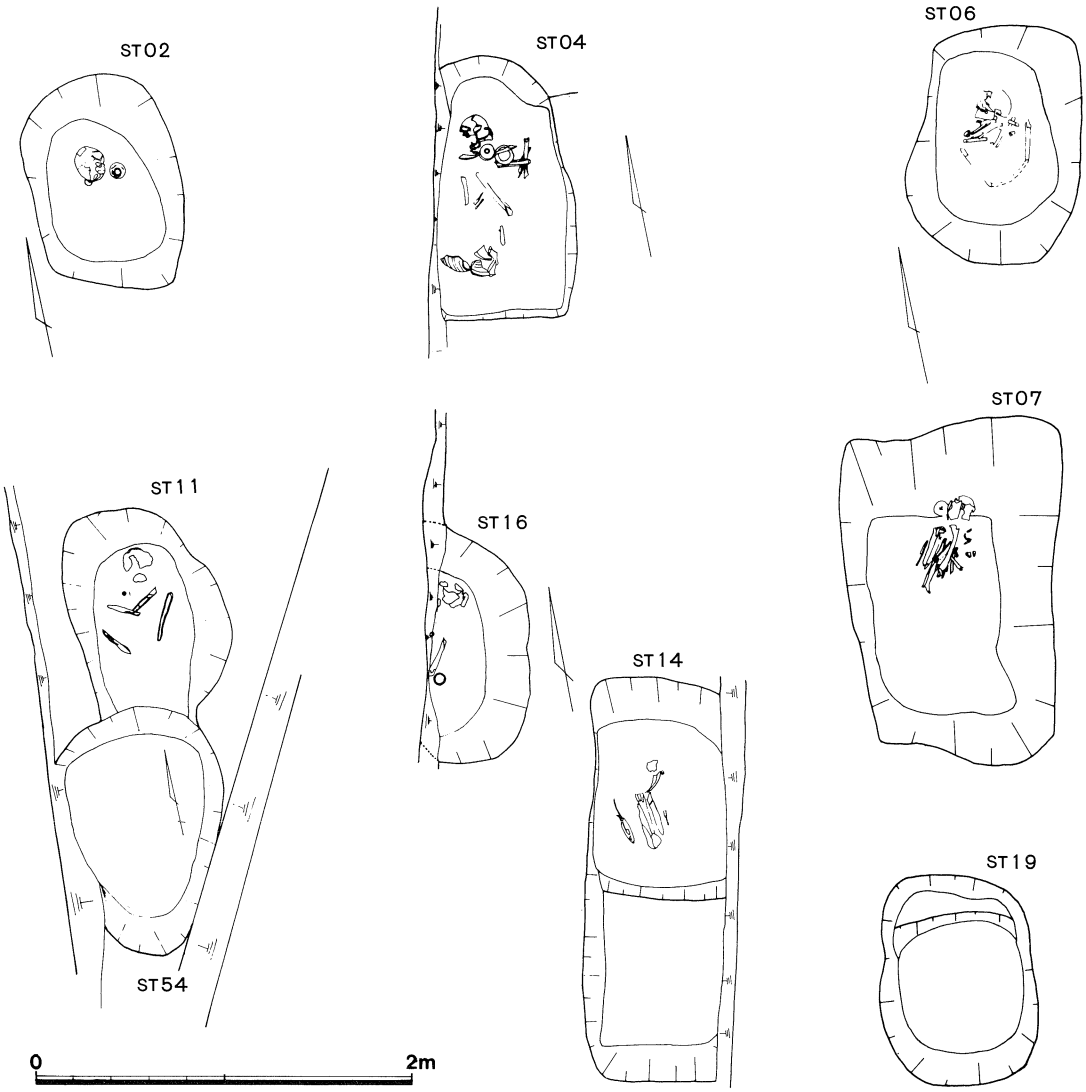


fig. 124　土壙墓平面図

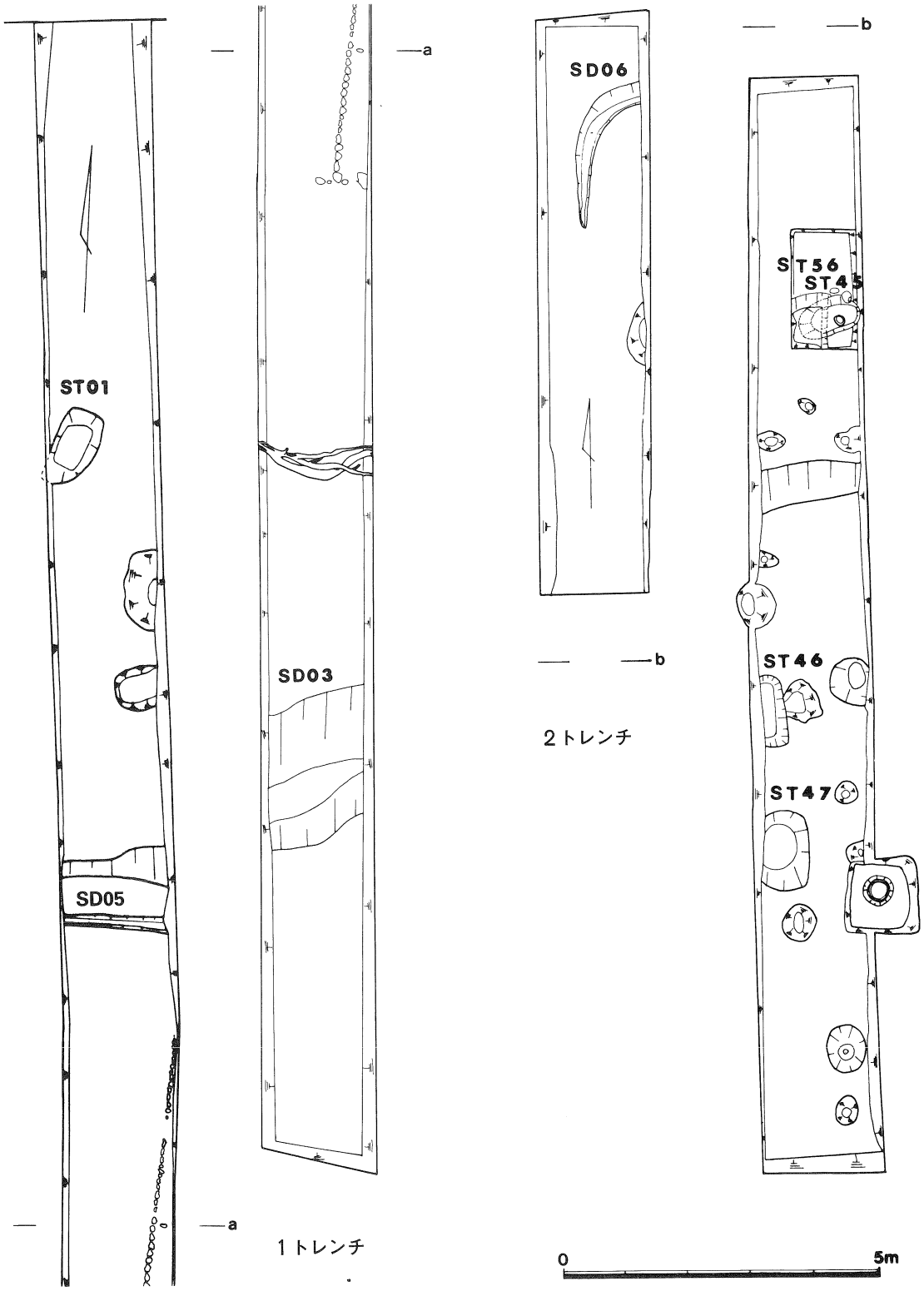


fig. 125　1トレンチ・2トレンチ平面図

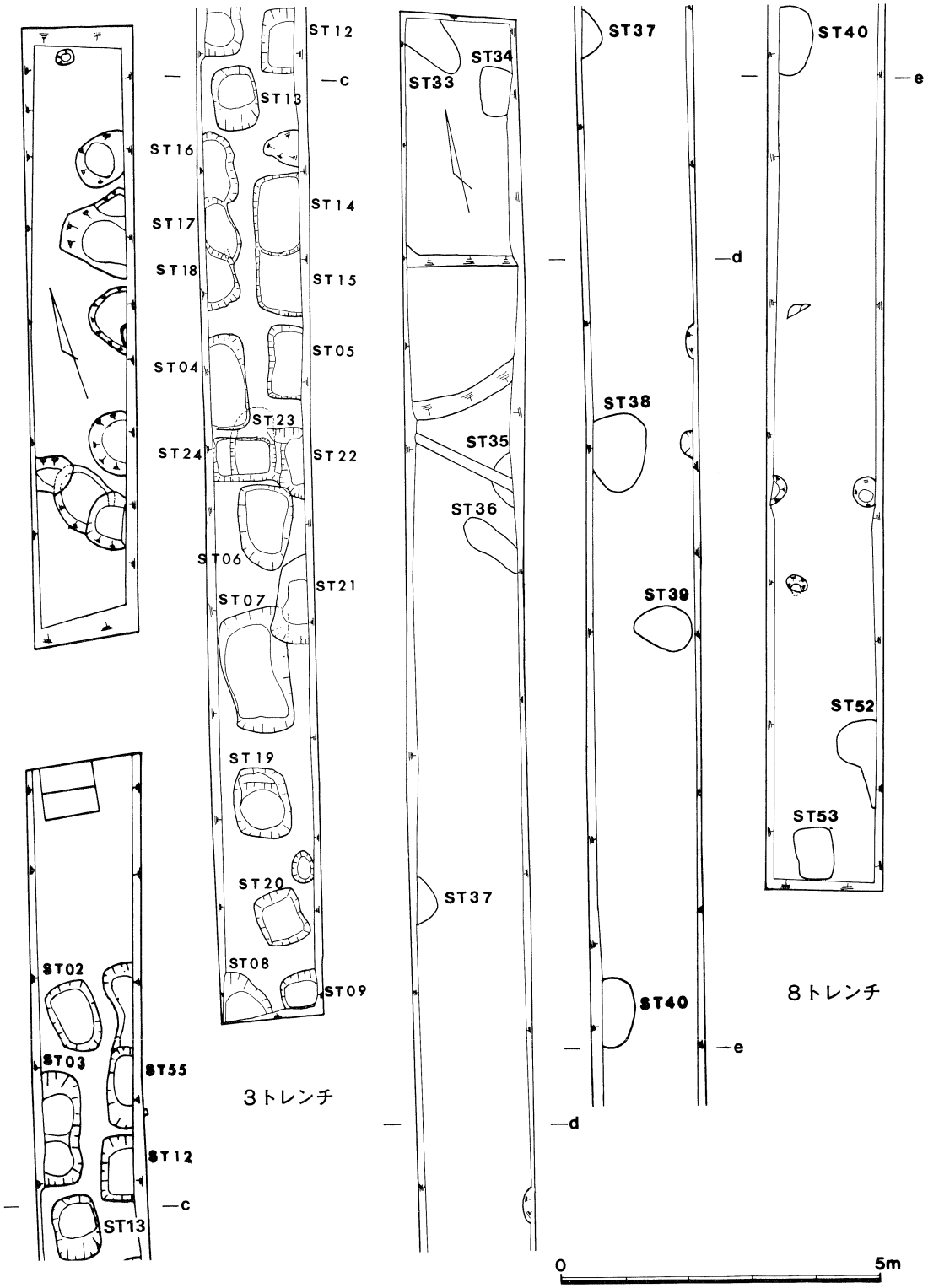


fig. 126　3トレンチ・8トレンチ平面図

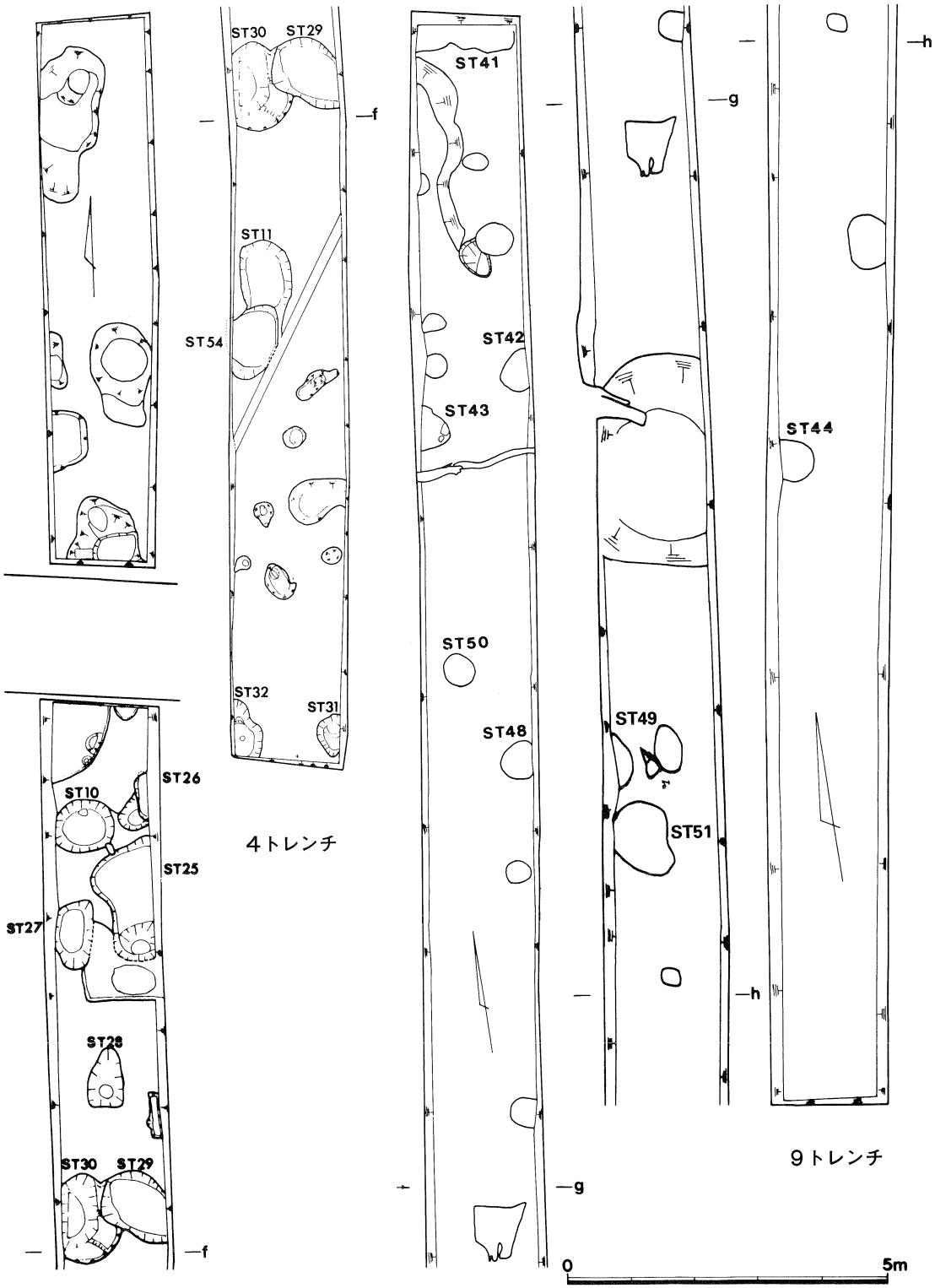


fig. 127　4トレンチ・9トレンチ平面図

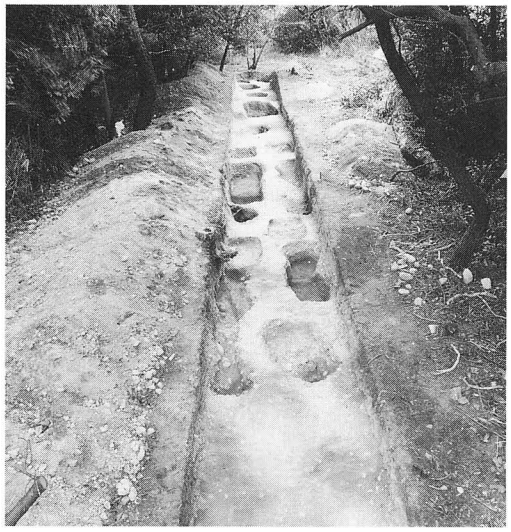


fig. 128　3トレンチ南半(北から)

fig. 129　4トレンチ

fig. 130　ＳＴ04(南から)

fig. 131　ＳＴ07(南から)

fig. 132　2トレンチ甕出土状況

fig. 133　ＳＴ06(南から)

3．遺　物

A　埴　輪

埴輪は五色塚古墳周溝（ＳＤ01）と５トレンチＳＤ02、13トレンチＳＤ04から出土している。

ＳＤ01内からは円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪（家・衣蓋・靫）の破片が出土し、ＳＤ02からは円筒埴輪片、ＳＤ04からは円筒埴輪片と形象埴輪片が出土している。このうちＳＤ01出土の円筒埴輪は、長径50㎝、短径40㎝、厚さ1.5㎝、第一段タガまでの高さ19㎝を測る楕円形のものである。透孔は円形で外面にたて方向のハケ調整を施している。

B　土師器

11トレンチ南半のＳＤ01溝底にピットを掘り据えられていた壺である。直径約10㎝、残存高８㎝を測り、平底で底部の切り離しは、回転糸切り手法による。胎土は粗くもろい。遺物の時期は室町時代以降に降るものと考えられる。

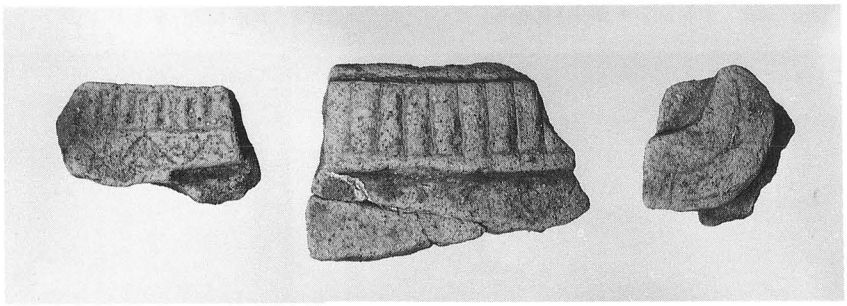


fig. 134
出土埴輪片

4．まとめ

今回の舞子病院内の遺跡確認調査によって、五色塚古墳周溝が後円部は東側までは確実に巡ることが明らかになった。周溝は西側肩が検出されていないが、幅は６ｍ、深さ0.3ｍを測り、南へ行くに従って徐々に浅くなっている。No.11トレンチ北端と南端の周溝底のレベル差は、30㎝である。掘と周溝との間には、埴輪が巡らされていたことが明らかになった。

一方、No.１トレンチ、No.５トレンチ、No.13トレンチで検出された溝は、五色古墳と同時期の溝と考えられるが、どのような目的で築かれた溝かは不明である。

No.２～４トレンチと、No.８・９トレンチでは、五色塚古墳と関連する遺構は検出されず、近世の土葬墓群が発見された。土葬墓は、両墓制の埋墓にあたるもので、塚印を墓上におくものもみられた。人骨の遺存状態が比較的良好なものをみると、すべて屈葬であった。副葬品は全体的にみて貧弱で、被葬者が生前愛用していたキセルやかんざし、指輪などの装身具類や供献された碗、皿類、六文銭などがある。土葬墓の年代は、これらの副葬品から18世紀後半から19世紀と考えられ、約一世紀の間に営々と築かれたものと思われる。

10. 敦盛塚（あつもりづか）

1．はじめに

「敦盛塚」は、神戸市須磨区一ノ谷町に所在し、鉢伏山の南麓裾部に立地しており、現在の山陽電鉄須磨浦公園駅より西方150ｍの国道２号線沿いに位置している。

敦盛塚は、花崗岩製の五輪塔で、最下段の地輪の下半部は地中に埋れており、現状での地上部分の高さは約3.4ｍを測る。五輪塔の四方には、梵字が刻まれている。

地輪は南北1.26ｍ、東西1.25ｍ、地上に出ている部分の高さは、約40㎝で、２枚の石をつなぎ合わせてできている。

この付近は、源平の一ノ谷合戦場として知られ、寿永３（1184）年２月７日に、当時16歳の平敦盛が熊谷次郎直実によって首を討たれ、それを供養するためにこの塔が建立されたという伝承から“敦盛塚”の名で呼ばれるようになった。この他に源平両軍の戦死者“あつめ塚”であるとか、北条貞時が平家一門の冥福を祈って、弘安年間（1278～1288）に建立した等諸説がある。

須磨寺に残された『当山歴代記』には、文禄５（1596）年の地震で倒れたが、一夜にして復元したという記録があり、また寛政年間（1789～1801）に刊行された『摂津名所図会』の記載では、すでに現在の位置に立てられており、地輪の一部は地中に埋れた状態になっていたと考えられる。

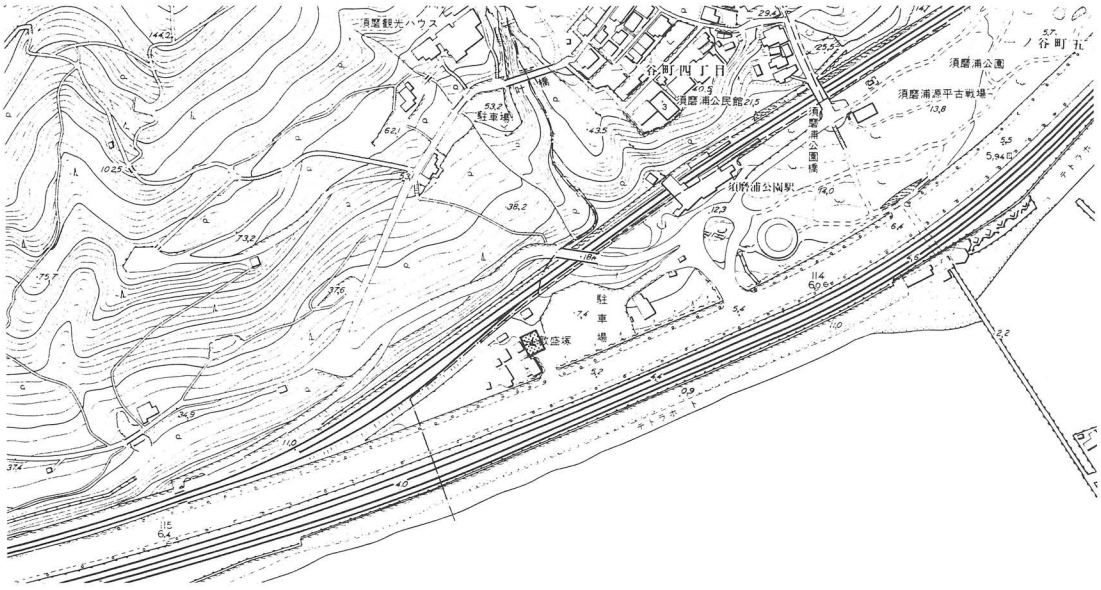


fig. 135　調査地位置図 1：5,000

2．調査経過

このたび、環境整備を実施するにあたり、昨年度、予備調査を行ったところ、地輪部が人為的に地中に埋められていることが明らかになった。

今回の調査は、現状の写真測量を行った後、五輪塔を解体し、地輪の地下埋没部の発掘調査を行って、埋納品の有無、修築等の建立から現在までの変遷を明らかにするために実施した。その後、この調査結果に基づいて、建立当時の姿に復元した。

3．調査の概要

五輪塔の解体

現状の写真測量を実施した後、空輪、風輪、火輪、水輪の３石をレッカーにより順次解体した。それぞれの石と石の接合部より、「寛永通宝」等の古銭をはじめ、木札、貝殻等を検出した。

空輪と風輪は一石になっており、空輪部は全長75㎝、最大径69㎝を測り、四方に「キャ・キャー・ケン・キャク」の梵字がみられる。風輪部は全長52㎝、最大径72㎝を測り、四方に「カ・カー・カン・カク」の梵字がみられる。風輪の下部には、全長15㎝、径20㎝の枘（ほぞ）が付く。

火輪は一辺12.8㎝×12.3㎝、高さ77㎝を測り、上面には、径約30㎝、深さ20㎝の円形の掘り込みがある。四方に「ラ・ラー・ラン・ラク」の梵字がみられる。

水輪は、高さ93㎝、最大径126㎝を測る倒卵形の石材で、上面はほぼ平担に仕上げられている。四方に「バ・バー・バン・バク」の梵字がみられる。

fig. 136
調査前現況

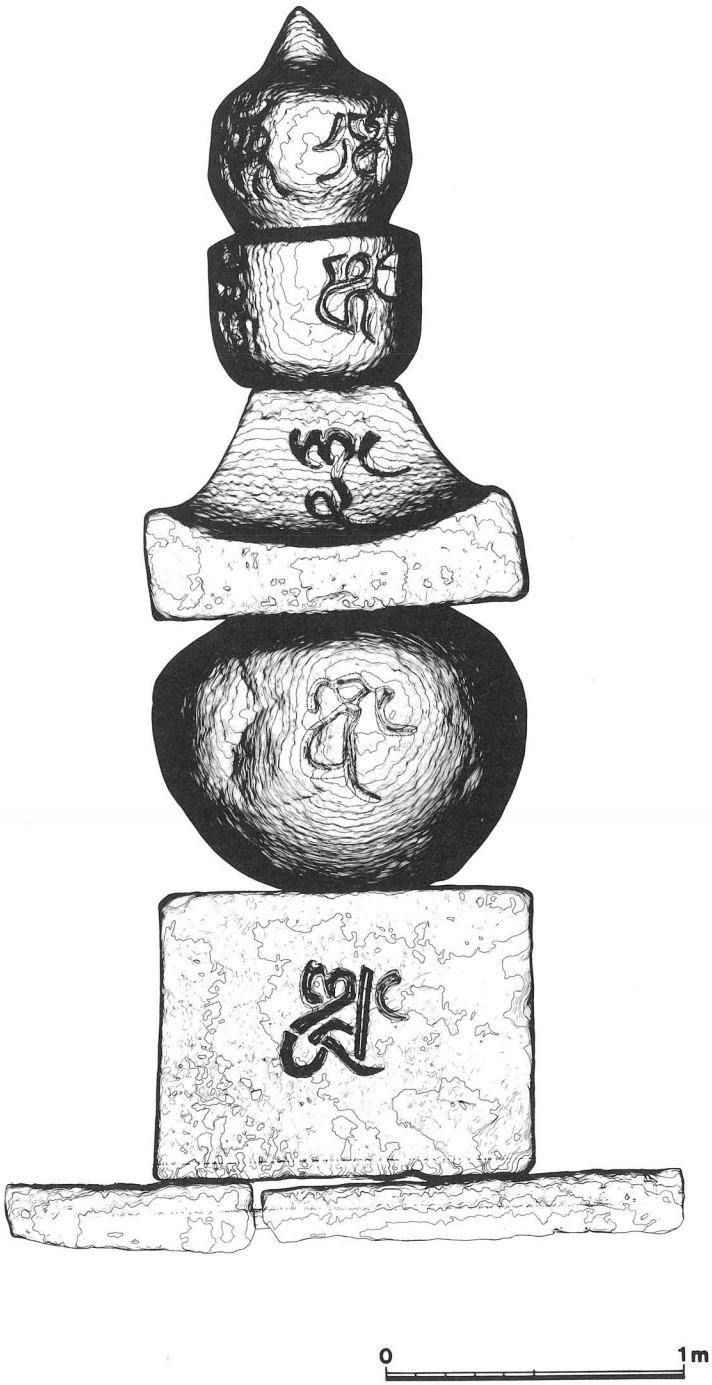


fig. 137　敦盛塚立面図(写真測量)

地輪周辺の調査　地輪の東側、西側及び南側に幅50cmの試掘トレンチ（Etr. Wtr. S_1tr）を入れた後、地輪を埋めた時の掘形の範囲を確認し、掘り下げた。

掘形は、南北3.2m、東西3.4m、深さ1.0mを測る。埋土は上層から順に、淡黒灰色砂礫土、黄茶褐色砂礫土、黄青灰色粘質土、灰褐色砂礫土、暗灰色粘質土で、地山は茶褐色砂礫土である。黄青灰色粘質土及び灰褐色砂礫土層より、寛永通宝や江戸時代の茶碗・皿等の磁器が出土している。

また、掘形の上層においては、径5cm～10cm大の礫が密に埋められており、中には20cm～30cm前後のものもある。

さらに、掘形より南方約5mのところに、土層を確認するため、1.5m×0.5mの試掘トレンチ（S_2tr）を入れたが、遺構、遺物ともに検出しなかった。

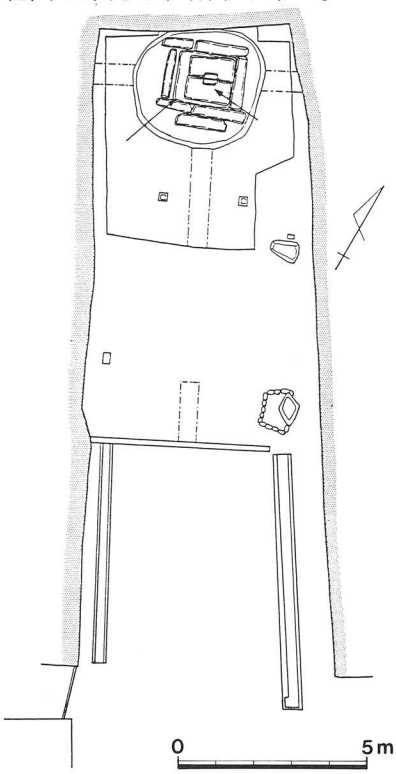


fig. 138　調査地平面図

fig. 139
地輪検出状況

地輪撤去

地輪は、長辺1.25ｍ、短辺0.63ｍ、高さ0.98ｍと、長辺1.24ｍ、短辺0.63ｍ、高さ0.98ｍの２つの石材を組み合わせている。上面にはそれぞれ、約40×25㎝、深さ30㎝のくり込みがあり、内面下方には半球形のえぐりが入れられている。四方に「 （ア・アー・アン・アク）」の梵字がみられる。

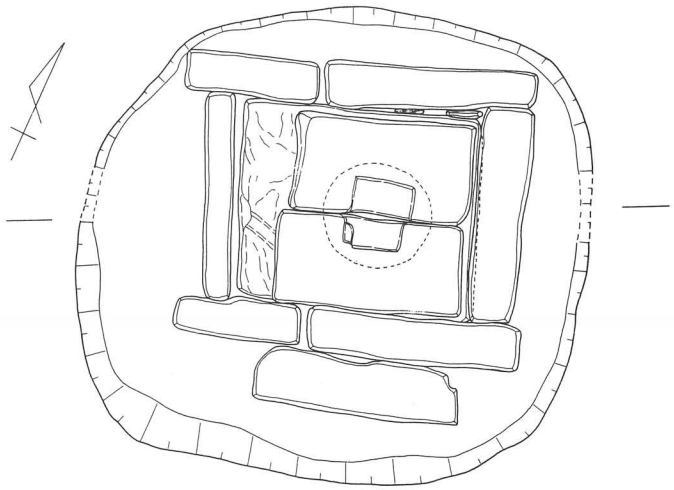
地輪の地下埋没部を掘り下げて精査すると、地輪の下に凝灰岩質砂岩の台座があることがわかった。

台座は南北1.32ｍ、東西1.6ｍ、厚さ0.25～0.35ｍの一枚石である。

この台座の上面は、東側の方が西側よりも若干下がっているが、地輪の上面を水平にするため、東側の方では、地輪の下と台座上面の間に、厚さ10㎝前後のやや平たい石を詰め込んでいる。

また、台座の周辺には、北側に２石、東側に１石、南側に２石、西側に１石の花崗岩製の長方形の縁石が、台座を囲むような形で検出した。南側の縁石のさらに南側で、花崗岩製の割石を１石検出した。

これらの割石は、いずれも幅が30㎝～40㎝で、全長約80㎝～140㎝、厚さ15㎝～20㎝を測る。石の表面土は、上面と側面が、比較的丁寧な調整がなされ、平滑に仕上げられている。



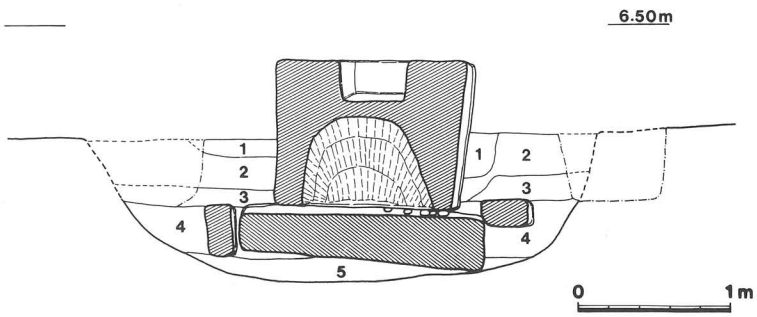


fig. 140
地輪・台座平面断面図

1．淡黒灰色砂礫土
2．黄茶褐色砂礫土
3．黄青灰色粘質土
4．茶褐色砂礫土
5．暗灰色粘質土

台座の撤去　台座と縁石をレッカーにより撤去した後、その下を掘り下げたが、遺構・遺物は検出できなかった。

五輪塔の復元　写真測量の成果を基にして、敦盛塚の復元作業を実施した。

まず、コンクリートによる基礎を築いた上に、台座及び縁石を設置し、地輪、水輪、火輪、風輪、空輪を順次レッカーを用いて積み上げていった。

復元した敦盛塚の高さは、現地表面から約4.0mを測る。

fig. 141　地輪・台座検出状況

fig. 142　台座検出状況

4．出土遺物

今回の調査での出土遺物は、五輪塔の石と石の間から、寛永通宝371枚の他、元豊通宝、聖宋通宝、太平通宝等の宋銭の模鋳銭や“奉納西国三拾（卅）三所巡礼”と書かれた木札を約30枚検出した。

木札は、幅3.5cm～4cm、長さ12cm～17cm、厚さ2mm前後の薄い板状のもので、表面及び裏面に墨書が残っている。

墨書の中には、年号が判別できるものがあり、現在のところでは“享保十六年亥年（1731）三月”及び“宝暦六丙子歳（1756）正月吉日”等を確認している。

また、地輪周辺の掘形内埋土より、寛永通宝5枚の他、江戸時代の磁器類（染付の碗、皿等）、土師器等が出土している。

fig. 143
水輪上面遺物出土状況

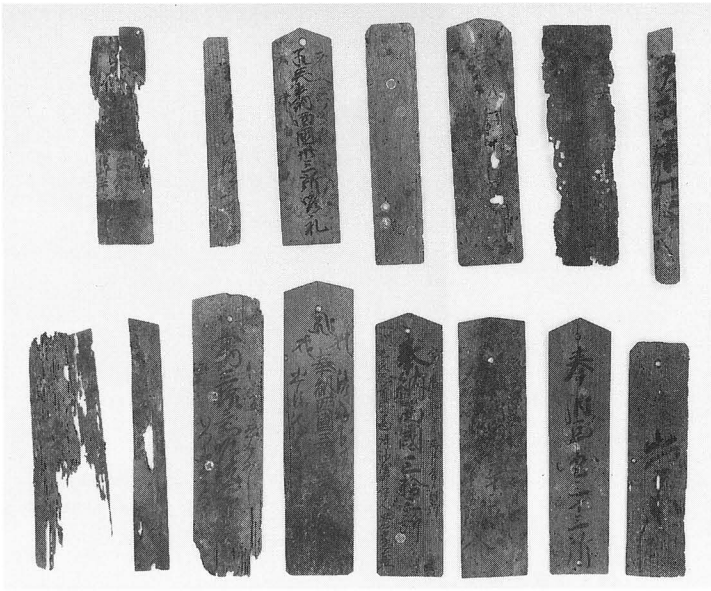


fig. 144　木札

5．まとめ

今回の調査で出土した遺物は、いずれも江戸時代以降のものばかりであり、木札の年号から見ても、宝暦年間（17世紀中ごろ）以降に埋納された可能性が高い。したがって、敦盛塚が現在の状態に再建されたのは、少なくとも宝暦年間以降であると考えられる。

残念ながら、今回の調査では、再建以前の状況については全く不明であり、発掘調査によって、建立当時の状態や埋納品に関することは明らかにできなかった。

しかしながら、当初予想していなかった台座や縁石が検出された。宝篋印塔の下に台座や縁石をもつ例はあるが、五輪塔の下に台座をもつ例は、極めて少ない。

しかも、五輪塔自体の全長も約４ｍあり、全国的にみても、かなり巨大なものである。

これらの点から見ても、「敦盛塚」の建立者が当時でも相当な財力を保持していたことは容易にうかがえるが、それが、どういった人物であり、またどういう目的で建立したかということについては、現在のところ不明である。

以上のごとく、今回の発掘調査においては、「敦盛塚」本来の性格についての成果を得ることはできなかったが、今後の調査・検討により新たな知見を得ることができるようになるだろう。

fig. 145
復元完成後現況

11. 楠（くすのき）・荒田町（あらたちょう）遺跡

1．はじめに

楠・荒田遺跡は神戸市営高速鉄道建設工事に先立つ立会調査によって発見された遺跡である。昭和53年10月から昭和54年３月まで軌道予定部の発掘調査を行った結果、弥生時代前期の貯蔵穴群や中期の木棺墓・竪穴住居、古墳時代後期の竪穴住居、平安時代の柱穴等の遺構が多量の遺物を伴って検出された。

今回のは、ホテル建設事業に先立ち、昭和60年８月から開発用地内、約700㎡を対象に約２ヵ月の発掘調査を実施した。

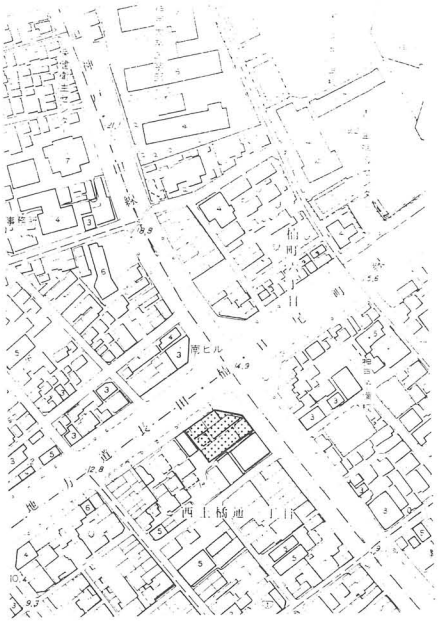


fig. 146　調査地位置図 1：5,000

2．遺跡の立地

当遺跡は六甲山南麓の中位段丘上の緩斜面、標高10～16ｍ付近に位置し、西側には旧湊川がながれていた。旧湊川の流量は多く、その沖積作用で六甲山南麓で最も大きい平野部を当遺跡の南方に形成している。

当遺跡周辺は市街地の中にあって最も遺跡の分布の密集する地域の一つで、東方約800ｍには縄文時代早期から弥生時代前期まで続く宇治川南遺跡がある。宇治川南遺跡では縄文時代後期・晩期に関東・東北地方の土器と関連するものが出土するほか、大分県姫島産と考えられる黒曜石が晩期前半の土器に伴って出土した。また、神戸大学医学部構内においても、縄文時代後期の土器の出土が知られている。

弥生時代の遺跡としては、湊川西岸の丘陵上に位置する東山遺跡や、南海産のゴホウラ貝の腕輪が壺型土器の中から発見された熊野遺跡などがある。

古墳時代前期の集落は不明であるが、背後の丘陵上には夢野丸山古墳や会下山二本松古墳などの竪穴式石室を内蔵する古墳がある。また、荒田神社には横穴式石室を主体部とする後期古墳があったことが、西摂大観などの記録から知られている。

平安時代後期には平清盛の別邸「雪の御所」・福原京が造られたのもこの付近と推定され、最近、神戸大学医学部の校舎建て替え工事に先立つ発掘調査ではその一部と考えられる掘立柱建物や大溝の一部が発見されている。

3．調査の概要

今回の調査区は、農地の開墾時の削平や以前の建物の基礎などにより攪乱を受けていたが、弥生時代前期から中期初頭の貯蔵穴群、中期中頃の掘立柱建物・土坑・溝などを検出した。

貯蔵穴

貯蔵穴は、16基検出された。この内７基が前期末、４基が中期初頭のもので、いずれに属するか明らかでないものが５基ある。平面形は正円をなし、水平な底から垂直に壁が立ち上がっている。大きさは直径約1.1ｍ程の小型のものと、1.5ｍ程の大型のものがある。深さは現在30㎝～80㎝と幅があるが、本来は１ｍを超えたものと考えられる。

貯蔵穴内の土の堆積状況はやや中凹上をなして埋没しており、底面から20㎝程、遊離した状態で土器や石器類が出土する。貯蔵穴内からは、これらにまじり、堅果類や獣骨・魚骨などが発見されている。

fig. 147　貯蔵穴（ＳＫ01～04）

掘立柱建物

調査区の南西隅で発見され、一部は調査区外へ延びる可能性がある。現状からは東西１間（3.5ｍ）×南北２間（1.4ｍ）の建物が復元される。伴出土器から中期中頃と思われる。

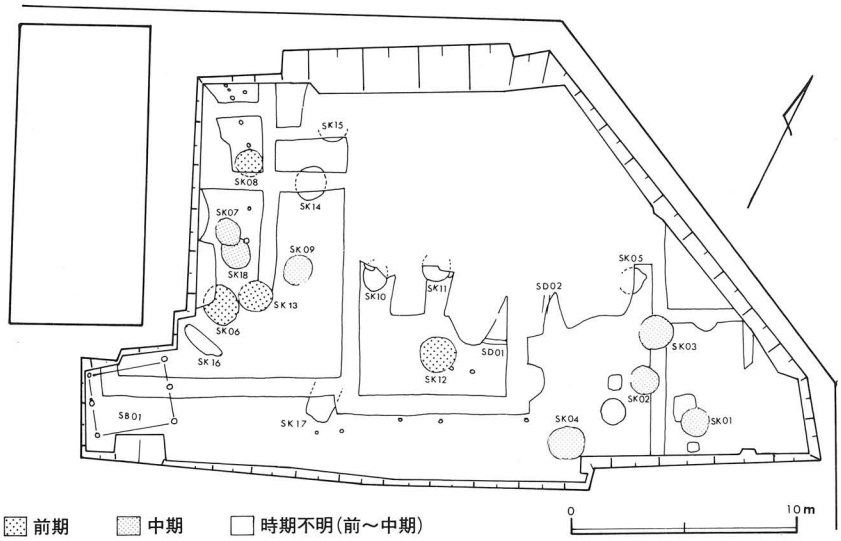


fig. 148　調査地遺構平面図

その他の遺構　その他、土坑２基と溝１条を検出したが、時期は中期中頃に属する。しかし、攪乱を受け破損が著しいことなどから、その性格については不明である。

4. 遺　物

今回の調査で出土した遺物は整理用コンテナにして約50箱程度である。その多くは前期末から中期初頭のもので、中期中頃のものが少量である。土器の様相は昭和53年度調査の出土遺物と同様のものが多い。

土　器　fig. 149、150は前期末のものであるが、紋様の中心をなす篦描沈線紋が多条化の著しいもの（1．2．5．6．8）と無紋のもの（3．4．7．9．10）に分かれる。

また、８は太細併用沈線紋を頸部に持つもので和泉地方からの搬入品と考えられる。３の甕形土器は口縁部に断面三角形の張り付け凸帯をもつ播磨型と呼ばれるものである。この他、胎土中に多量の結晶片岩片を混じえる紀伊型の甕形土器も出土している。11は細い張り付け凸帯により特殊な紋様を表現する壺形土器の胴部破片である。

fig. 152はＳＫ06で出土した中期初頭の土器である。

石　器　今回の調査で出土した石器は石鏃が56点と最も多く、楔型石器・刃器・磨製石包丁の順になり石錐は少ない。打製石器の素材は全てサヌカイトでフレイクやチップも数多く検出した。また、打製石器を作る際に用いたハンマーストーンなども発見されている。

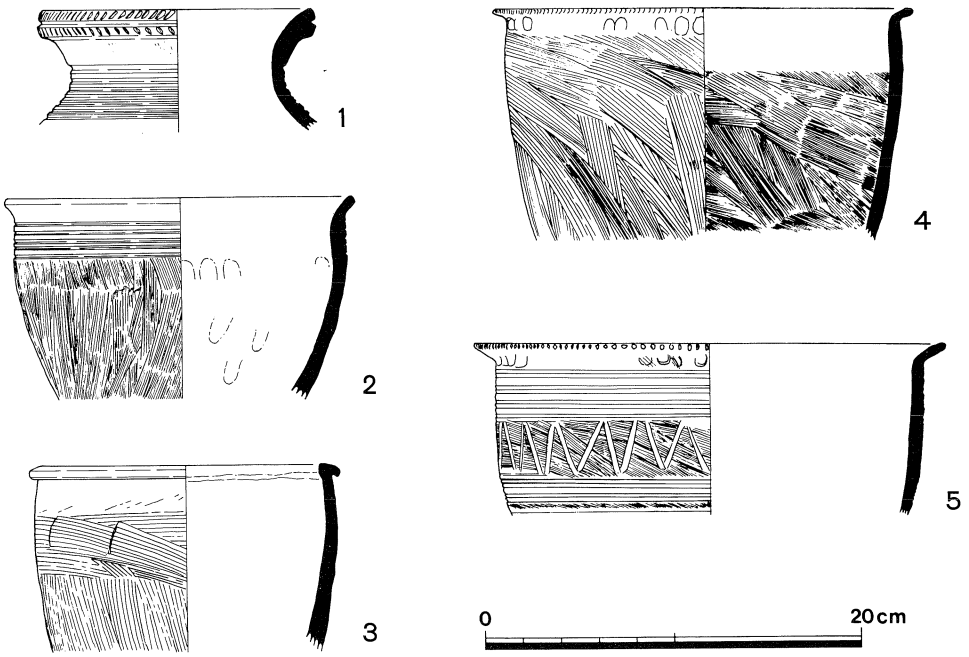


fig. 149　ＳＫ02出土土器実測図

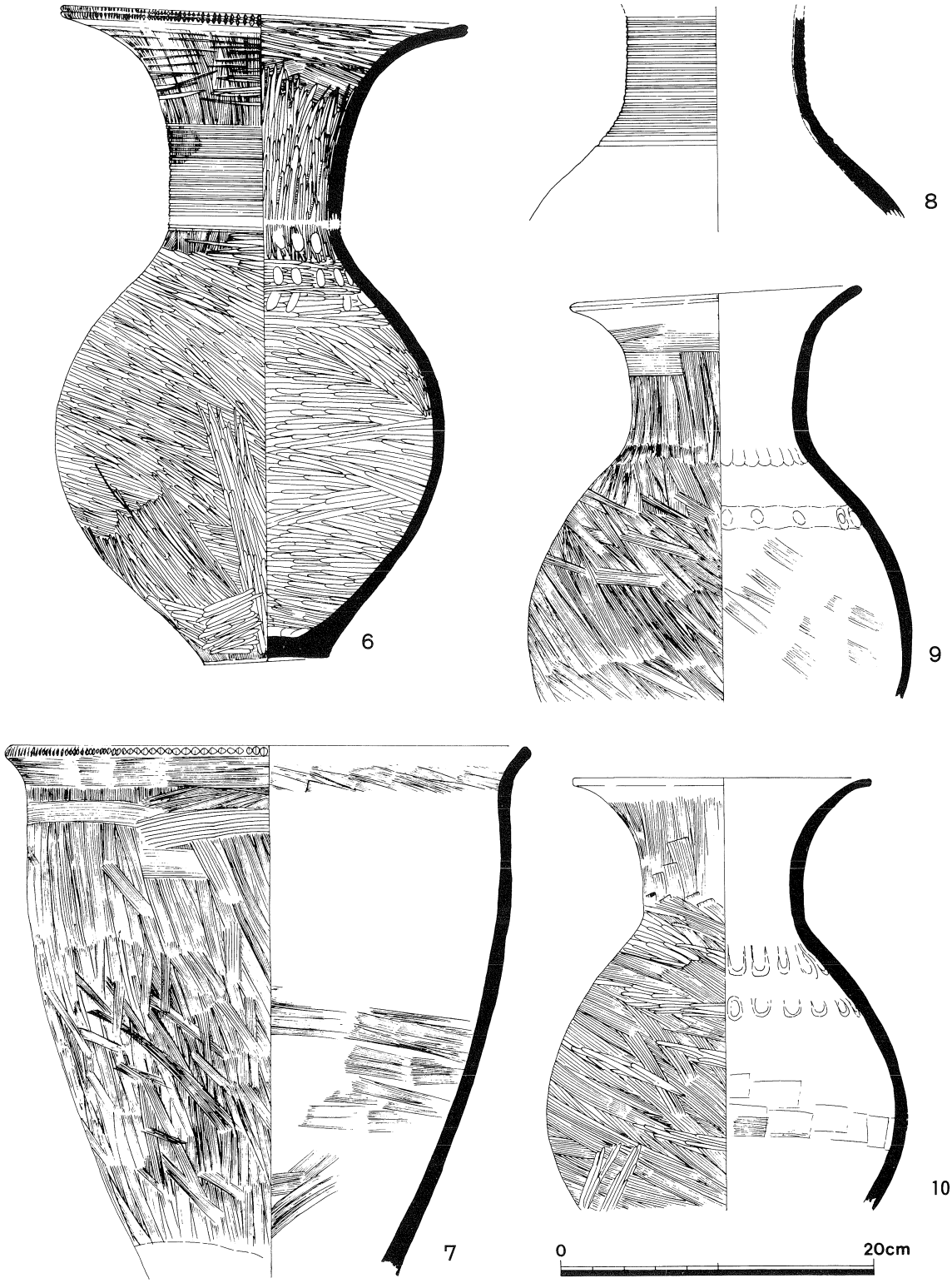


fig. 150　ＳＫ04出土土器実測図

5. まとめ

楠・荒田町遺跡において発見された貯蔵穴は昭和53年度調査のものを含めて、46基となる。周辺が市街地の中心にあり、攪乱などを多く受けている状況や分布域などを考慮すると、その数は100をはるかに越えたものと考えられる。貯蔵穴の多い北部九州地方や関門地域を除けば、現在知られる貯蔵穴の最も多く発見された遺跡と言える。現在まで当該期の集落空間との立地関係は不明であるが、今後の調査に期待したい。

次に、ここで発見された貯蔵穴群は、分布状況などから、前期末から中期初頭にかけて継続して作られたものと考えられる。このことから貯蔵穴内から発見された前期・中期と分類した土器群は、連続した時代の所産といえ、土器の型式変化を研究する上での重要な基準資料となろう。

また、当遺跡では53年度調査でも中期初頭の段階に紀伊型甕や和泉地方の篦櫛併用紋の壺などが搬入されていることが確認されていた。今回の調査では前期末の段階でこの両地域との交流を裏付ける資料が発見され、これらの地域との恒常的な交流がなされたことが窺われる。

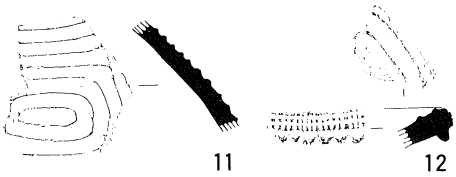


fig. 151　出土土器拓影　S＝1/4

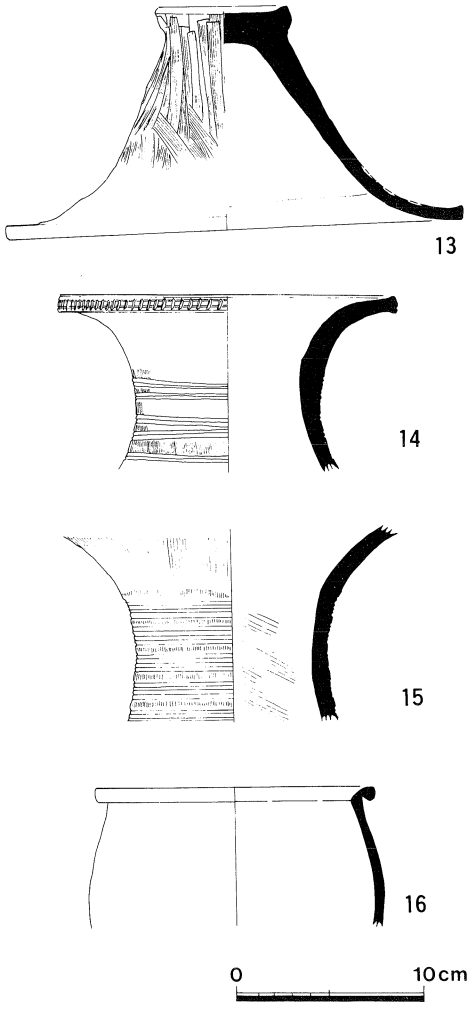


fig. 152　ＳＫ06出土土器実測図

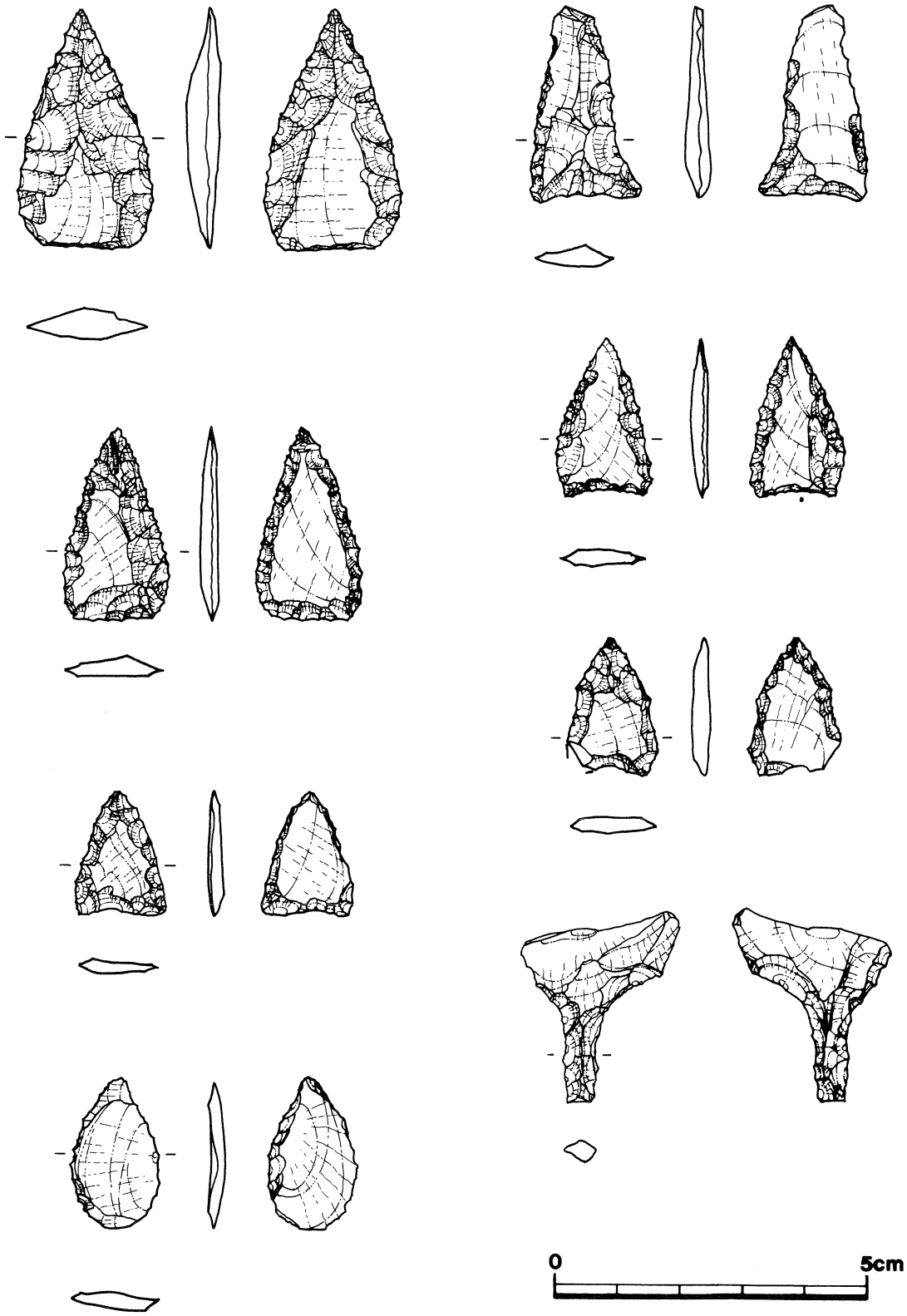


fig. 153　貯蔵穴出土石器実測図

12. 三川口町（みかわぐちちょう）遺跡

1．はじめに

三川口町遺跡の所在地は、平清盛が開いたとされる大輪田泊推定地に接しており、早くから市街化が進んでいる。このため、埋蔵文化財については未知の状態ではあるが、位置的な条件から、その存在は十分予期されるものであった。

昭和60年10月に実施した試掘調査で現地表下約1.5mで、中世の土器片を含む土層を確認したため、今回の発掘調査を実施することとなった。調査対象地区は新築建物の基礎によって破壊を免れない部分にのみ設定し、その他については現状保存の処置をとった。

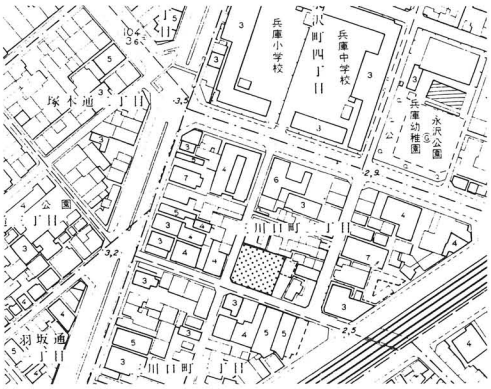


fig. 154　調査地位置図 1：5,000

2．調査の概要

発掘調査を実施した地区は、便宜上１～16区と呼称している。

層　序

基本層序は下記のとおりで、試掘調査の結果と基本的には同一であるが、後述する河道の最深部ではさらに基盤層が深くなっている。なお、第Ⅰ層には第２次世界大戦時の戦災によると考えられる焼土面を含んでいる。

第Ⅰ層　攪乱
第Ⅱ層　淡黄色極細砂
第Ⅲ層　淡黄色シルト混り極細砂
第Ⅳ層　淡黒灰色シルト質中砂
第Ⅴ層　暗灰褐色シルト質細砂
第Ⅵ層　灰褐色極細砂（基盤層）

遺　構

調査地区のうち、13～16区にかけて河道を検出した。幅は15～20m、深さは最深部で約１mを測る。この河道の埋没状況から判断すると、最下層のシルト質極細砂内には多くの植物遺体（葦？）が包含される点、さらに上層はシルト層で構成される点から、河道と呼称しているものの、常に水流があったものとは考え難い。恐らく大きな河川に伴う後背湿地状の凹部を形成し、大きな氾濫時には水が入り込む程度であったと考えられる。

その他の遺構としては、河道と同時期のものと考えられる大小の落ち込みを４・７・12区で検出しているが、調査範囲が限られていたため、その性格については断定し難い。

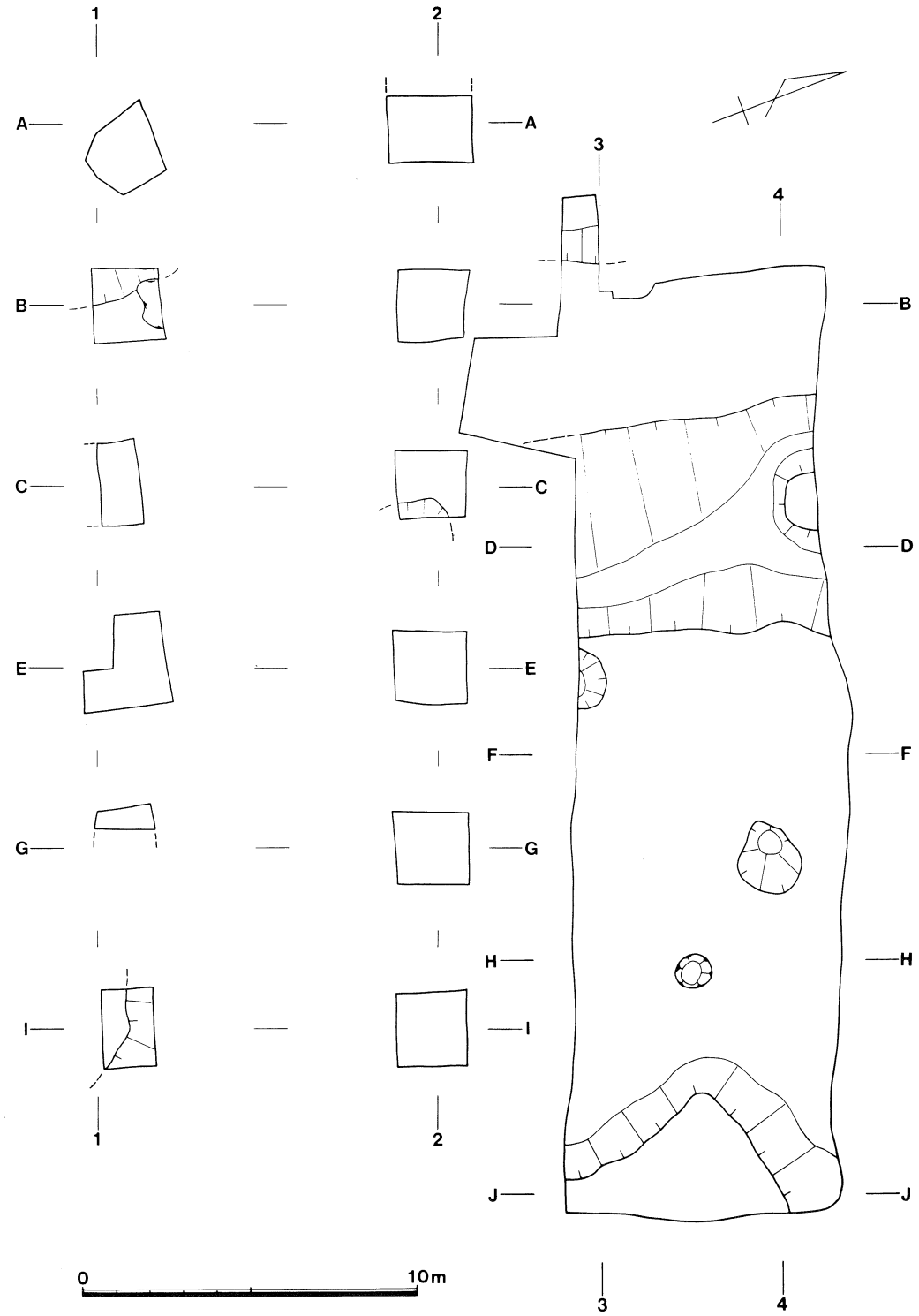


fig. 155　遺構全体平面図

遺　物　出土遺物の多くは、河道の埋没土とその上層にあたる第Ⅳ・Ⅴ層からのものである。出土遺物には縄文土器・弥生土器と鎌倉時代後半～室町時代後半にかけての土師器・須恵器・陶磁器・瓦器・銭貨・木製品などがある。

縄文土器　縄文土器は１点確認しただけであるが、口縁端部直下に１条の断面三角形突帯を巡らすもので、晩期後半に属する深鉢であろう。

弥生土器　弥生土器には、壺・甕が数点あり、数量的には中期のものが多い。畿内第Ⅰ様式（前期後半）の壺（図157－１）と第Ⅱ様式（中期）の広口壺（図157－２）は胎土中に角閃石を含み、茶褐色系の色調を呈することから生駒西麓産のものと考えられる。

fig. 156　縄文土器実測図

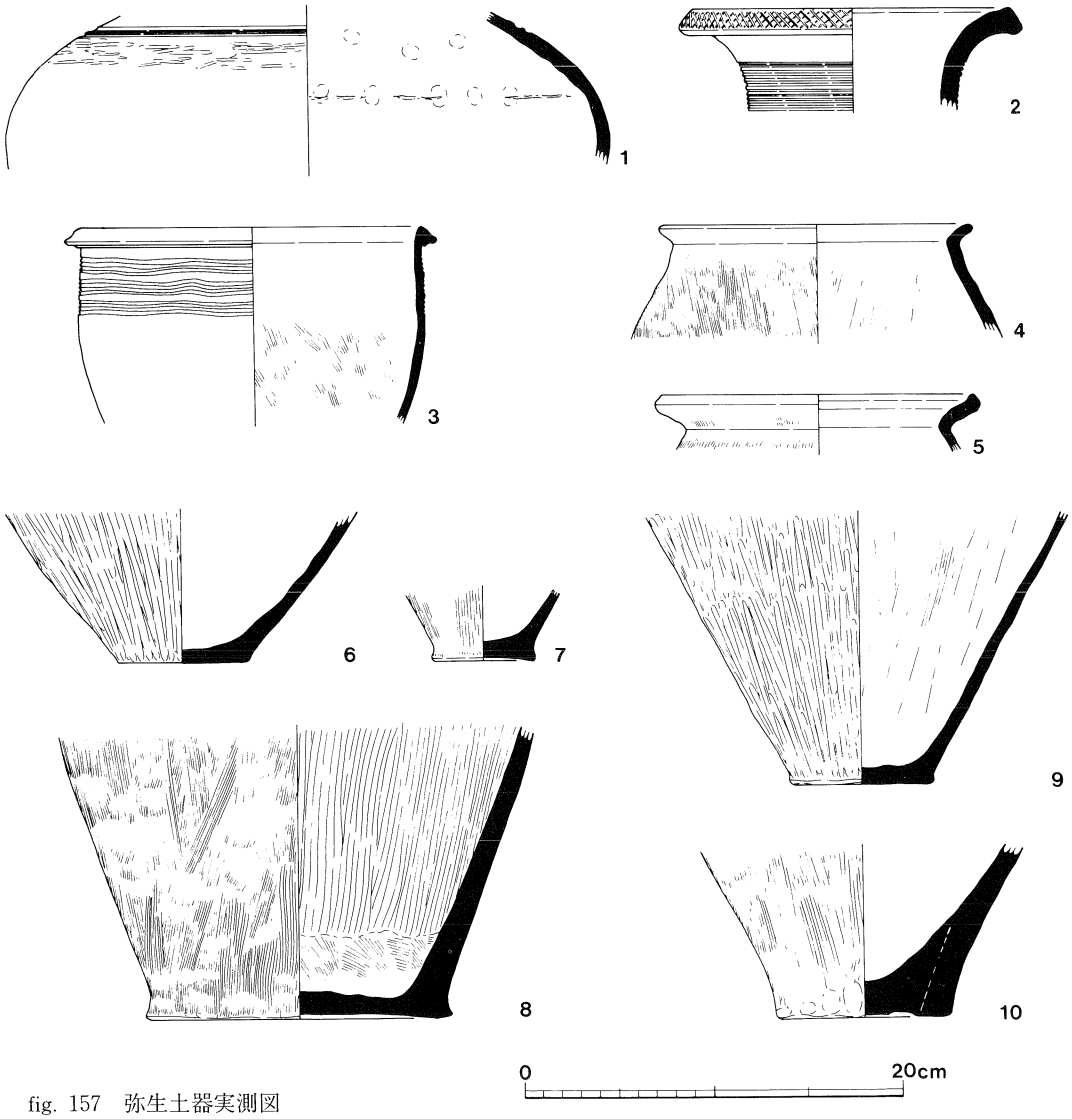


fig. 157　弥生土器実測図

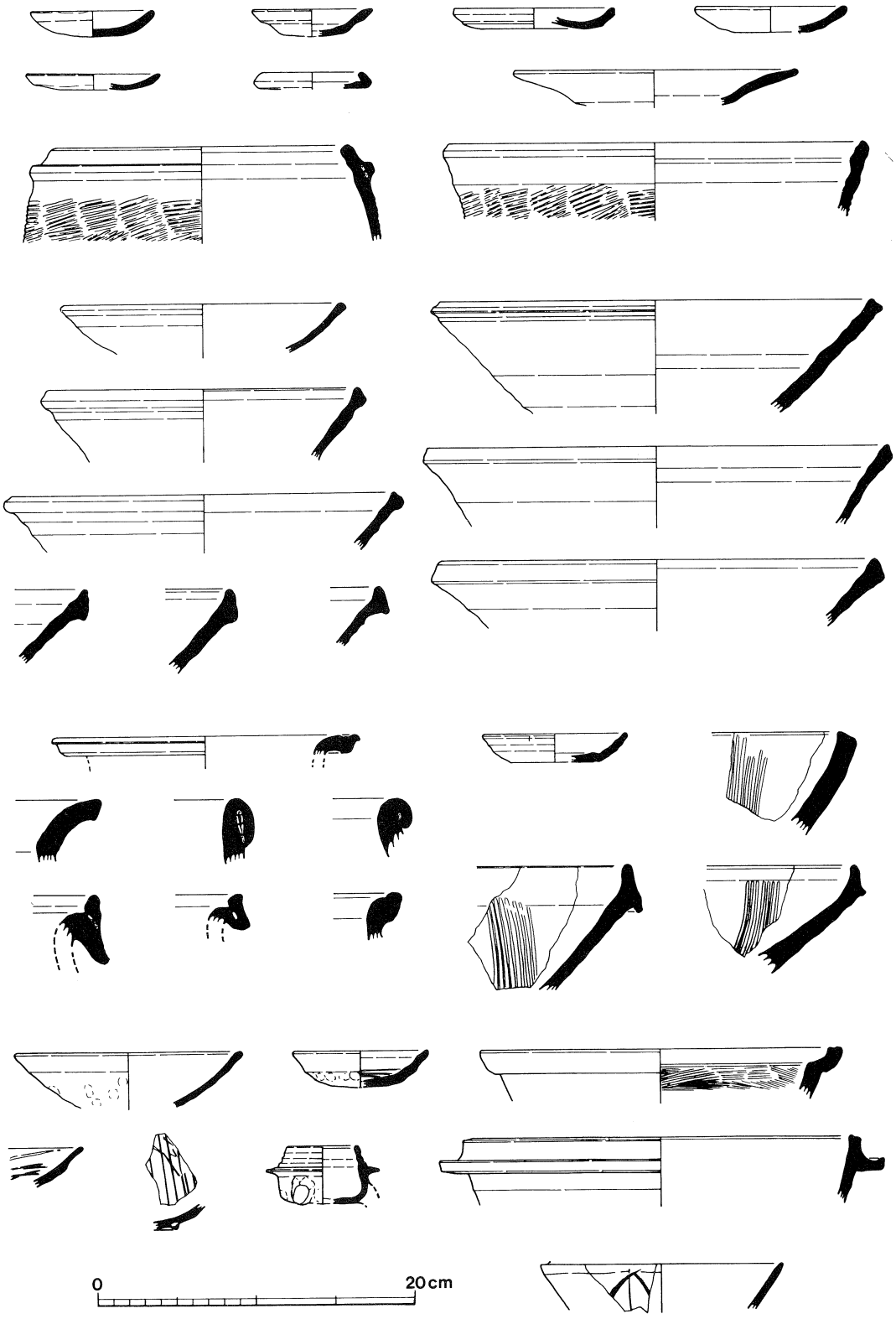


fig. 158　中世遺物実測図

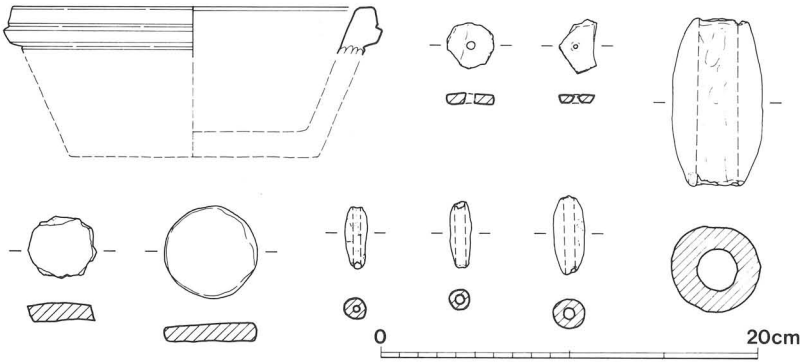


fig. 159
中世遺物実測図

中世の土器　土師器は、量的に最も多く、細片化が進んでいる。器種には皿・堝・釜等がある。須恵器はいずれも東播系須恵器と呼ばれるもので、埦・鉢を確認している。陶器には、壺・甕・鉢があり、備前焼と常滑焼を確認している。磁器には中国製の青磁碗・皿、瓦器には羽釜・香炉などがある。

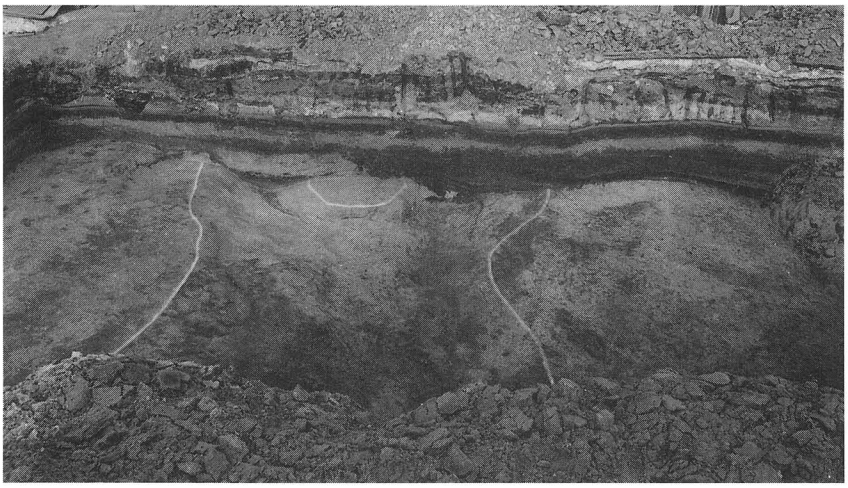


fig. 160
13～14区全景

fig. 161
15～16区全景

銭　貨　　銭貨は7枚確認している。このうち、判読可能なものは下記のとおりである。

番号	銭　種	初　　鋳　　年(西暦)
1	開元通宝	唐　　武徳４年(621)
2	嘉祐元宝	北宋　嘉祐元年(1056)
3	元祐通宝	北宋　元祐元年(1066)
4	□元□宝 □□元宝	不　　明

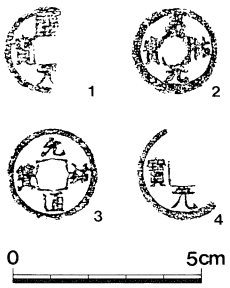


fig. 162　銭貨拓影

木製品　　木製品は木簡・下駄・箸などがある。木簡は両面に墨書が認められるが、現段階では判読できていない。なお、片面には復原径1.4cmを測る割印の半分が確認できる。

この他に中世の遺物として、滑石製石鍋・円板状土製品・漁網錘・ふいごの羽口などを確認している。

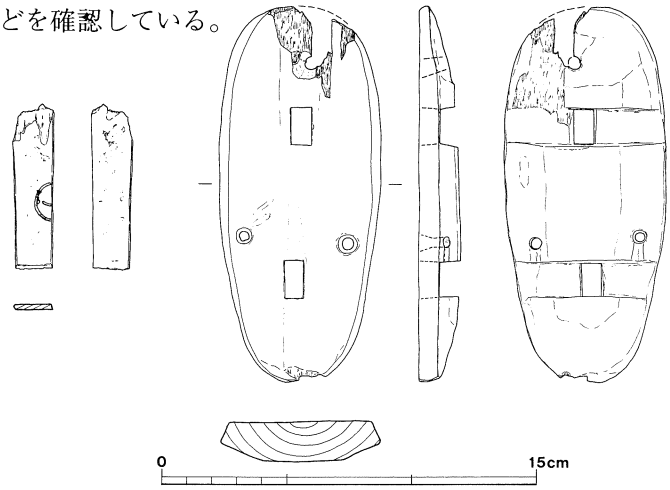


fig. 163
木簡・下駄実測図

3．まとめ

今回の調査では大輪田泊に直接関連するような遺構は確認できなかった。

また、時期的に符合するような遺物も確認できなかった。

今回の調査地は先学によって推定された古湊川の流路にあたる。今回検出した河道は古湊川に伴うものであると推定できる。

また一方で、出土遺物よりみると、数量的にも豊富かつ遺存状態も比較的良好で、距離的にそう遠くない地点に集落址が存在する可能性が極めて高いことが指摘できる。特に、延慶元年（1308）に東大寺が兵庫に初めて関を作って、関税を取っていたことや『兵庫北関入船納帳』には文安２年（1445）に備前焼の壺が輸送されていた記事が見えることなどから時期的にも今回検出した遺物の年代観と一致し、兵庫津に関連した集落址が今後の調査の進展に伴って確認されることを期待したい。

13. 西求女塚古墳（にしもとめづか）

1．はじめに

西求女塚古墳は、菟原処女をめぐる悲恋伝説に関わる古墳として古くからその名を知られた古墳である。しかし、大方の関心が伝説上の主人公の墓を、実際上のどの古墳に比定するかにあり、西求女塚古墳そのものの実態は、明らかではなかった。西求女塚古墳は、地元では大塚山とよばれ亭々たる樹木が繁茂する大きな塚であったが、明治年間に個人の所有に帰し、その別荘として利用されていたため、古墳はかなり荒廃したようである。

しかし、東求女塚古墳やヘボソ塚古墳のように遺物が出土したという記録もなく、暫くは閑却されたままであった。

ところが戦後、古墳のある味泥地区の区画整理事業が行われ、昭和39年に西求女塚古墳は都市公園として供用開始された。その際、公園としての利用を図るために、古墳上に遊具や遊歩道が設けられ、古墳自体は、全長100ｍの東面する前方後円墳として整備された。

それから20年の歳月が経過し、墳丘のいたみが著しくなってきたため、古墳を整備するという計画がもち上がり、整備上の資料を得るため、国の補助金を得て調査することになった。

古墳は、旧海岸線から200ｍ内陸へ入った標高7.5ｍの砂堆上に立地している。

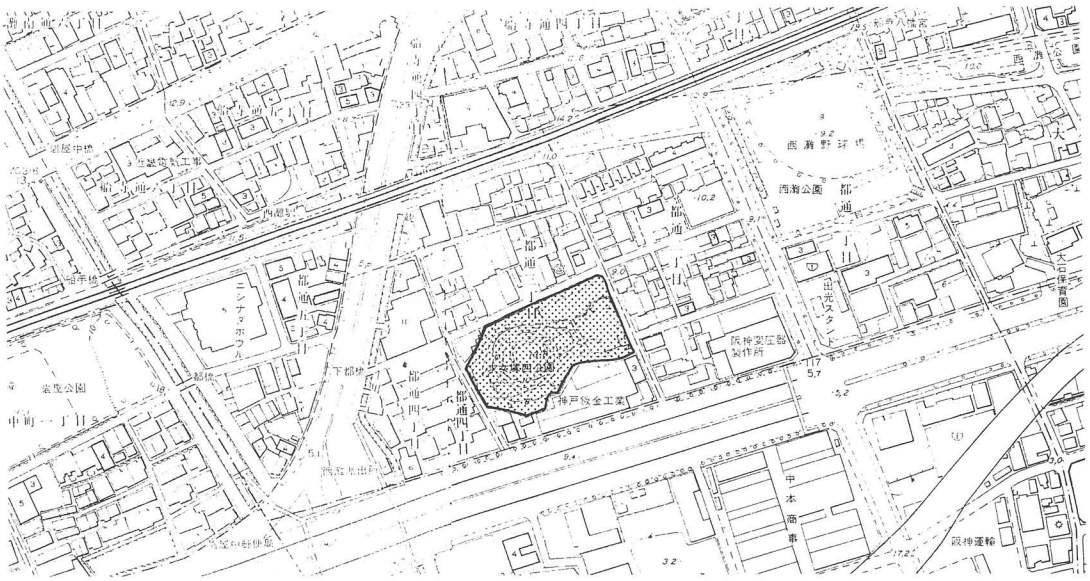


fig. 164　調査地位置図　1：5,000

2．調査の概要

墳頂部及び裾部の残存状態を調査するため、トレンチを設定した。

第1トレンチ

後円部仮中心点（Po）から仮主軸上の西側に第1トレンチを設定した。

a地区

後円部墳頂部をa地区と呼称する。長さ10.9m、幅2m（面積21.8m²）のトレンチである。

表土下約1.1～1.2mまでは公園造成時の盛土が行われている。Poより西へ2.6～3.5mの間でほぼ水平に黄色粘土が広がっている。その高さは標高12.85mである。この東西両側には、ほぼ同レベル若しくは低いレベルに小円礫群が広がっている。この小円礫群は直上まで攪乱されており、原位置を保っているか否かは速断できない。この小円礫群の西側には、板石群が幅1.5mの範囲に広がっている。この板石群も直上まで攪乱を受けており、その一部が攪乱土中にも散在しており、板石群の板石間にも上層の攪乱土層と同一の土層が部分的に含まれていることから、すべての板石が原位置を保っていると断定できない。

この板石群の西端には再び黄色粘土があり、その西壁はほぼ垂直に落ち込んでいる。

西端の黄色粘土から西側は標高約11.50mまで攪乱を受けており、攪乱層からは近代瓦片などが出土している。この同一層中から、古式土師器の鼓形器台、小型丸底壺、二重口縁壺などが10数個体分出土している。さらに、トレンチ東南端の攪乱土中から銅鏡（獣帯鏡）片1点が出土している。

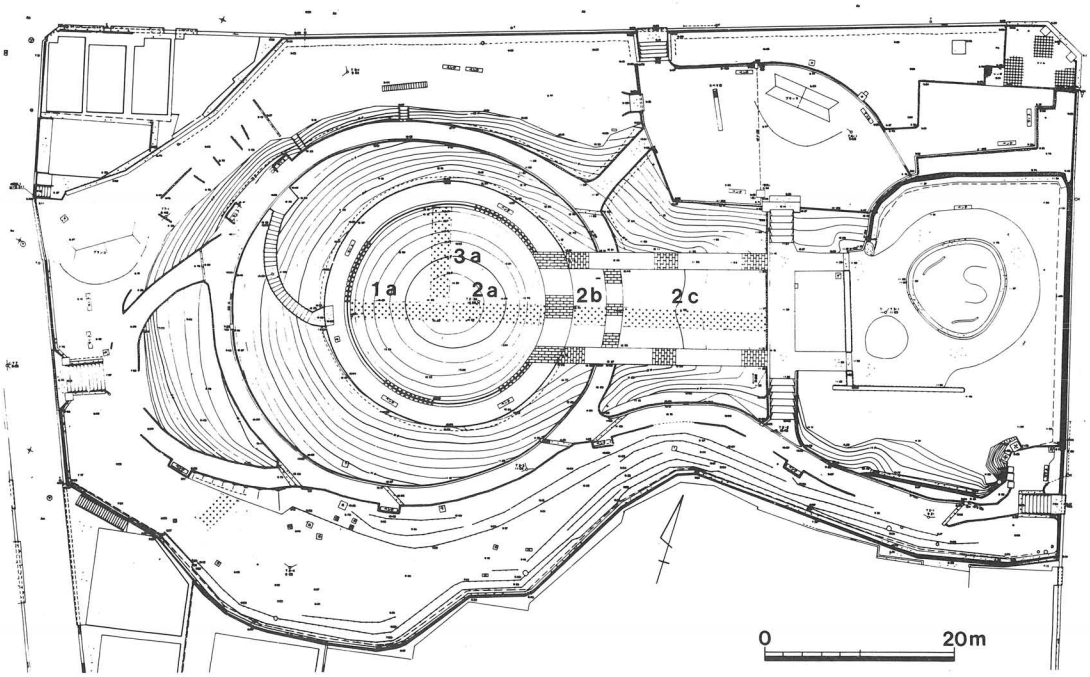


fig. 165　トレンチ位置図

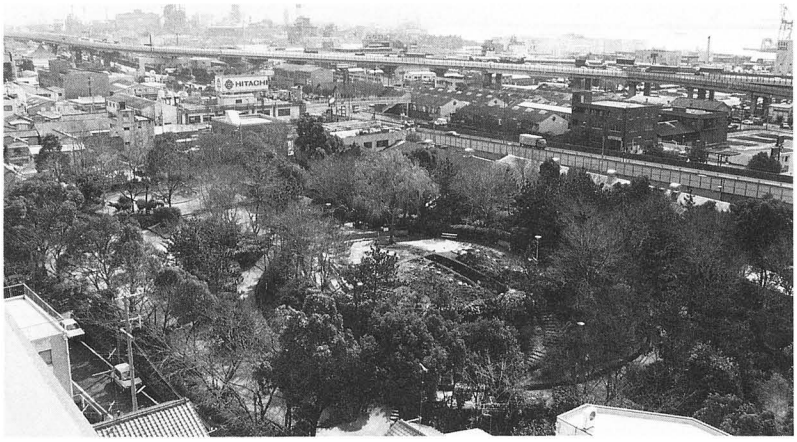


fig. 166
古墳全景

fig. 167
1トレンチa区
埋葬施設(西から)

fig. 168
埋葬施設
被覆粘土と礫群

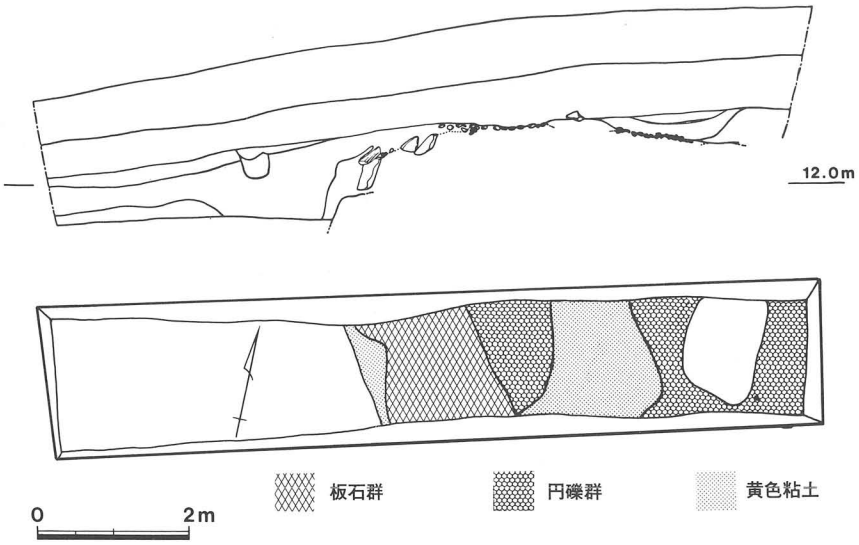


fig. 169
第1トレンチa区
断面および平面模式図

第2トレンチ　後円部Poから仮主軸上の東側に第2トレンチを設定し、後円部墳頂部をC地区、くびれ部をb地区、前方部墳頂部をc地区と呼称する。各地区ともトレンチの幅は2m、a地区は長さ9.8m、b地区は長さ3.4m、c地区は長さ15.2mで、面積は各々18.8m²、6.8m²、30.4m²を測る。

a地区　表土下約1.2～0.5mは、公園造成時に伴い攪乱土が盛土されている。

その下層は盛土の流土が5～50cm堆積している。その下層は墳丘盛土と推定できる黒色シルトのブロックを含む黄褐色砂質土層がひろがっている。

墳丘流土から若干の結晶片岩片と土師器片が出土している。

b地区　表土下2.5～2.6mまで攪乱盛土がなされており、標高約10m付近で墳丘盛土（淡灰色細砂層）を確認した。

攪乱土中には庭石や瓦片が多量に投棄されており、さらに家屋のコンクリート基礎や、西壁には石組みなどが認められた。表土下0.7mの黒色シルト層中に結晶片岩片やガラス片が出土している。

c地区　表土下1.9～2.4mは攪乱土が盛土されている。トレンチ中央のPoより東へ25～28mの間は、大きな庭石、家屋の基礎などが存在し、除去することが不可能であったため掘削できなかった。標高約10mから9.25m付近で、・墳丘盛土の灰色砂質土、黄褐色砂質土等を確認した。

さらにトレンチ東端で墳丘を断ち割ったところ、標高7.4mで褐色砂層に達した。その直上には約0.3mの黒色粘土が盛られ、さらにそれより上層が、瓦層堆積になっている。この褐色砂層の上層の黒色粘土は、墳丘盛土の最下層あるいは、盛土内の段築面レベルに相当する土層である可能性がある。

第3トレンチ
a地区

後円部Poから仮主軸に直交する北側のトレンチである。長さ10m、幅2m、面積20㎡を測る。

表土下0.7～1.3mは、公園造成時の盛土である。この盛土の下に墳丘盛土（黒色シルトのブロックを含む黄褐色砂質土）がひろがっている。

トレンチ南端で上記の盛土がゆるやかに落ち込んでいくが、これが第1トレンチa地区の埋葬施設掘形になるか否かは不明である。

第4トレンチ

後円部Poから仮主軸に対して南西へ45°のライン上に設定した。長さ4m、幅2m、面積約7㎡を測る。表土下0.5m、標高約8m付近で墳丘盛土（淡褐色砂質土）を確認した。墳丘盛土は全体的に砂質土で、帯状ブロックの黄褐色砂質土を含んでいる。

fig. 170
2トレンチa区
後円部墳丘盛土

fig. 171
3トレンチa区
後円部墳丘盛土

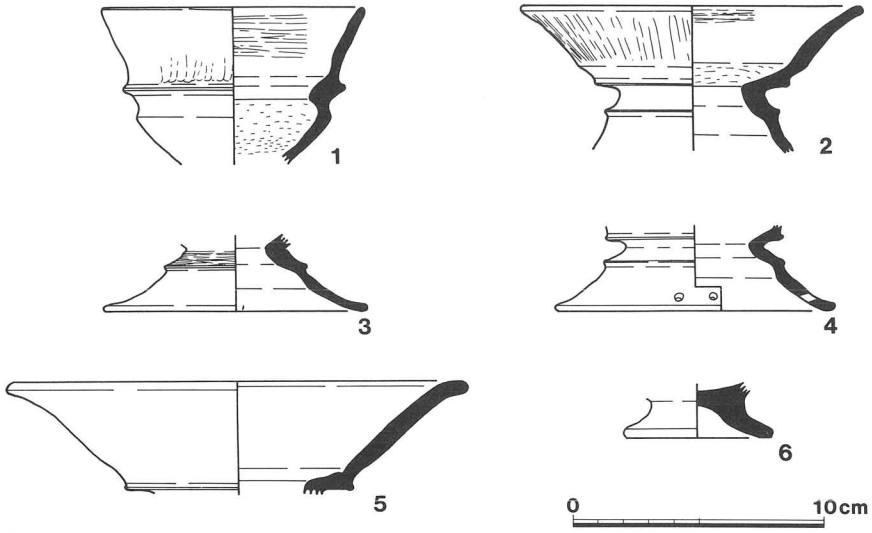


fig. 172
出土土器実測図

3．まとめ

今回の調査は、墳丘の残存状態を知るために実施したが、各トレンチとも削平、攪乱が著しく、墳丘構築時の墳丘面を残存する部分は認められなかった。

fig. 173　銅鏡片（第１トレンチａ地区出土）

しかし、第１トレンチａ地区では、竪穴式石室の壁体と推定される朱痕のある板石材を検出しており、鏡片が攪乱から出土していることを勘案して、盗掘を受けているもののある程度石室が残存していると推測できる。

第１トレンチの攪乱土から集中的に出土した古式土師器は、埋葬施設に接して出土したこと、あるいは集中的に出土している点、さらに他のトレンチの墳丘盛土には遺物が認められない点などから、これらの土器が埋葬施設に伴う遺物と推定できる。これらの土器は、布留式にほぼ併行することから、当古墳もこの時期に所属すると推定できる。

14. 郡家遺跡（城の前地区第12・13・14・15・16次調査）

Ⅰ．はじめに

郡家遺跡は、神戸市東灘区御影町郡家・御影、御影中町を中心に、東は住吉川、西は石屋川、北は阪急電鉄神戸線、南は国道２号線に及ぶと考えられる遺跡で、六甲山の南麓、天神川によって形成された扇状地から、沖積地にかけて立地する。今年度の調査地は、標高30ｍ前後の扇状地に位置する。

昭和58年度から、都市計画道路山手幹線、弓場線の建設に伴い、城の前週辺で発掘調査を実施しているが、今までの調査で、古墳時代を中心に弥生時代後期から鎌倉時代にわたる集落址、墓址、自然河道が発見されている。

今年度実施した調査は、城の前地区第12～16次調査であり、このうち弓場線予定地内では、第12、15、16次調査を行い、山手幹線予定地内では、第13、14次調査を実施した。

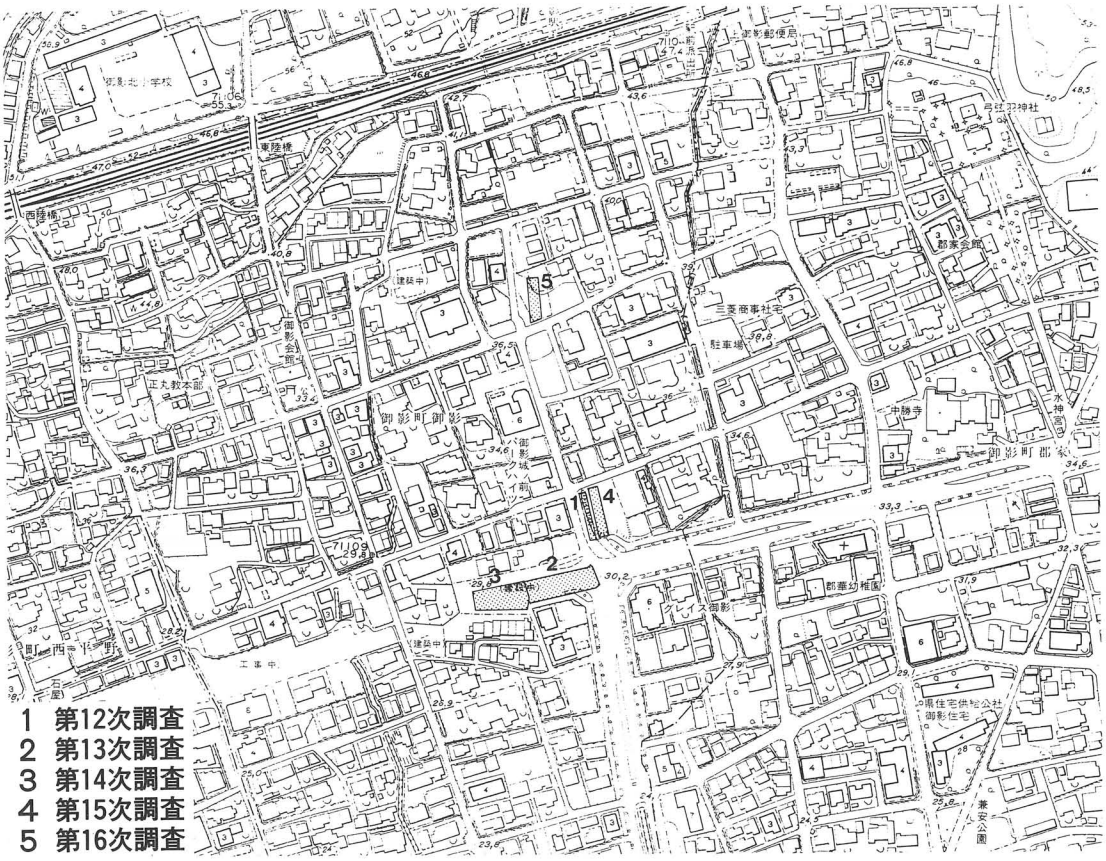


fig. 174　調査地位置図 1：5,000

Ⅱ．城の前地区第12次調査

1．基本層序　層序は表土、淡灰色砂、黄褐色土、暗褐色土、淡茶褐色砂質土の順に堆積している。淡灰色砂は中世の遺物を含む包含層で、トレンチ北部にのみ存在する。黄褐色土は古墳時代から中世にかけての遺物を含む層である。暗褐色土は弥生時代、古墳時代の遺物を含む包含層で、トレンチ中央部で厚くなっている。特殊な遺物としては、黄褐色土から鉄鏃が、暗褐色土からは石鏃、サヌカイトフレーク、軽石、鉄が出土している。

2．遺構と遺物　トレンチ北部で、鎌倉時代から室町時代にかけての掘立柱建物址２棟、古墳時代、中世の柱穴を検出した。

＜第１遺構面＞

ＳＢ01　南北４間、東西１間以上の掘立建物址で、柱間距離は1.8ｍである。柱穴痕の残りは良好で、中には八角形の柱のものも見られた。柱穴掘形から、鎌倉時代の土師器皿、須恵器片、炭が出土している。

ＳＢ02　南北２間、東西１間以上の掘立柱建物址で、柱間距離は1.8ｍである。柱穴掘形から、鎌倉時代～室町時代の瓦器埦、土師器片、炭が出土している。

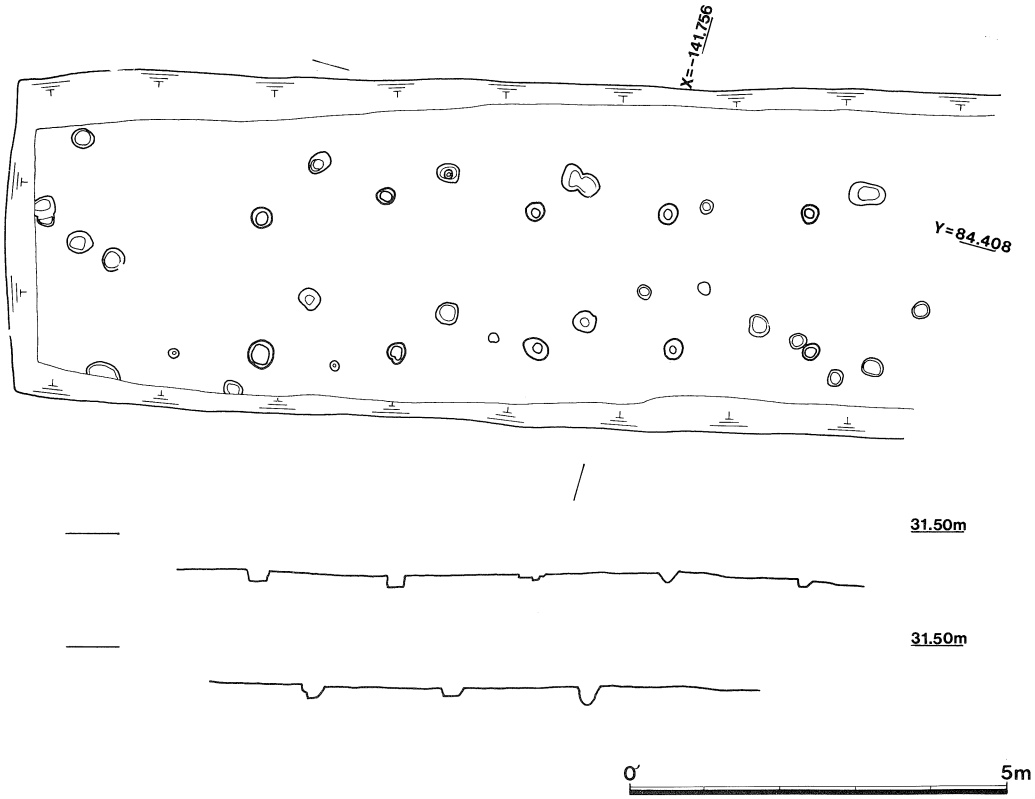


fig. 175　第１遺構面平面図

＜第２遺構面＞　トレンチ南部で、弥生時代終末期の土器棺墓１基、トレンチ中央部で、古墳時代中期の竪穴住居址１棟、その他、古墳時代の柱穴、落ちこみ等が発見された。なお、トレンチ南部では土石流が確認された。

ＳＴ01　壺形土器の口縁部を打ち欠いて棺とし、甕形土器の体部下半を蓋に利用している。土器棺は、径約50cmの円形の掘形に、頸部が南西方向、斜め上を向いた状態で埋められていた。土器棺内からは、骨片、炭が、掘形からは鉄器が出土している。壺形土器は、現存器高、腹径ともに約40cmの球形の器体を持ち、平底で、頸部に平たい突帯を巡らす。突帯には、クロス形のヘラ描きが施されている。

ＳＢ03　城の前地区第15次調査で発見されたＳＢ01と同一の住居址の西端を確認した。住居址の形は不整形であり、方形を呈していない。埋土中からは、６世紀初頭の須恵器、土師器が出土している。

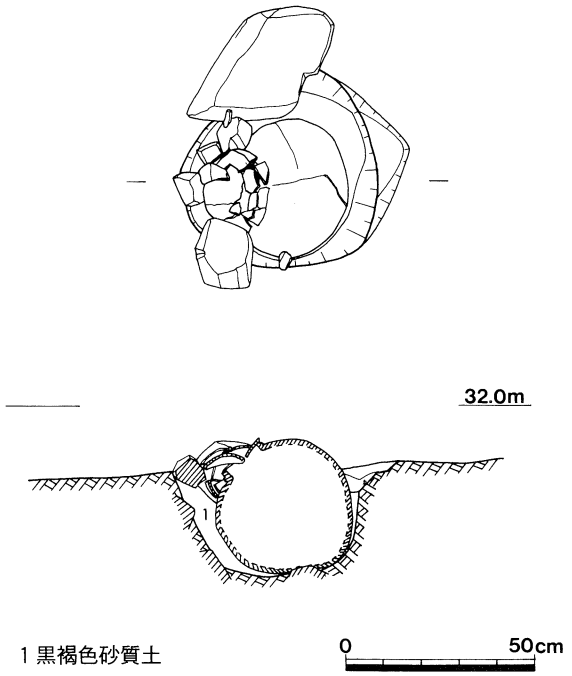


fig. 176　ＳＴ01実測図

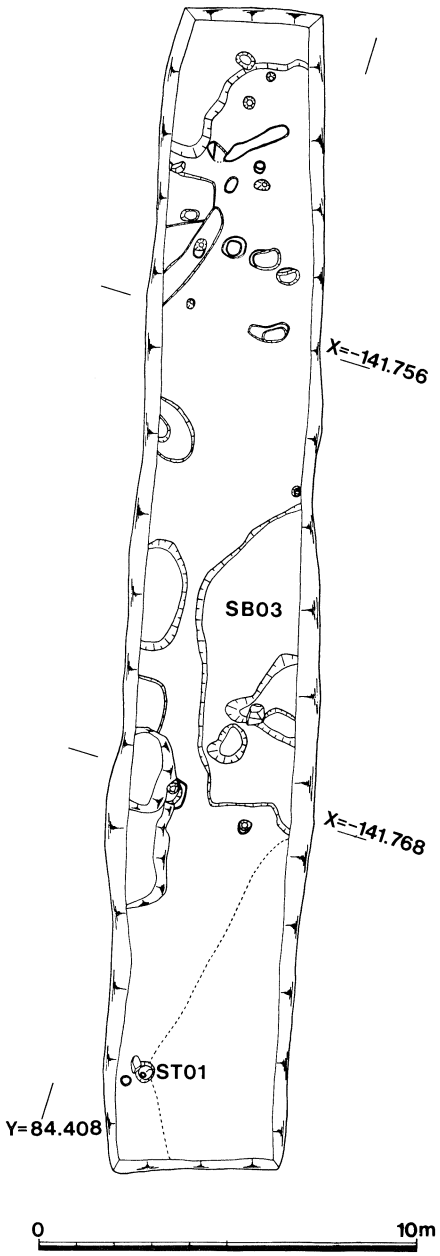


fig. 177　第２遺構面平面図

fig. 178　第１遺構面ＳＢ01・02(北から)

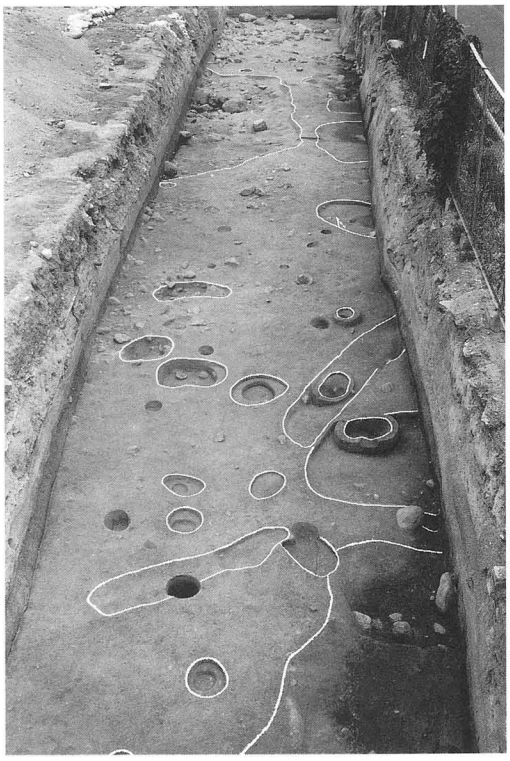


fig. 179　第２遺構面全景(北から)

fig. 180　第２遺構面全景(南から)

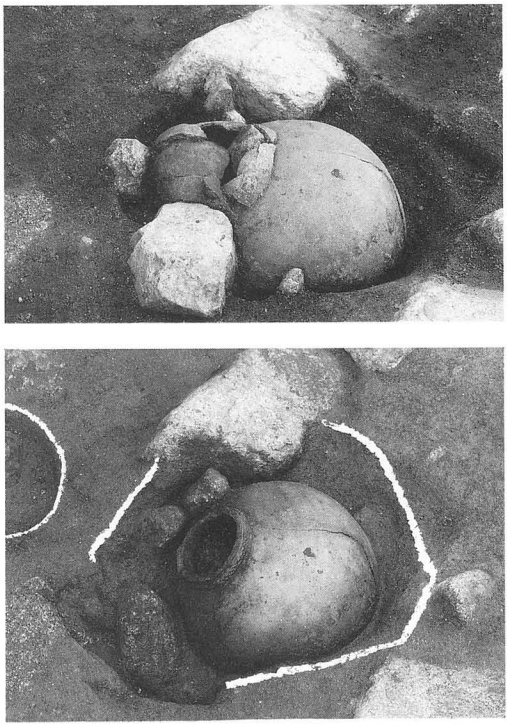


fig. 181　ＳＴ01(東から)　蓋除去後(下)

Ⅲ．城の前地区第13次調査

1．調査経過

城の前地区第13次調査は、昨年度に行った城の前地区第７次調査西４区の下層の調査である。昨年度の調査では、淡茶褐色砂質土上面で、古墳時代中期～後期の竪穴住居址11棟、掘立柱建物址１棟、土坑、柱穴、河道が発見された。また、トレンチ東北部を除いては、下層にも遺構が存在する可能性が考えられた。民家への車の通行路を確保するため、トレンチ東南部については、昨年度中に下層の調査を行い、弥生時代後期の竪穴住居址、古墳時代の柱穴などを検出した。残りの部分については、真砂土で埋め戻しを行った。

今年度は、真砂土を重機で除去し、人力で、遺構内の真砂土を除去、清掃したのち、淡茶褐色砂質土を掘削した。しかし、明確な遺構面は存在せず、淡茶褐色砂質土を若干掘削した深さで検出される遺構と、さらに掘り下げて検出される遺構が確認された。上層からは、古墳時代の須恵器片、土師器片、炭、下層からは、古墳時代の土師器片が出土した。また、最終遺構面では、太形蛤刃石斧、砥石が発見された。

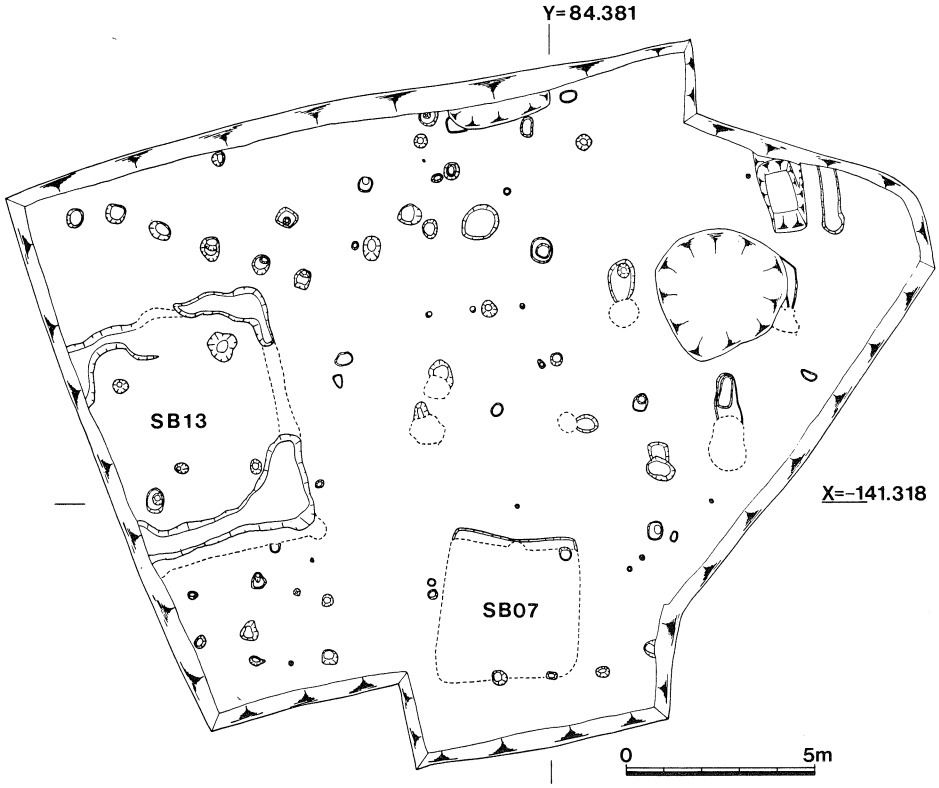


fig. 182　調査地遺構平面図

2．遺構と遺物

古墳時代の竪穴住居址２棟、柱穴、土坑などが検出された。

ＳＢ13

上層で検出されたＳＢ13と同一の住居址で、床面の土を除いたところ、４本の主柱と上層の壁の内側を巡る幅約60㎝の溝が見つかった。北側の溝では、上層の壁よりも北側にもぐり込んで検出された。このことから、下層にあった住居址が埋没した後、その直上から新たに竪穴を掘りこんだものか、あるいは、壁が南側へ崩落したものと考えられる。柱穴掘形からは、土師器片、炭が、溝内からは、須恵器片、鉄器が出土している。

ＳＢ09

上層で発見されたＳＢ09と同一の住居址で、ＳＢ13と同様に、下層で北側に層が薄くもぐり込んでいる状態が確認された。埋土中からは、土師器片が出土している。

柱穴群

柱穴は70余り検出されたが、建物になるものは確認できず、トレンチ北部で、５個の柱穴が、東西方向に並ぶのみであった。柱穴の中にも、下層で、層が北へもぐり込むものがある。出土遺物は、土師器、須恵器、鉄器、種子、炭である。

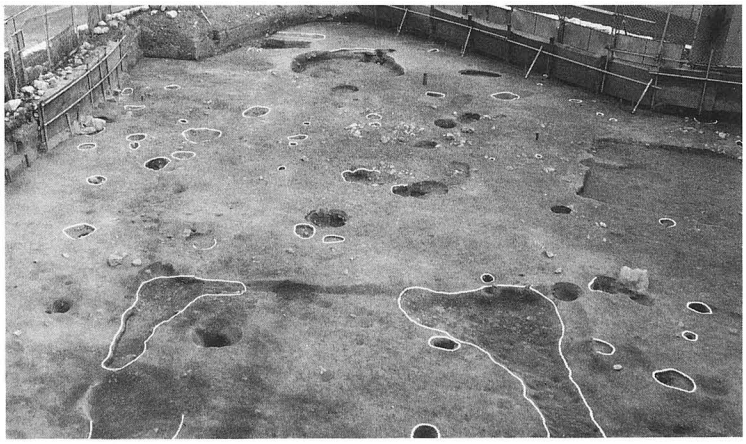


fig. 183
調査地全景（西から）

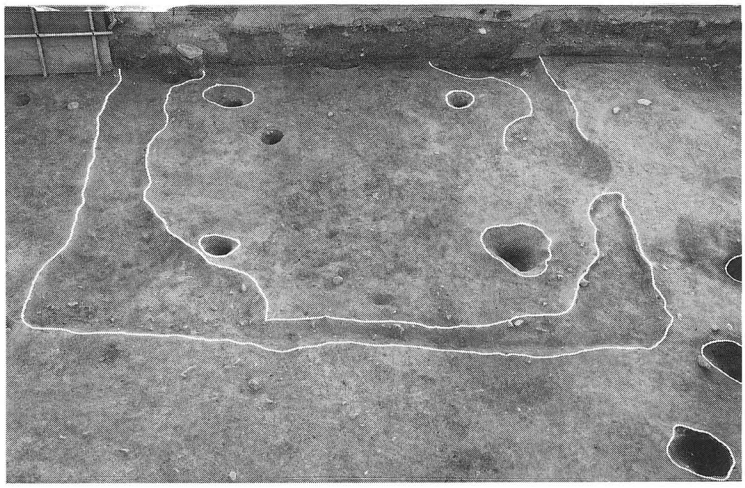


fig. 184
ＳＢ13（東から）

Ⅳ．城の前地区第14次調査

1．基本層序　層序は表土、淡褐灰色土、黄褐色土、暗褐色土、淡茶褐色砂質土となっている。淡褐灰色土・黄褐色土は古墳時代から中世、暗褐色土は弥生時代・古墳時代の遺物を含む包含層である。淡茶褐色砂質土は遺物を含まない層で、これを基盤に遺構が構築されている。特殊な遺物としては、暗褐色土から、石鏃、鉄器、骨、種子が出土している。

2．遺構と遺物　弥生時代後期の竪穴住居址２棟、自然河道、古墳時代中期～後期の竪穴住居址12棟、掘立柱建物址３棟、土壙墓１基、土器棺墓１基、土坑、柱穴や、平安時代の土壙墓が検出された。

弥生時代後期の遺構

ＳＢ07　東西径6.0ｍ、南北径推定6.5ｍの円形住居址で、４本の主柱が検出された。北側は攪乱を受け、南側はＳＢ10によって切られている。埋土中からは、弥生土器の他、鉄鏃が出土している。

ＳＢ15　東西径7.0ｍ、南北径7.4ｍの円形住居址で、ＳＢ16、ＳＢ05、ＳＫ01に切られている。中央土坑、４本の主柱、周壁溝を持ち、東南端床面で長頸壺形土器２個体、高坏形土器１個体、壺形土器１個体、北端床面で長頸壺形土器１個体、高坏形土器１個体、甕形土器２個体が検出された。長頸壺形土器は、いずれもほぼ完形である。また住居址中央部には、礫群が見られ、礫の間には弥生土器・炭が混在していた。一番大きな石の下からは、完形の鉢形土器が発見された。これらの弥生土器は、畿内第Ⅴ様式に属する。他に、埋土中より砥石が出土した。

自然河道　調査区西南隅で検出された河道で、北西から南東へ流れている。河道内には粗砂と細砂が交互に堆積し、弥生土器が多く出土した。上層からは、古墳時代の須恵器、土師器、軽石、鉄器も出土している。

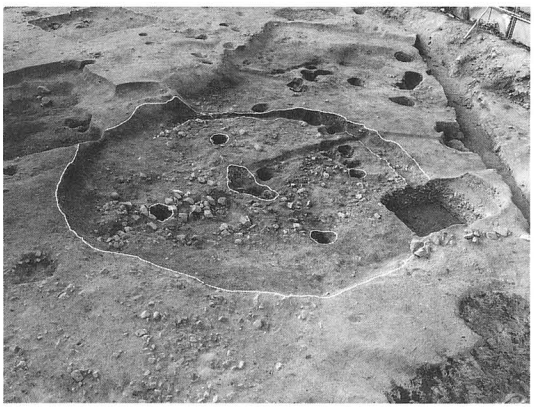


fig. 185　ＳＢ15

fig. 186　ＳＢ15遺物出土状況

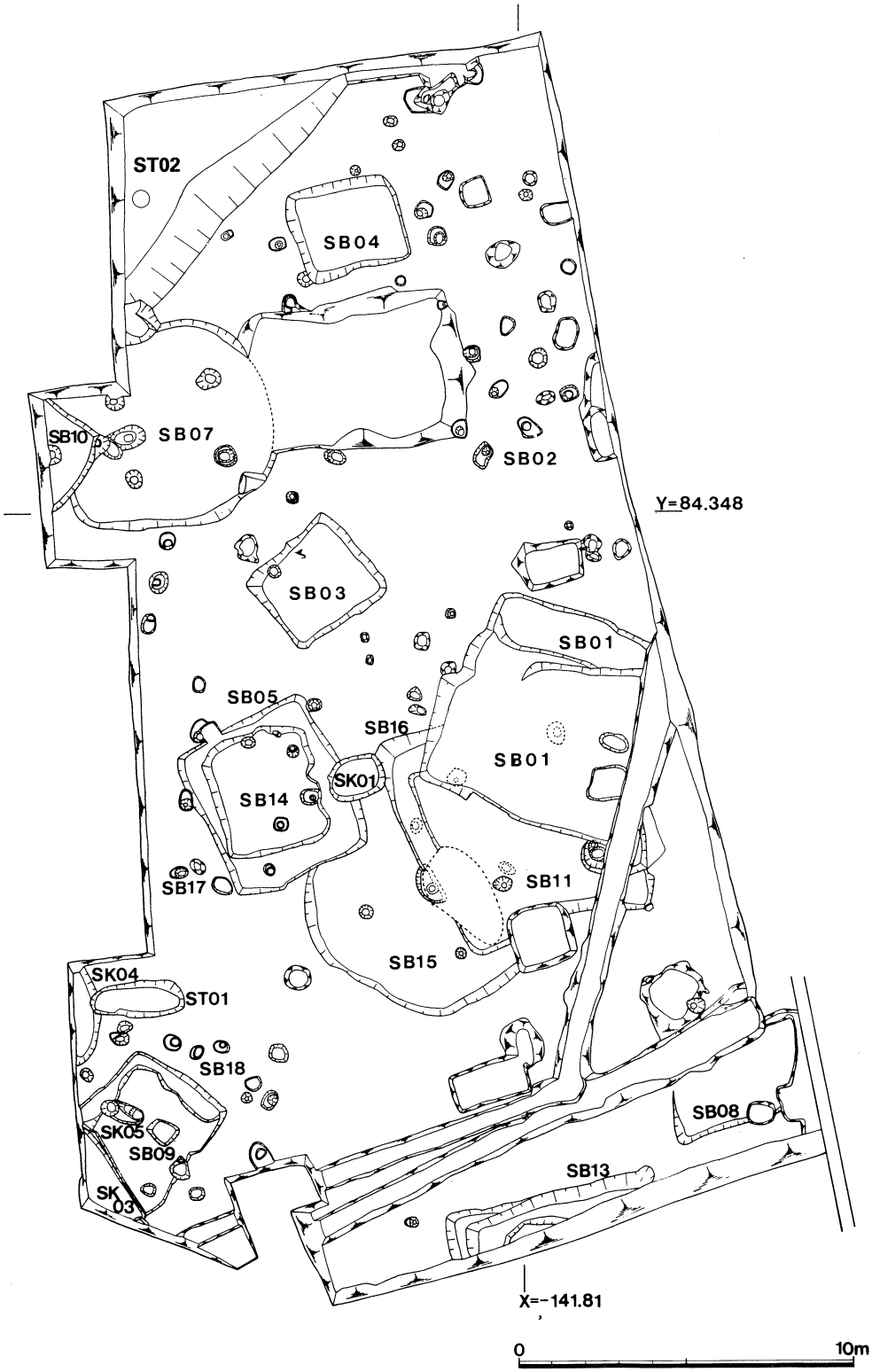


fig. 187　調査地遺構平面図

fig. 188　ＳＢ15出土土器実測図

古墳時代中期～後期の遺構

ＳＢ03　東西2.9ｍ、南北3.2ｍの小型の方形住居址で、床面より10～15㎝浮いた状態で、６世紀初頭の須恵器坏･有蓋高坏が検出された。

ＳＢ04　ＳＢ03と同様、小型の方形住居址で、東西2.6ｍ、南北3.2ｍを測る。６世紀初頭の須恵器坏、高坏、甕、土師器高坏、甕が、床面から離れた状態で出土した。特に土師器甕は平均30㎝以上床面から離れている。埋土中からは、骨（人骨か獣骨か不明）が出土している。また、住居址西辺中央には土の焼けた部分がある。

ＳＢ05　東西5.0ｍ、南北4.4ｍの方形住居址で、床面から５世紀後半の須恵器把手付埦、６世紀初頭の須恵器坏、２つに割れているがほぼ完形の土師器甑の上に土師器甕の破片がのった形で出土した。また、埋土中より滑石製勾玉が検出されている。

ＳＢ08　北側は調査区外にあり、西側は攪乱を受けている方形住居址で、規模は不明である。６世紀初頭の須恵器、土師器が出土している。

ＳＢ09　東西3.4ｍの方形住居址で、南辺はＳＫ03に切られている。西辺で周壁溝が検出されている。

ＳＢ10　ＳＢ07を切る方形住居址で、３隅が調査区外にあるため、規模は不明である。柱穴が１つ検出されている。床面上には、炭層、焼土層が広がり、６世紀初頭の須恵器坏、土師器高坏が出土している。

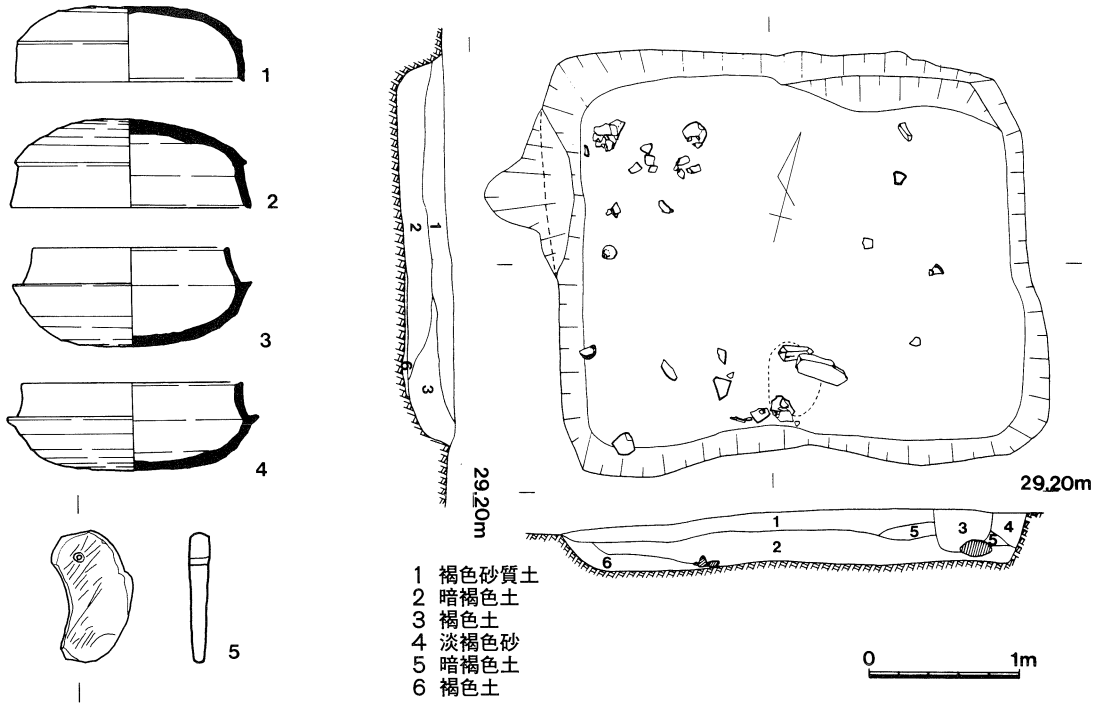


fig. 189　竪穴住居址出土遺物・ＳＢ04遺構実測図　1～4　S＝1/4　5　S＝1/2

ＳＢ13　隣接する東側の地区の調査（城の前地区第７次調査西４区）で検出された方形住居址の西辺である。住居址の規模は、東西6.0ｍ、南北6.7ｍであることが判明した。周壁溝を巡らしており、床面で６世紀初頭の須恵器坏が検出された。埋土からは、須恵器･土師器の他、鉄器が出土している。

ＳＢ14　ＳＢ05を床面まで下げたところで検出された方形住居址で、東西3.6ｍ、南北3.1ｍを測り、北辺中央に竈を持つ。埋土より、６世紀初頭の須恵器、土師器が出土している。

ＳＢ01･11･16　すべて方形の住居址で、ＳＢ01は東西6.2ｍ、南北6.0ｍ以上（北辺は攪乱を受けている）。ＳＢ11は東西5.5ｍ、南北6.0ｍ、ＳＢ16は東西7.0ｍ、南北6.6ｍを測る。出土遺物は６世紀初頭の須恵器、土師器であり、切り合い関係から、ＳＢ16→ＳＢ11→ＳＢ01′→ＳＢ01の順に建てられたと考えられる。

ＳＢ01は、北辺中央に竈を持ち、竈には支柱石が残っていた。

ＳＢ01′は、ＳＢ01と重なり合う住居址で、ＳＢ01の西端を除いて、床面が１段低くなっている部分に当たる。

ＳＢ16は、周壁溝を巡らし、北辺中央に竈を持ち、４本柱であったと考えられる。須恵器、土師器の他に、管玉、軽石が出土した。

ＳＢ02　２間×２間の総柱の建物で、柱間距離は南北方向1.5ｍ、東西方向1.4ｍである。西南隅の柱穴は攪乱を受けて失われている。柱穴掘形からは、土

師器片、須恵器片が出土している。

ＳＢ17　２間×２間の掘立柱建物で、柱間距離は東西方向2.1ｍ、南北方向1.4ｍである。ＳＢ05が埋没したあとに建てられている。土師器片、須恵器片が出土している。

ＳＢ18　梁行３間、桁行４間以上の南北棟建物で、ＳＢ09を切っている。柱間距離は1.4ｍ～1.6ｍである。出土遺物は、６世紀初頭の須恵器、土師器、炭である。

ＳＴ01　東西1.1ｍ、南北2.8ｍの長楕円形の土壙で、上層から、６世紀前半の須恵器提瓶、坏、甕、滑石製有孔円板が出土した。これらは埋葬時に供献された遺物と考えられる。

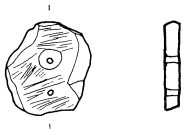


fig. 190 滑石製有孔円盤 S＝1/2

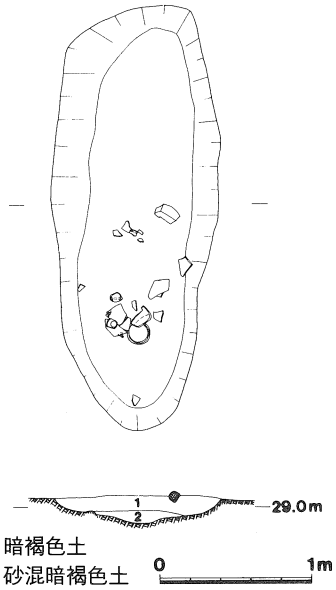
ＳＴ02　自然河道が埋没したあとに掘られた直径33㎝の円形土壙に、土師器甕が、少し傾いた状態で埋められていた。掘形からは、須恵器無蓋高坏片が出土し、土器棺内からは骨片が検出されている。

ＳＫ03・04　ＳＫ03はＳＢ09を切る、ＳＫ04はＳＴ01に切られる土坑で、ともに南側は調査区外にあるため、規模は不明である。

ＳＫ05　ＳＢ09が埋没した後に掘られた直径50㎝の円形土坑である。土坑埋土の上・中層から、６世紀初頭の須恵器坏、甕が出土した。

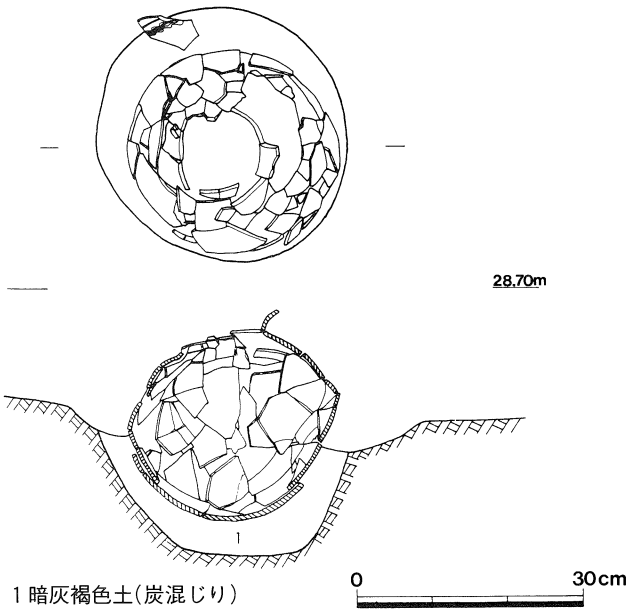
平安時代の遺構

ＳＫ01　東西1.3ｍ、南北1.7ｍの浅い楕円形の土坑で、ＳＢ16・ＳＢ05・ＳＢ15を切っている。土師器皿、黒色土器などが出土している。



１暗褐色土
２砂混暗褐色土

fig. 191　ＳＴ01実測図



１暗灰褐色土（炭混じり）

fig. 192　ＳＴ02実測図

fig. 193
調査地全景
(東から)

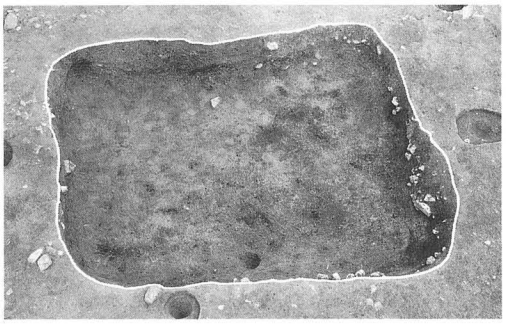


fig. 194　ＳＢ04(西から)

fig. 197　ＳＢ01・11・16　ＳＫ01(西から)

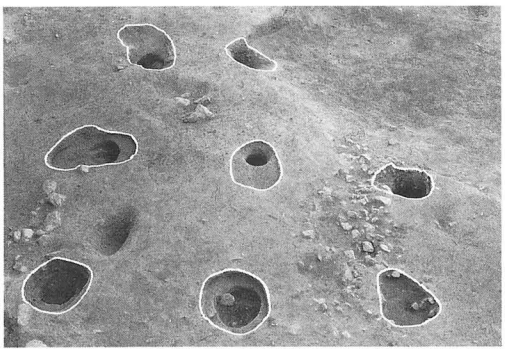


fig. 195　ＳＢ02(北西から)

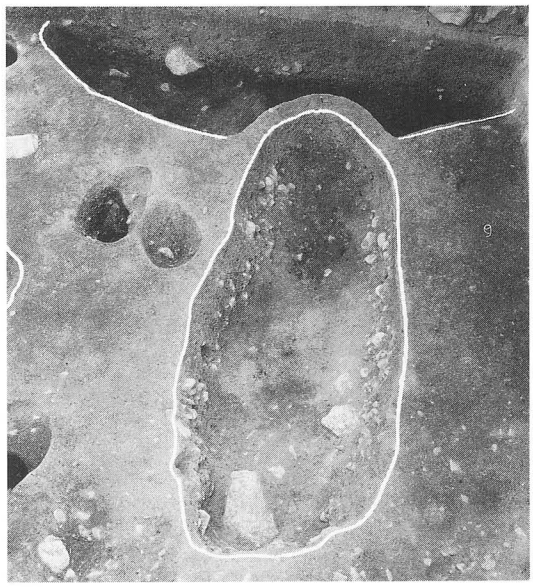


fig. 198　ＳＴ01(北から)

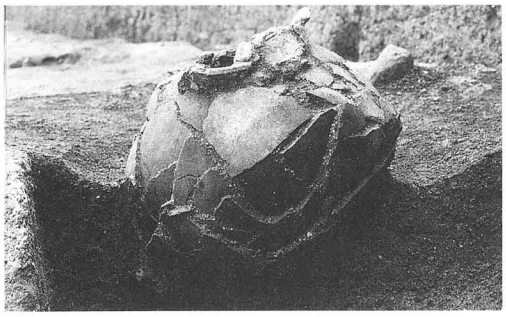


fig. 196　ＳＴ02(西から)

Ⅴ．城の前地区第15次調査

1．基本層序

表土、青灰色土、淡褐色土、黄褐色土、暗褐色土、淡茶褐色砂質土の順に堆積する。黄褐色土は古墳時代から中世の、暗褐色土は古墳時代の遺物を含む包含層であり、暗褐色土は、トレンチ北部には存在しない。

2．遺構と遺物

＜第１遺構面検出遺構＞

トレンチ南半で、古墳時代の溝２条を検出した。

ＳＤ02

ＳＤ03を切って、西から東へ流れる浅い溝である。幅は40～70cmで、須恵器片、土師器片が出土している。

ＳＤ03

ＳＢ02・ＳＸ02を切って北東から南西に流れる浅い溝である。幅は30～60cmで、６世紀末の須恵器坏、土師器片が出土している。

＜第２遺構面検出遺構＞

トレンチ南半で、古墳時代の竪穴住居址２棟、溝１条、古墳時代・鎌倉時代の土坑、柱穴などを検出した。鎌倉時代の遺構は、トレンチ北半に多く確認された。

ＳＢ02

南北4.7m、東西5.0mの方形竪穴住居址である。火災によって放棄された住居址と考えられ、床面上には炭の層が堆積され、垂木と思われる炭化材が多く検出された。床面出土遺物は、土師器壺・鉢・甕などで、５世紀後半に属するものと考えられる。その他、埋土からは須恵器、鉄片も出土している。

ＳＢ01

方形竪穴住居址の東端で、ＳＤ01に切られ、ＳＢ02を切っている。城の前地区第12次調査ＳＢ03と同一の遺構と考えられ、規模は南北7.0m、東西は8.0mと推定される。

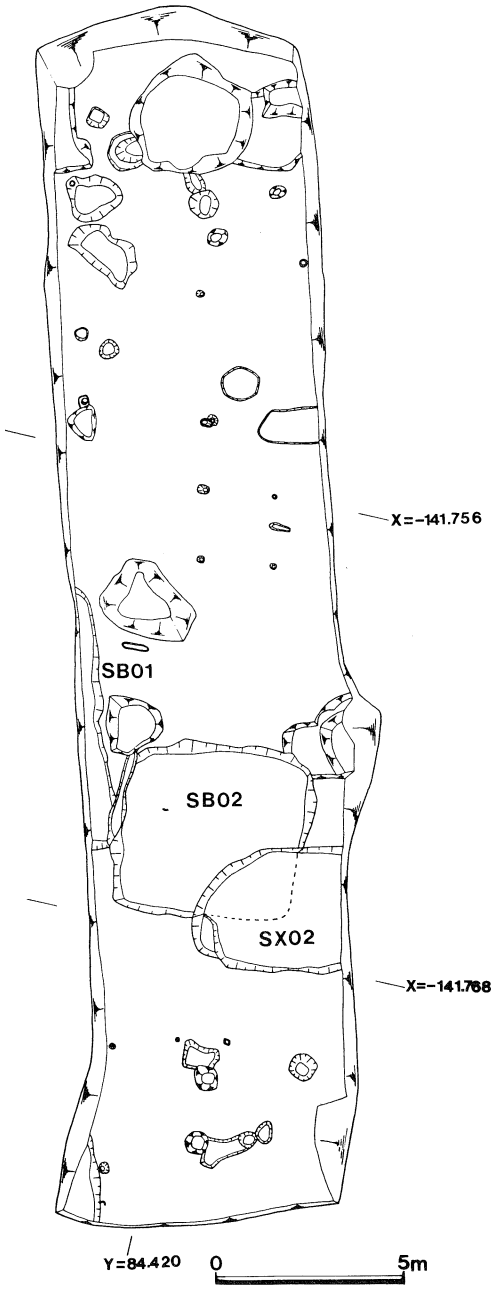


fig. 199　調査地遺構平面図

ＳＸ02　　ＳＢ02を切る楕円形の落ち込みで、東側は調査区外にある。６世紀初頭の須恵器、土師器、鉄片が出土している。

ＳＤ01　　ＳＢ01、ＳＢ02を切る、幅20～40㎝の南北方向の溝である。土師器片、炭が出土した。

fig. 200
調査地全景（南から）

fig. 201
ＳＢ02・ＳＸ02
（西から）

fig. 202　第16次調査地全景(北から)

fig. 203　ＳＢ01・02(北から)

fig. 204　鎌倉時代溝(東から)

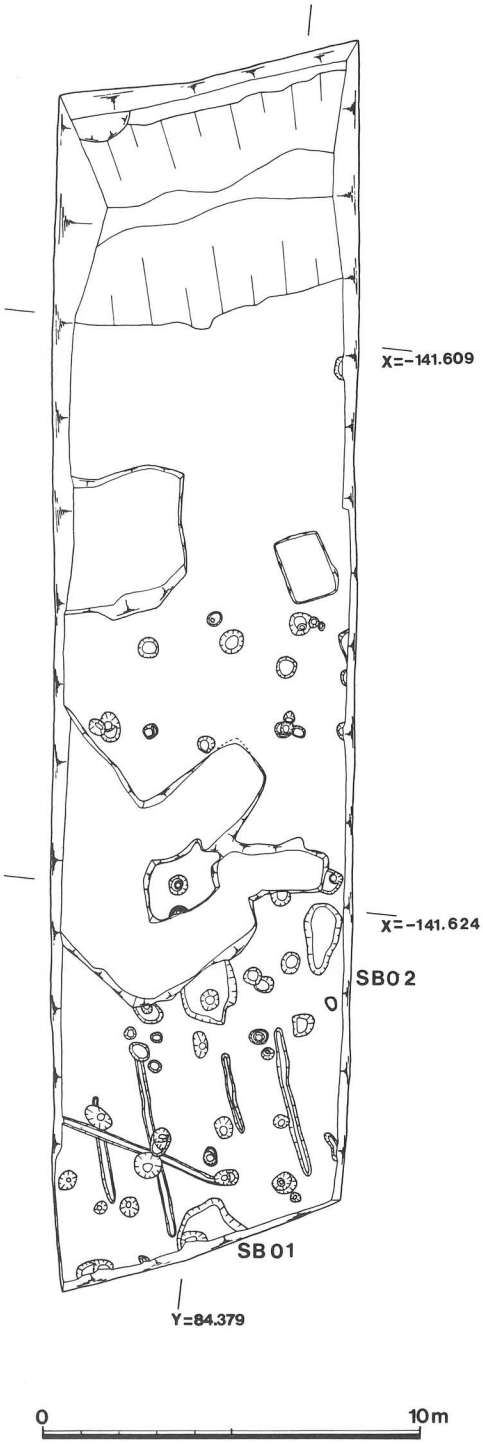


fig. 205　第16次調査地遺構平面図

Ⅵ．城の前地区第16次調査

1．基本層序　表土、淡褐灰色土、黄褐色土、茶褐色土、淡茶褐色砂質土の順に堆積する。トレンチ北部は一段高くなっており、黄褐色土が存在しない。トレンチ南部は、淡茶褐色砂質土上面で、南へ傾斜しており、茶褐色土が厚く堆積している。淡褐灰色土は中世の遺物を含み、黄褐色土は古墳時代から中世の遺物を含んでいる。茶褐色土は古墳時代の遺物を含む包含層である。

特殊な遺物としては、黄褐色土から土錘、緑釉陶器が、茶褐色土から土錘、砥石、鉄器が出土している。

2．遺構と遺物　鎌倉時代の溝１条、土坑、柱穴を検出した。

＜第１遺構面＞　溝は、トレンチ北端にあり、幅5.4ｍ、深さ2.4ｍの東西方向の溝である。溝中には、粘土と砂が交互に堆積している。出土遺物は、古墳時代～鎌倉時代の須恵器、土師器、瓦器、土錘などである。

＜第２遺構面＞　古墳時代の掘立柱建物址２棟、土坑、柱穴、溝を検出した。

ＳＢ01　トレンチ東南隅で検出された２間以上×２間以上の掘立柱建物址で、柱間距離は1.8ｍである。

ＳＢ02　トレンチ南部で検出された、桁行３間、梁行２間以上の東西棟の掘立柱建物址で、攪乱を受けている。柱間距離は、東西方向1.2～1.6ｍ、南北方向1.8ｍである。

これらの柱穴からは、６世紀前半の須恵器、土師器などが出土している。

Ⅶ．まとめ

今年度の調査では、弥生時代の竪穴住居址２棟、土器棺墓１基、河道、古墳時代の竪穴住居址14棟、掘立柱建物址５棟、土壙墓１基、土器棺墓１基、土坑、溝、中世の掘立柱建物址２棟、土坑、溝などが発見された。このうち、弥生時代の竪穴住居址、土器棺墓、古墳時代の墓址は、今年度になって、新たに発見されたものである。

出土遺物の中では、城の前地区第14次調査で検出された滑石製の勾玉と有孔円板が注目される。同様の遺物が、中町地区第１次調査でも出土している。

昨年度までの調査と合わせると、城の前地区を中心に検出された古墳時代の竪穴住居址は35棟、掘立柱建物址は10棟にのぼり、古墳時代を中心とした集落が、山手幹線と弓場線の交差点付近より、西側と北側へ拡がっていることが明らかになった。

15. 郡家（ぐんげ）遺跡（岸本（きしもと）地区）

1．はじめに

郡家遺跡は、東灘区御影町郡家、御影を中心に東西約800ｍ、南北約500ｍの範囲に広がっていると考えられ、時期も弥生時代から中世までの遺構が確認されている複合遺跡である。

今回の調査地は、天神川が形成した土石流性扇状地の微高地に立地する。

2．基本層序

現代の盛土層の下に、旧耕土、床土があり、床土直下に近世の遺構面がある。この下層は、茶褐色泥砂で中世の遺物包含層である。調査区北半は、遺物包含層の下層が黄色粗砂の地山となり、南半は、暗茶褐色泥砂（ＳＸ02）がみられ、この層を除去すると古墳時代の遺構面となる。

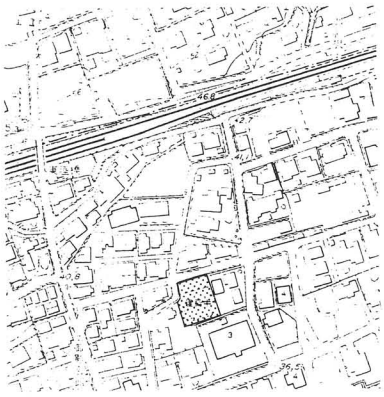


fig. 206　調査地位置図 1：5,000

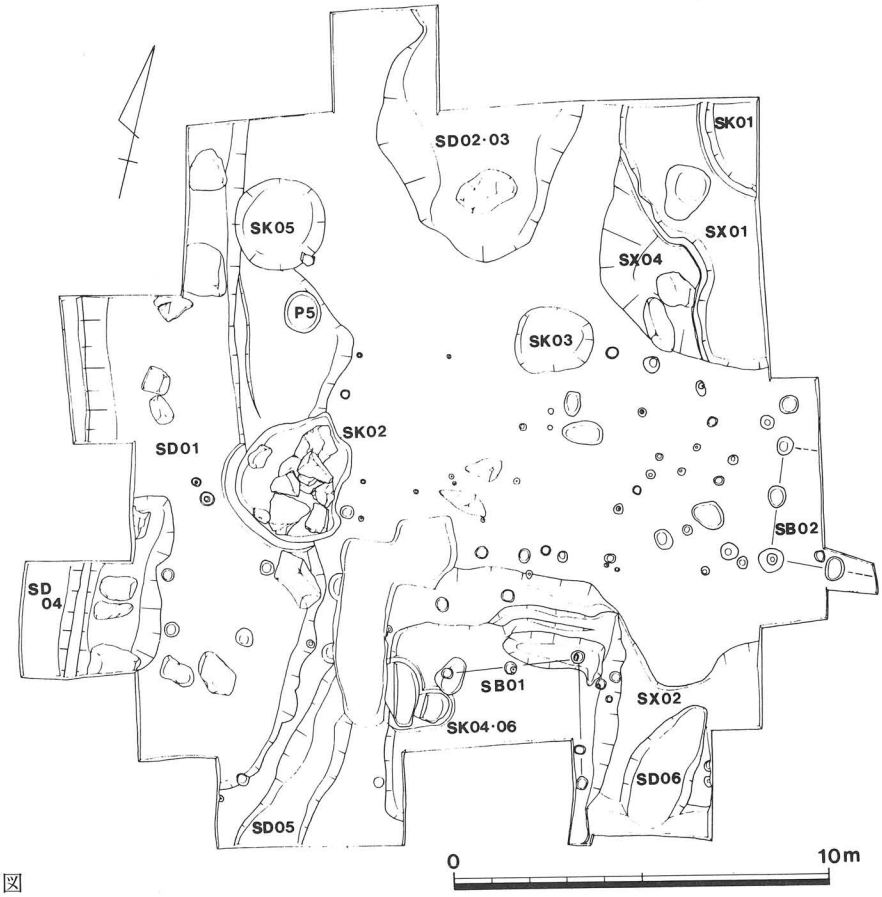


fig. 207
調査地遺構平面図

3．遺構と遺物

ＳＫ01

調査区の北東隅で検出されたため、規模は不明であるが深さ0.4ｍの石組みの遺構である。

石組みは北面し、弧状をなし約３ｍ検出された。組まれた石は一部を除き、大多数は花崗岩である。石組みの中には矢穴のある石が含まれている。矢穴は３ヶあり、２つが並び、もう１つが別の面にある。矢穴の観察より、一方向から割り、さらにもう一方向から半截するよう割っていると考えられる。

土坑内の堆積状況は、最下層に花崗岩の割石があり、その上に泥砂層が堆積していた。

中から土師器、須恵器片とともに陶器および中国製染付が出土した。これらの遺物から近世（16世紀後半～17世紀前半）のものと考えられる。

遺構の性格は、泉水の一部、水溜、いわゆる足洗場等考えられるが、遺構の全容が不明のため、性格は不明である。

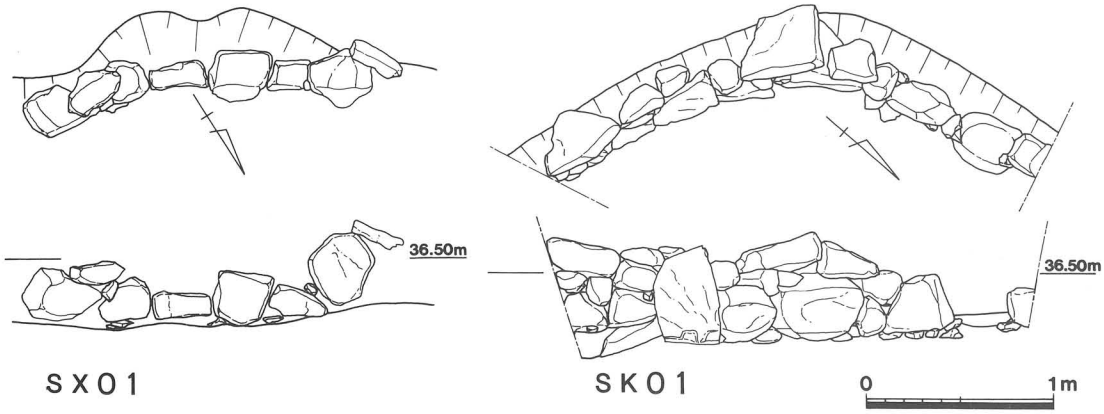


fig. 208　ＳＸ01・ＳＫ01平面・立面図

fig. 209　ＳＫ01(手前)・ＳＸ01

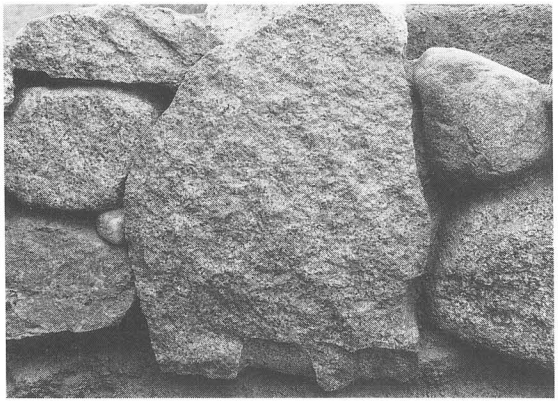


fig. 210　ＳＫ01石組み

ＳＸ01

南北約７ｍ、東西約２ｍの規模で検出された落ち込み状遺構である。深さは0.4ｍ～0.7ｍである。

ＳＸ01の壁の一部に北面して石組が検出された。石組は幅約２ｍ、高さ0.5ｍの規模をもち、13石で構築されている。ＳＫ01に比べ稚拙である。

堆積土は茶褐色泥砂層で、堆積土内より土師器、須恵器の少片、鉄片が出土している。また重さ約750㎏の矢穴のある石が、１つ出土している。

遺物から時期を決定するのは不可能であるが、遺構の切り合い関係より近世のものと考えられる。

ＳＸ04

ＳＸ01の南側に検出された南北約５ｍ、東西約２ｍ、深さ約0.6ｍの落ち込み状遺構である。

ＳＸ01に石組があったため、当初ＳＸ01の掘形と考えていたが、調査途中よりＳＸ01とは別個の遺構であることがわかった。ＳＸ01の石組みの掘形は石組に接近していることが判明した。

遺物は土師器、須恵器少片、瓦器片と備前焼、丹波焼等の陶片が出土した。時期は中世以降と考えられる。

ＳＫ02

南北3.6ｍ、東西2.6ｍ、深さ約0.8ｍの不整形の土坑である。

矢穴のある石が10個出土している。矢穴のある石はすべて取り出した。取り出しの過程で次のようなことが判明した。10個のうち３個は、土坑の南辺で出土した。直径0.3ｍ大の直方体の矢穴のある石である。その他の７個のうち５個は、同一の石を割りそのまま搬出せずに放棄したものと考えられる。出土状況があたかも一個の塊が展開されたように出土している。また、花崗岩は比較的鉱物の結晶の大きな岩石であり、その鉱物の結晶、並び方や石の割れ口より同一の石であると判断した。そして石の割れ口より他の２石も同一の可能性はあるが、明確にはならなかった。１ｔ近いものが３石、その他７石は300～500㎏程度のものであった。石材は、いわゆる六甲花崗岩といわれる閃雲花崗岩であると思われる。その他に土器片と鉄滓の出土があった。

古墳時代及び中世の土師器、須恵器が大部分であったが、近世と思われる遺物も少量出土している。

ＳＫ03

直径約２ｍ、深さ0.7ｍのほぼ円形の土坑である。上層は茶褐色の砂が堆積し、これを削除すると底面に花崗岩の石屑が検出された。石屑の大きさは、径２～３㎝大のものから20㎝大のものまでが、集積された状態で検出された。出土量は、28ℓ入コンテナで約13杯分である。他に直径約30㎝と20㎝大の直方体の矢穴のある石が１個ずつ出土している。製品を造った際の石屑と考えられる。その他に土師器、須恵器、陶器片と鉄滓が出土している。遺構の切合い関係と遺物から近世のものを考えられる。

ＳＤ02･03　調査区北辺で検出された遺構である。

当初、ＳＤ02とＳＤ03は２つの自然流路と思われたが最終的に一つの落ち込み遺構であることが判明した。幅約５ｍ、深さ約0.7ｍである。

出土遺物は土師器、須恵器、陶器片が出土した。時期は中世と思われる。

ＳＤ04　調査地の西端で検出された遺構である。ＳＤ01の中世遺物包含層を切り込んだ遺構である。他の遺構内の流入土と異なり、黄色の粘質砂泥層で溝状遺構と考えたが、調査地の制約もあり一概に溝状遺構と考えるのは妥当ではないかもしれない。

北側では深さ約0.2ｍ、南側約0.4ｍである。

出土遺物は、須恵器埦・鉢・壺・甕、土師器皿・羽釜・三足堝・甕、瓦器埦・皿、瓦質堝、青磁、中国製褐釉壺等である。褐釉壺は市内でも出土例が少なく注目に価する。遺物から13世紀後半から14世紀後半頃のものと考えられる。

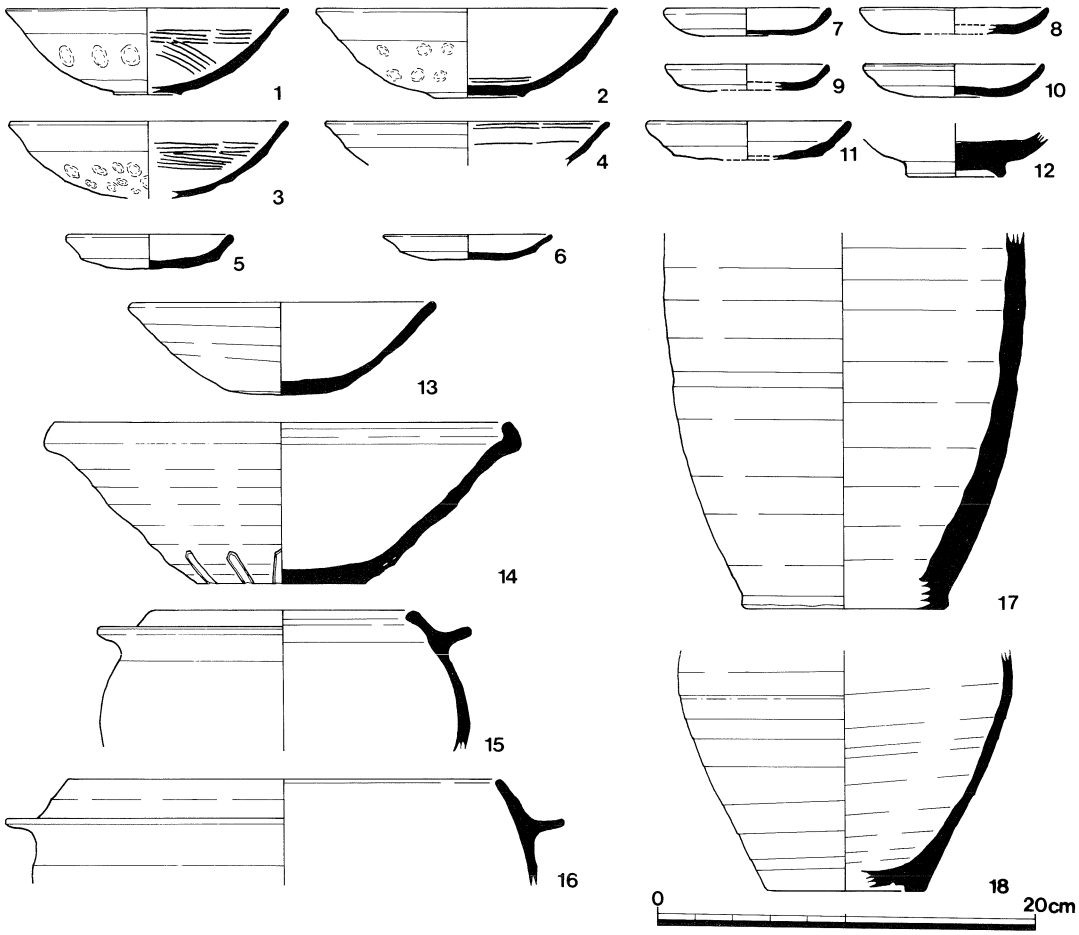


fig. 211　ＳＤ04出土土器実測図

ＳＫ04･06　調査区南部で検出されたＳＢ01を切る中世の土坑である。ＳＫ04は、長径1.7ｍ、短径0.8ｍ、深さ0.6ｍの楕円形を呈する。上下２層に分層され上層は淡赤褐色砂泥層、下層は褐色砂層であった。須恵器埦・鉢、土師器片が出土している。その他に銭一点が出土し、「皇宋通宝」（北宋、宝元２年西暦1039年）と判読された。質が悪く残存状況もよくない点から私鋳銭と考えられる。ＳＫ06は、ＳＫ04に切られる直径0.8ｍ、深さ0.4ｍの円形の土坑で、土師器片、須恵器片が少量出土した。ＳＫ04、ＳＫ06とも土坑の性格は不明である。

Ｃ-3ピット5　ＳＤ01内の堆積土を削除後検出された直径1.1ｍ、深さ約0.2ｍの皿状の遺構である。茶褐色泥砂層が最下層に、次に黄色粘土層、次に茶褐色泥砂層となる。このように粘土層をはさみ泥砂層が堆積し、上面には焼石が検出された。遺物は出土せず、性格等は不明である。

ＳＸ02　ＳＤ05、ＳＢ01、ＳＤ06の上面に堆積した北に浅く南に深く不定形の落ち込みである。

遺物は、弥生、古墳、奈良時代のものを含み、量的には古墳時代の土師器、須恵器が主体である。下限の遺物は奈良時代もしくは平安時代前半のものもある。器種としては、須恵器坏、甕、壺、土師器坏、皿、甕等である。注目すべき遺物としてＳＸ02南東部から石庖丁が１点出土している。郡家遺跡では、初見である。

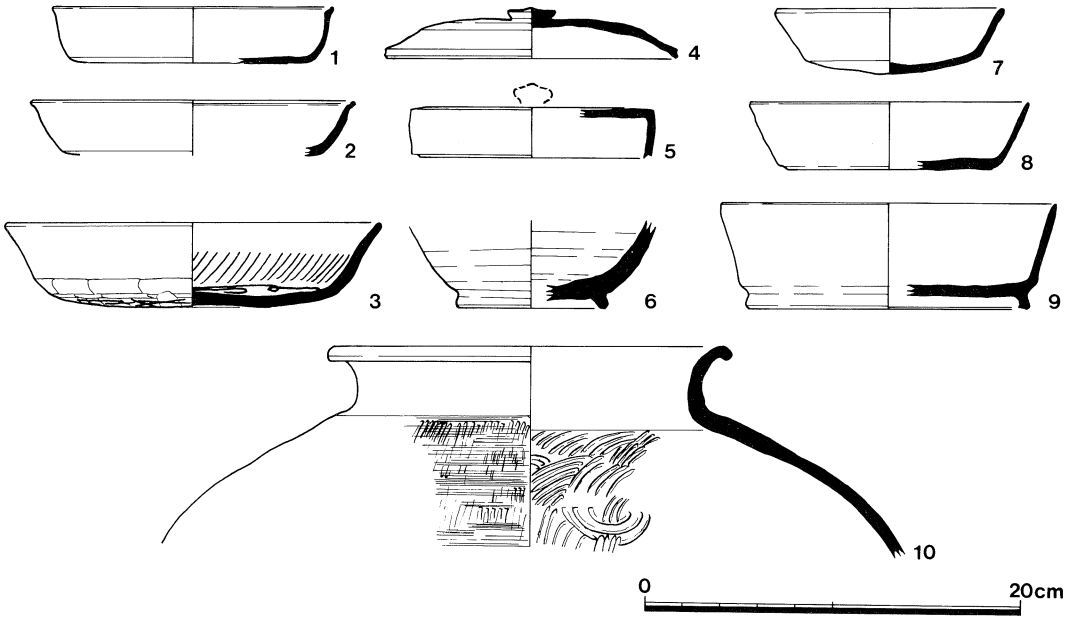


fig. 212　ＳＸ02出土土器実測図

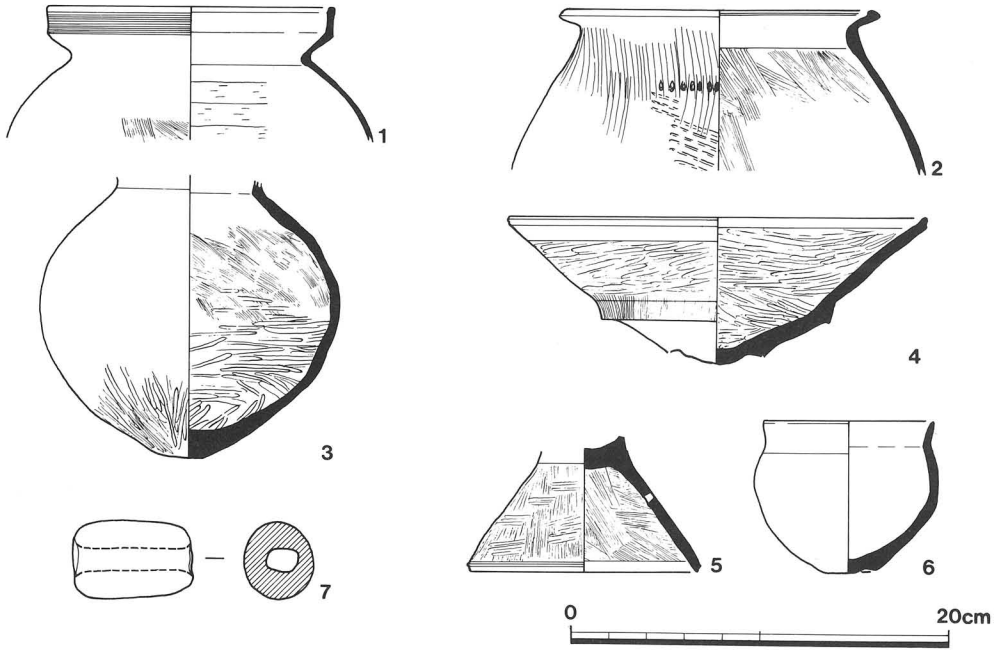


fig. 213　ＳＤ01下層出土遺物

ＳＤ01

調査区西端で検出された幅約６ｍ、深さ約0.4ｍの南北に流れる流路状遺構である。上下２層に分層され、上層は中世の遺物を主体とし、弥生時代及び古墳時代の遺物が出土した。下層は古墳時代の遺物を主体として弥生時代の遺物も含まれている。ＳＤ01の北半では、中世の遺物を含む流土が何度も流路をかえている様子が断面で観察された。下層の堆積状況は北に薄く南に厚く堆積していた。

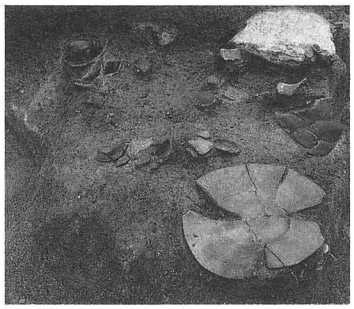


fig. 214　ＳＤ01遺物出土状況

下層の土を削除すると、下層の土に切り込んだピットが６ヶ所検出された。この６ヶ所のピットのうちＳＫ02の南側のピット（D-2、P2）から長さ13.5㎝、幅２㎝の鉄製の鎌が出土した。また、このピットと南側のピット、ＳＤ01の東肩のピット２ヶ所とSD01の中央部の２ヶ所、計６ヶ所のピットが、東西棟１間×２間の建物（ＳＢ03）となる可能性がある。さらに南半では、溝底面より性格不明の落ち込み状遺構ＳＸ03（南北約５ｍ、東西約２ｍ、深さ約0.6ｍ）が検出された。土師器、須恵器が少量出土した。

上層の遺物は、細片で時期及び器形を判断する材料に乏しいが13世紀頃と思われる。下層は、須恵器坏身・坏蓋・甕、土師器壺・甕・高坏、土錘等が出土している。その他に銀環が出土している。

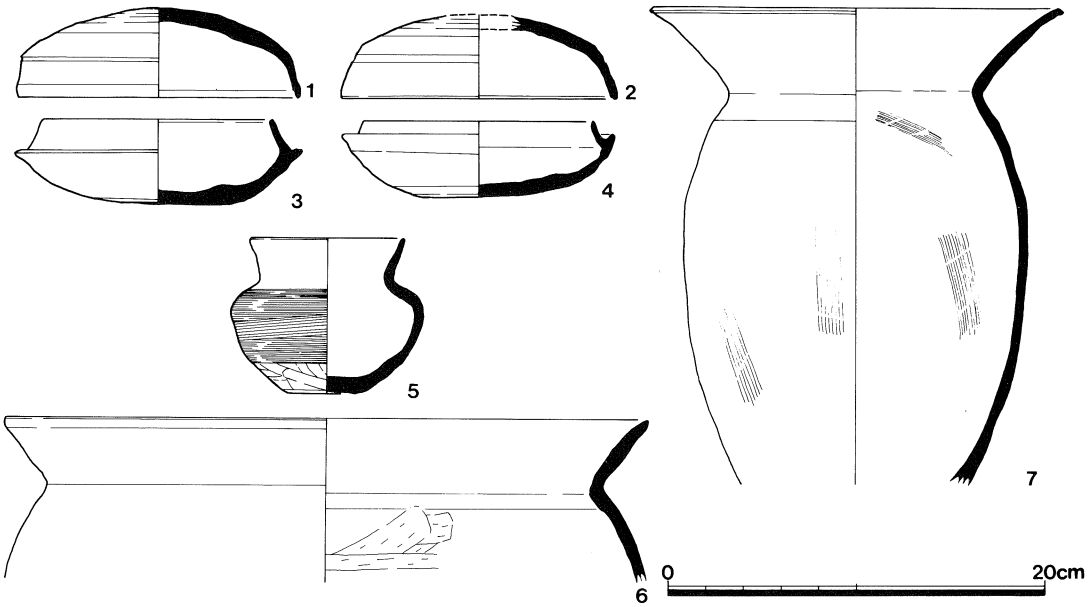


fig. 215　ＳＢ01出土土器実測図

ＳＢ01　一辺約６ｍの隅円方形住居址である。検出面より約0.3ｍの深さで残存しており、北辺は階段状に掘られている部分があり、東辺はやや傾斜した壁である。周壁溝はなく、北東隅に幅約1.0ｍ、深さ約0.3ｍで鍵形に溝状の遺構が検出された。ピットは住居址内に９ヶ所検出された。すべてが0.2ｍ以上の深さのものである。北辺と東辺に平行に並ぶ６個が柱穴と考えられる。調査地の制約もあるが、中央には土坑はないものと考えられる。

遺物は住居址の北辺に多く出土した。出土した遺物は、須恵器坏身・坏蓋、小型壺、甕片、土師器甕・把手付甕等である。遺物より６世紀半ばから後半頃のものと考えられる。

ＳＢ02　東端部で一棟として考えられる４個の柱穴を検出した。２間×１間以上で東に延びる。南北の柱間の距離は1.5ｍ、東西の柱間距離は、1.7ｍである。ピット堆積土の色、質より古墳時代ではないかと考えられる。

ＳＢ01の北辺にも４個のピットが並ぶが、建物としてのまとまりは示さなかった。ＳＢ01との関係のあるものであろうか。

ＳＤ05　幅約1.5ｍ、深さ0.2ｍの南北に流れる溝状遺構である。

古墳時代の土師器、須恵器片が出土した。出土量は少ないが、ＳＢ01・ＳＤ01等と大差ない時期のものと考えられる。

ＳＤ06　調査区の南東隅ＳＸ02の下層に検出された幅約1.8ｍ、深さ約0.3ｍの溝状遺構である。出土遺物は、須恵器坏身・坏蓋・甕片、土師器片と鉄鏃１点が出土した。６世紀中半頃のものと考えられる。

fig. 216　S K 02

fig. 217　S K 05

fig. 218　S B 01

4. まとめ

今回の調査で、大きく区分すると４時代の遺物と遺構が検出された。

近世（安土桃山時代～江戸時代初期）では、「石切り」に関連する遺物と遺構がある。矢穴のある石等関連石材については、藤川祐作氏に実見をしていただいた。SX01で出土した矢穴のある石は、藤川氏の分類によるとＡタイプの矢穴である。また、SK01、SK02のものは、Ｂタイプと考えられる。両者ともに、石切りの技術から、比較的古いものと考えられる。

また、石切りに選ばれた石は、郡家遺跡に散在する転石であろう。さらに矢穴の存在と矢穴の観察から、おそらく石垣石としての利用が、妥当と考えられる。

中世に関し、特に遺物出土量が豊富であったSD04について述べてみたい。瓦器は、主に畿内では、京都、奈良、大阪で生産し、流通消費されている。一方神戸市内では、神出古窯址群、魚住古窯群等で生産された須恵器が、概ね日常雑器として消費されている。しかしながら当郡家遺跡では、瓦器と須恵器が混在した状態で出土する。このような遺跡としては、神楽遺跡、宇治川南遺跡があげられる。現在の段階では、資料不足で臆測にすぎないが、海沿いの遺跡で出土する点などから、両者の接点を求めることで、中世の流通形態の一部を垣間見ることができるのではないかと考えられる。

奈良時代の遺構は、郡家遺跡のこれまでの調査例では大蔵地区を除いてほとんど知られていない。今回の調査でも、自然の落ち込み状遺構にすぎないが、出土遺物の内容から、奈良時代の器種を概ね見ることができ、重要な資料であるといえる。

古墳時代では、竪穴住居址の検出がある。これは前年度調査の城ノ前第７次調査で検出された竪穴住居址の時期と連続する。郡家遺跡では、古墳時代にある一定の範囲で100年近く生活を営んでいたことになる。

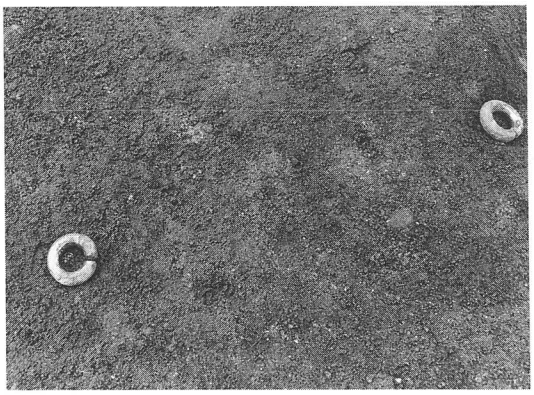


fig. 219　ＳＤ01銀環出土状況

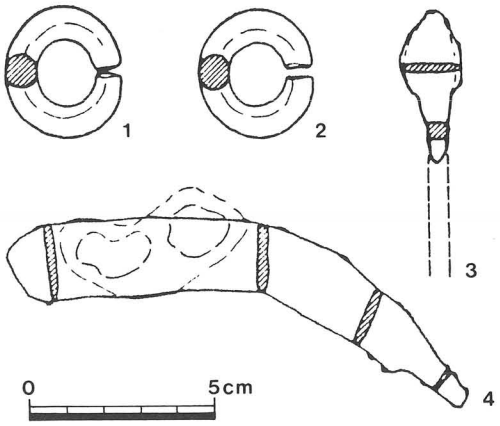


fig. 220(右)　出土遺物実測図　1・2　ＳＤ01銀環　3　ＳＤ06鉄鏃　4　ＳＤ01鉄鎌

次に遺構は検出されなかったが、弥生時代の出土遺物について触れてみたい。今までの調査では、弥生時代の遺跡は、ほとんどが後期に属するものであったが、SX02の石庖丁、SD01のサヌカイトチップ、包含層出土の石鏃等、付近に中期の遺構の存在を窺える遺物が出土している。

また、調査地を地理学的な観点から、立命館大学非常勤講師・高橋学氏に見ていただいた。高橋氏からいただいた教示をもとにまとめてみると土石流は、調査区北東部より南西へ舌状に流れ堆積している。これは、1トン前後の転石を図上で拾うことによって示される。舌状地の東西両側には、土石流が堆積した後に土砂が堆積する。SB01付近には、転石がなく砂地であることが証左となる。

以上のように、近世石切りに関連する遺構と遺物の検出、土石流の一形態が明確になったことなど数多くの成果があがった。今後の課題として、今回の調査地を含め、石切りと大坂築城が、藤川氏のいわれるように結びつくのであろうか。中世及び近世文書にみえる「得位時枝荘」の「時枝」と、近代において当地域に石切り(石工)と関わりの多い「時枝氏」との関連の追求を行なわねばならない。また、周辺に存在する石造物等の調査も課題として残る。

中世では、稀少例である褐釉壺が、当時どのようにして中国から入り、どのような人物に所有されたのか等、郡家遺跡での中世の遺構が平野氏や平野城、また得位時枝荘とどこまで結びつけられるかが課題となろう。

古墳時代では、通常埋葬施設で出土する銀環がSD01溝内より出土している。付近に伊賀塚という字名が存在するが、かつて付近に古墳が存在していたのかという点を明らかにしなければならない。

以上のように多大な成果とともに今後の課題も残された。今後の検討にまちたい。

fig. 221
調査地全景(南から)

16. 住吉宮町（すみよしみやまち）遺跡－第１次調査－

１．はじめに

住吉宮町遺跡は、住吉川と石屋川によって形成された扇状地に立地し、標高約20ｍのところに位置している。

近年、東灘区周辺では、市街地の再開発が進み、道路建設工事やマンション建設工事に先立つ発掘調査で、今まで知られていなかった遺跡が新たに発見されるようになってきた。住吉宮町遺跡もこうした工事によって偶然発見された遺跡である。

昭和60年６月14日、住吉宮町７丁目のマンション建設工事現場で、工事中に地表下約1.5ｍのところで、中世の土坑及び土器が発見された。さらに、工事予定地内の４ヶ所で試掘坑を入れた結果、中世の遺構面よりも約20㎝下に、古墳時代後期末の遺物包含層（淡褐色粘質土層）が、そして、約50㎝下に弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の遺物包含層（黒褐色粘質土層）が確認された。

そのため、工事影響範囲である約500㎡について、発掘調査を実施した。

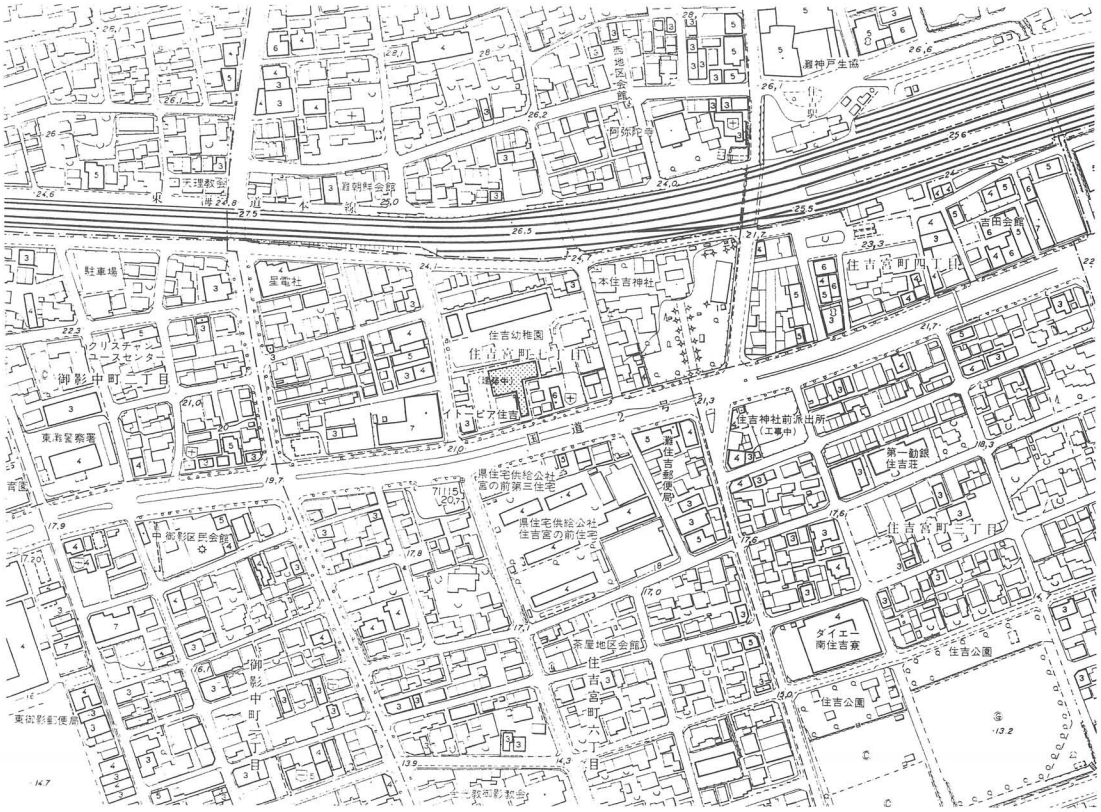


fig. 222　調査地位置図 1：5,000

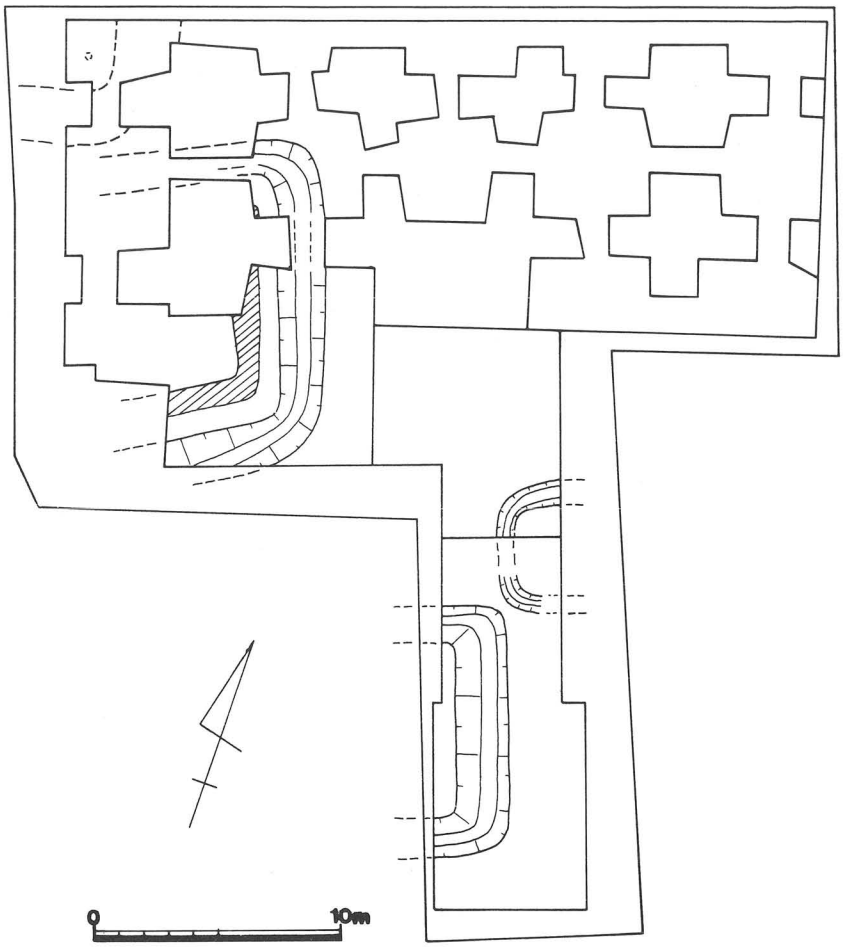


fig. 223
遺構全体図

fig. 224
調査地全景(東から)

2．調査の概要

遺　構

今回の調査で検出された遺構は、古墳時代後期の方墳３基の他、古墳時代後期末の溝･土坑・ピットや鎌倉時代の土坑等である。

古墳時代後期初め頃の遺構

この時期に属する遺構としては、３基の古墳がある。これらの古墳はいずれも一辺10ｍ内外の方墳で、隣接地で実施した第２次調査でも８基確認されており、周辺に群集していた可能性が考えられる。

１号墳

調査区の西側で検出された方墳で、南北長10.0ｍ、東西長6.4ｍ以上、墳丘盛土の高さは0.5ｍを測る。最大幅2.1ｍ、深さ0.8ｍの周溝がめぐり、人頭大の礫を用いた葺石がある。埋葬施設は、確認できなかったが、墳丘盛土内より鉄刀が１振出土している。

また、北側の周溝の底から、土師器壺形土器が１個体出土しており、東側の周溝内からは、硬質土師質円筒埴輪が出土している。

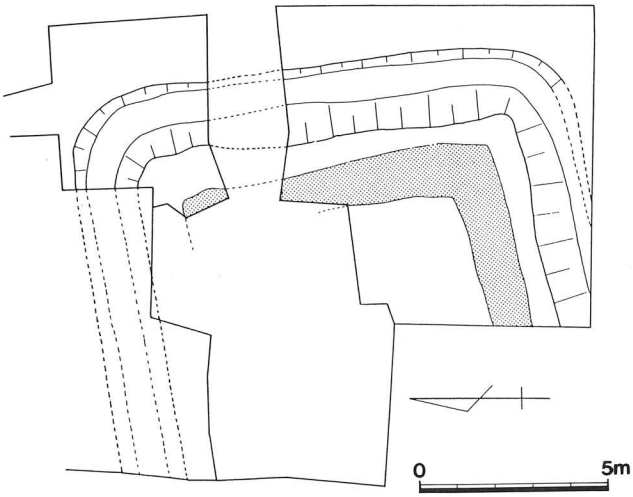


fig. 225　１号墳平面図

fig. 226
１号墳葺石検出状況

2号墳　調査区の南側で検出された方墳で、南北長8.0m、東西2.3m以上、墳丘盛土の高さは、0.3mを測る。最大幅2.0m、深さ0.5mの周溝がめぐる。墳丘上には人頭大の礫が散乱しているが、後世の攪乱を受け、原形を留めていないため、これらの礫が、果たして2号墳の葺石であったかどうかは断定し難い。

墳丘の西側は調査区外にのびており、埋葬施設は確認できなかった。また、墳丘上及び周溝内から遺物は出土しなかった。

11号墳　2号墳のすぐ北東側に周溝を接するようにして検出された方墳で、南北長4.5m、東西長3.5m以上、墳丘盛土の高さは0.2mを測る。最大幅1.5m、深さ0.15mの周溝がめぐり、葺石は検出されなかった。

墳丘の東側は調査区外にのびており、埋葬施設は確認できなかった。また、墳丘上及び周溝内から遺物は出土しなかった。

fig. 227　2号墳(北から)

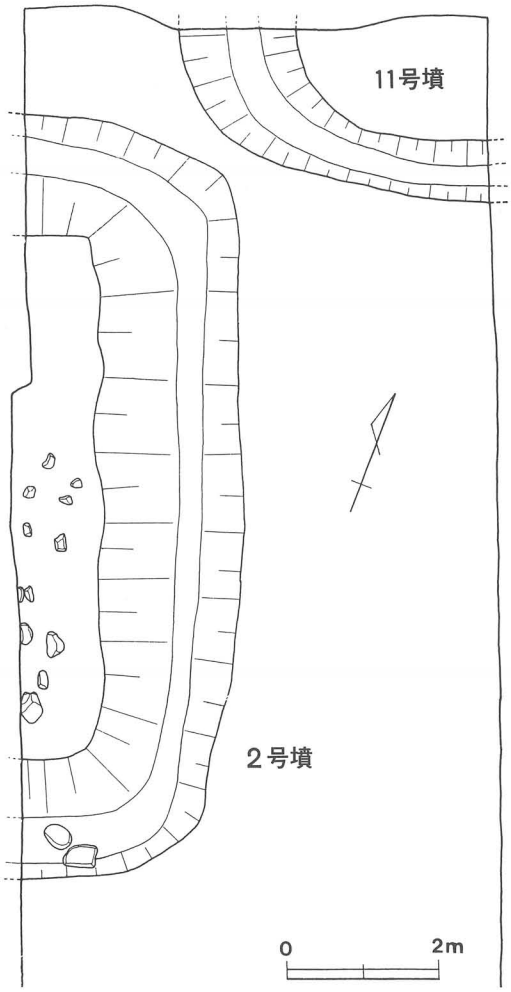


fig. 228　2号・11号墳平面図

古墳時代後期末の遺構

この時期に属する遺構は、主として調査区北側で検出しており、溝状遺構３条、土坑６基の他、ピット多数等である。

ＳＤ01　幅25cm～30cm、深さ10cm～15cmを測る南北方向にのびる溝状遺構である。埋土内より、須恵器、土師器が出土している。

ＳＤ02　幅1.2ｍ以上、深さ20cm以上を測る東西方向にのびる溝状遺構である。西側はＳＤ01に切られている。埋土内より須恵器、土師器が出土している。

ＳＤ03　幅0.8～1.4ｍ以上、深さ５cm～15cmを測る南北方向にのびる溝状遺構である。埋土内より須恵器、土師器が出土している。

ＳＫ01　調査区北西隅で検出した方形の竪穴状遺構で、南北長2.7ｍ以上、東西長1.6ｍ以上、深さ0.1～0.3ｍを測る。底面付近では、２か所において焼土塊を確認している。ピットを２か所で検出しており、南東隅には、0.9ｍ×0.7ｍの楕円形の土坑がみられる。埋土内より、須恵器坏・高坏、土師器甕・甑等が出土している。

ＳＫ02　調査区北側中央付近で検出した楕円形の土坑で、長径1.2ｍ、短径1.0ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土内より須恵器、土師器が出土している。

ＳＫ03　長径1.2ｍ以上、短径0.9ｍ、深さ0.1ｍを測る楕円形の土坑で、北側はＳＫ02に切られている。埋土内より須恵器、土師器が出土している。

ＳＫ04　ＳＫ02、ＳＫ03のすぐ東側で検出した楕円形の土坑で、長径1.3ｍ、短径0.3ｍ以上、深さ５～10cmを測る。北側は調査区外にのびている。埋土内より須恵器、土師器が出土している。

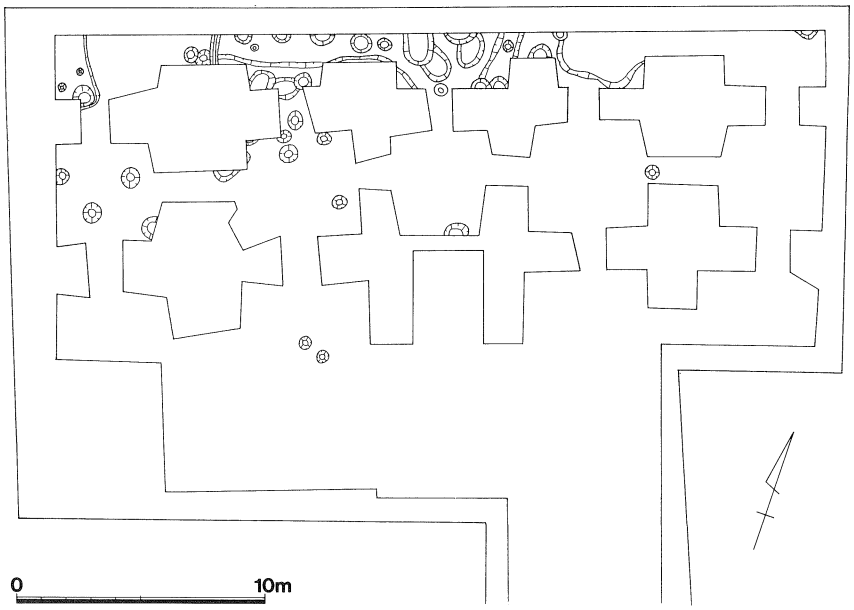


fig. 229
遺構全体図

ＳＫ05　長径1.4ｍ、短径0.9ｍ、深さ0.1ｍを測る楕円形の土坑で、北側はＳＫ04に切られている。埋土内より須恵器、土師器が出土している。

ＳＫ06　ＳＤ03の東方約1.5ｍで検出した浅い不整形の落ち込みで、長径3.0ｍ、短径1.5ｍ以上、深さ５～10㎝を測る。埋土内より須恵器、土師器が出土している。

鎌倉時代の遺構

ＳＫ07　長径5.5ｍ以上、短径4.0ｍ、深さ0.1～0.2ｍを測る楕円形の土坑である。土坑の底面には６個のピットが不規則に掘り込まれている。埋土内より、鎌倉時代の須恵器椀・鉢・甕・羽釜、瓦器椀、白磁碗の他、鉄片などが出土している。

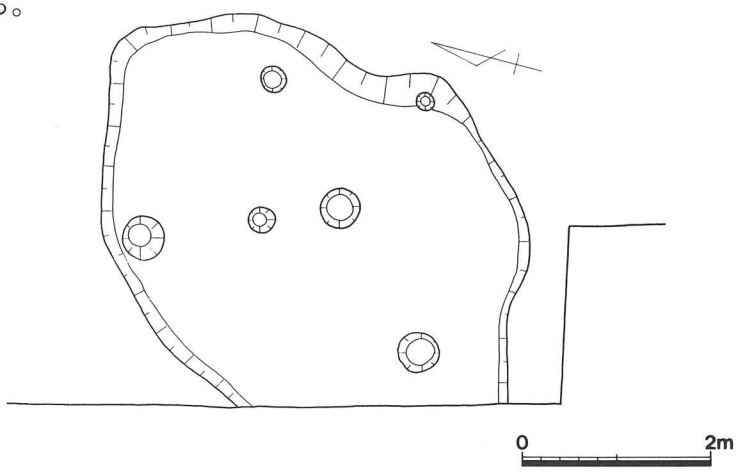


fig. 230　ＳＫ07平面図

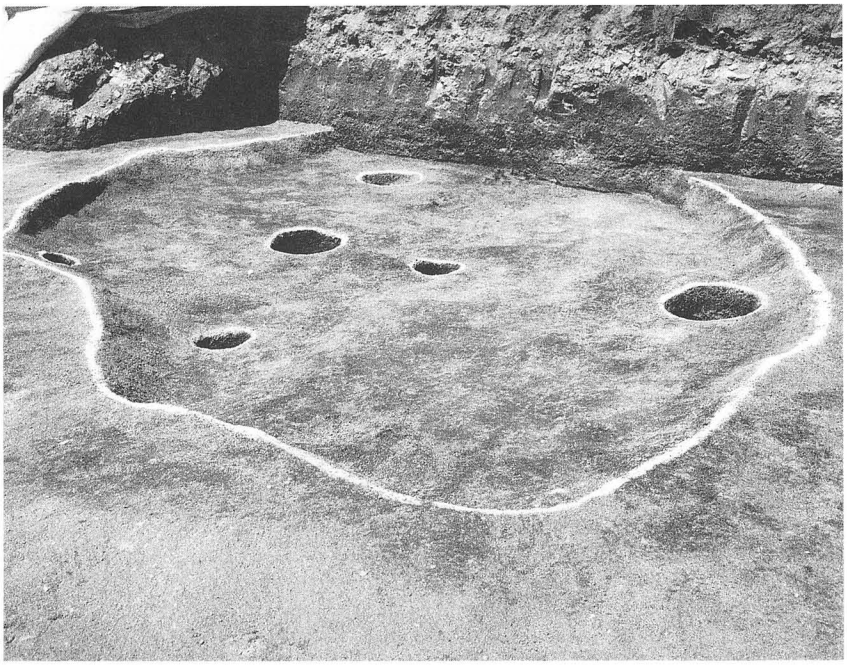


fig. 231　ＳＫ07

遺　物

今回の調査では、古墳時代後期や鎌倉時代の遺物の他に、最下層の黒褐色粘質土層内より、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の遺物が出土している。

弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の遺物

地表下約２ｍの黒褐色粘質土層内よりコンテナ４箱分出土している。器形としては、壺、甕、鉢、高坏等がある。この時期に属する遺構は、今回の調査では検出していない。

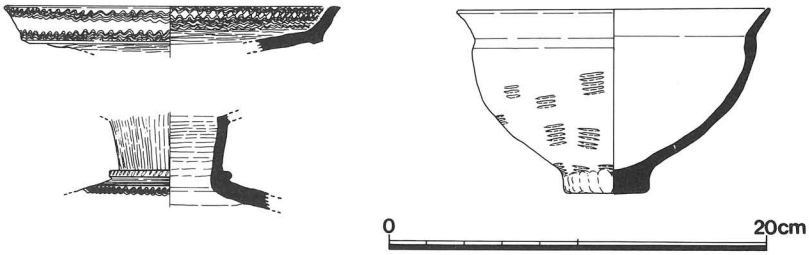


fig. 232
黒褐色粘質土層
出土遺物

古墳時代後期初め頃の遺物

特に１号墳の周辺から多く出土しており、コンテナ３箱分ある。

円筒埴輪

円筒埴輪は、色調が明黄褐色を呈する軟質で、焼成が土師質のものと、色調が暗黄褐色を呈するやや硬質で、焼成が土師質のものと、色調が青灰色を呈する硬質で、焼成が須恵質のものとの３つのタイプに大別できる。

１号墳の東側周溝内より出土した円筒埴輪は、２番目の硬質土師質タイプのものであり、軟質土師質及び硬質須恵質のものは、上層の淡褐色粘質土層内より出土している。

鉄　刀

１号墳墳丘内より出土した鉄刀は、現存長77.0㎝、幅3.8㎝を測り、茎部に二つの目釘穴を穿つ。Ｘ線写真の結果では、現在のところ、線刻及び象嵌等は確認していない。

その他、１号墳周辺からは、須恵器坏・高坏、土師器壺・高坏・甕等が出土している。

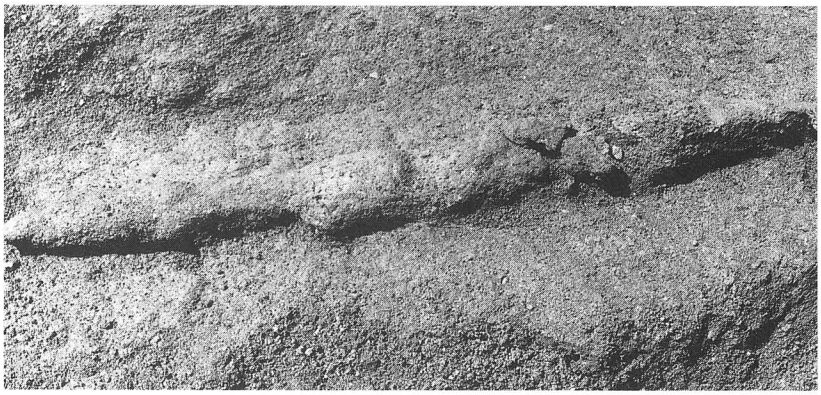


fig. 233
鉄刀出土状況

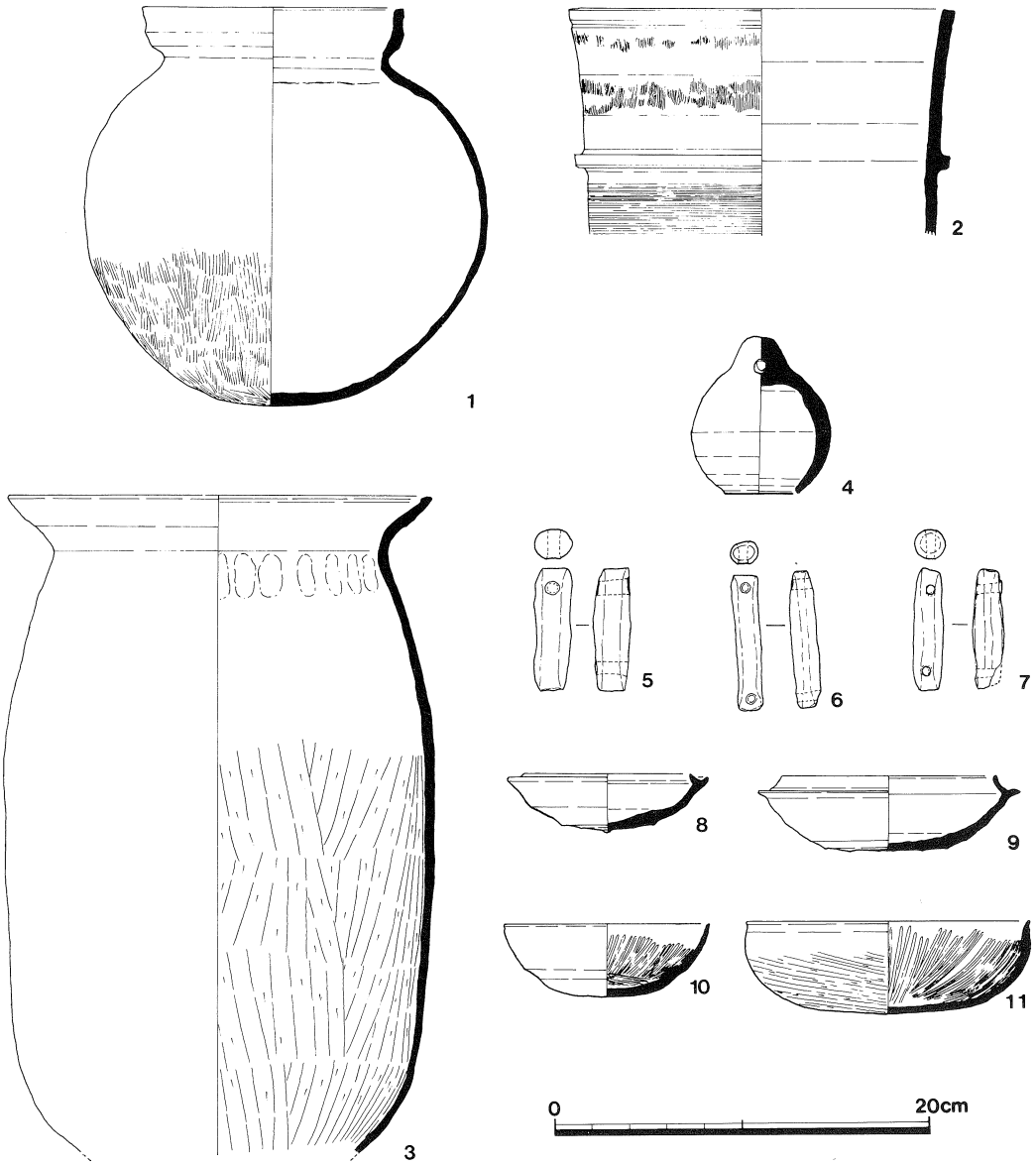


fig. 234　出土遺物実測図　1・2　1号墳周構内　4～11包倉層　（2はS＝1/6）

古墳時代後期末の遺物

地表下約1.7mの灰褐色粗砂上面（遺構面）及び、その上層の淡褐色粘質土層（包含層）から、コンテナ15箱分出土している。須恵器では、坏、高坏、甕の他、飯蛸壺形土器が出土している。土師器には、坏、高坏、甕等がある。また、管状土錘や両端部に穿孔をもつ棒状土錘も出土している。

鎌倉時代の遺物

ＳＫ07とその周辺から出土し、須恵器埦・鉢・甕等、土師器小皿・甕・羽釜等がある。また、瓦器埦、白磁碗、鉄片等が出土している。

fig. 235
飯蛸壺形土器出土状況

3．まとめ

今回の調査は、工事中の不時発見ということもあり、また、建物の基礎部分のみという制約もあって、十分な検討を行うことが困難であったが、いくつかの重要な知見を得ることができた。

まず第一に、早くから市街地化され、遺跡の有無さえ未確認であった地域において、群集した方墳群が発見されたということである。これまで、このような平地における群集した古墳群は、長原遺跡（大阪市平野区）等にみられたが、比較的稀少な例であり、また、市街地の中にありながら、原形をかなり良好に留めているものがあるという点でも重要である。

第二に、隣接地の第２次調査区でも同様であったが、住吉宮町遺跡で発見された古墳が、すべて一辺５～10ｍ内外の方墳であり、これらの古墳が極めて接近して造営されているという点でも興味深い。

第三に、現在の海岸線から約１㎞北方の住吉宮町遺跡において、土錘や飯蛸壺形土器等の漁労生活に関する遺物が出土したことは、旧汀線の復原を検討するうえにおいて、比較的重要な資料となる可能性が高い。

残念ながら、今回の調査では、遺跡の全容や性格を明らかにすることができなかったが、今後、周辺地域における発掘調査が進展することによって、しだいに明らかになるであろう。

17. 住吉宮町遺跡（すみよしみやまち）　－第２次調査－

１．はじめに

住吉宮町を含む東灘区・灘区周辺は早くから市街化が進み、埋蔵文化財の存在については未知の状態に近かった。近年、これらの市街地にも再開発の波が及び、道路工事・マンション建設工事に先立つ発掘調査で、今日まで未知の遺跡も周知のものとなりつつある。

昭和60年６月14日、当調査地区の東隣のマンション建設工事現場で、鎌倉時代前半の土坑・遺物が発見されたのが、住吉宮町遺跡発見の契機である。これが第１次調査地区にあたり、弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭の遺物包含層・古墳時代後期の方墳４基・古墳時代後期～終末期の土坑・ピット等が検出されている。

今回の第２次発掘調査地区も、マンション建設工事に先立つもので、建物基礎部分で遺跡が破壊される部分についてのみ発掘調査を実施した。調査地区については便宜的に図237のように呼称している。

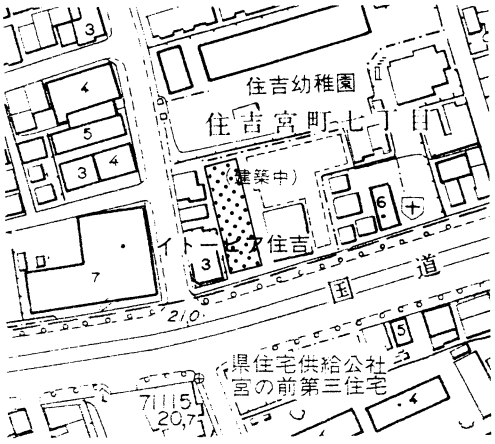


fig. 236　調査地位置図 1：2,500

２．調査の概要

今回の調査では、大きく分けて３時期の遺構面を確認した。古い順にそれぞれをⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期と呼称する。

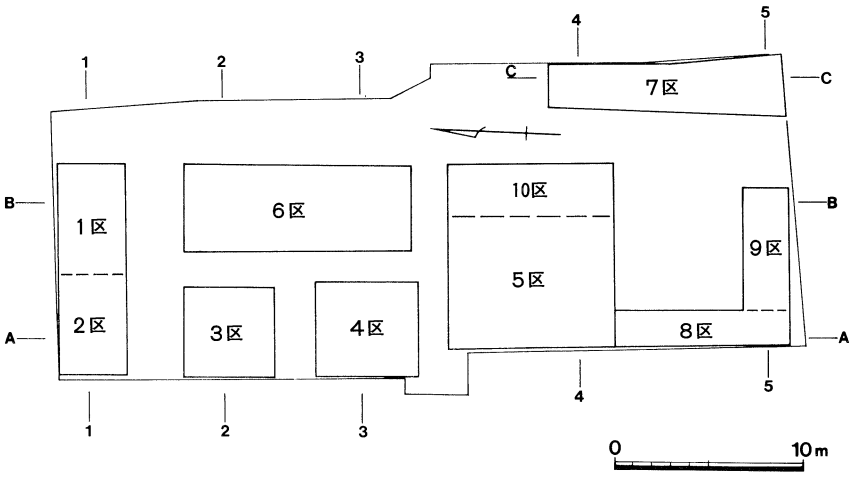


fig. 237
調査地区設定図

Ⅰ期（古墳時代前期初頭）

現地表下約２ｍで検出した遺物包含層である黒褐色粘質土と、５区北端の土坑（ＳＫ01）、７区北半の土坑（ＳＫ02）、９区東半の落ち込み（ＳＸ01）を検出した。遺構は調査地区南半に集中しており、土器の出土量も同様に南半を中心とする。

ＳＫ01

長径1.75ｍ、短径1.30ｍ、深さ0.6ｍを測る円形の土坑で、北壁部は袋状を呈している。埋土中より多量の土器片が出土している。

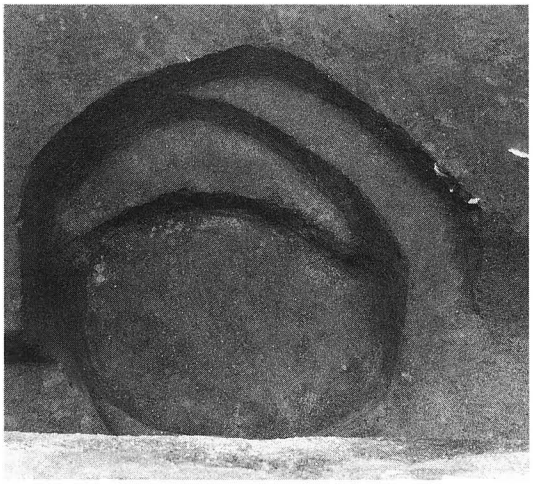


fig. 238　ＳＫ01

fig. 239　ＳＸ01

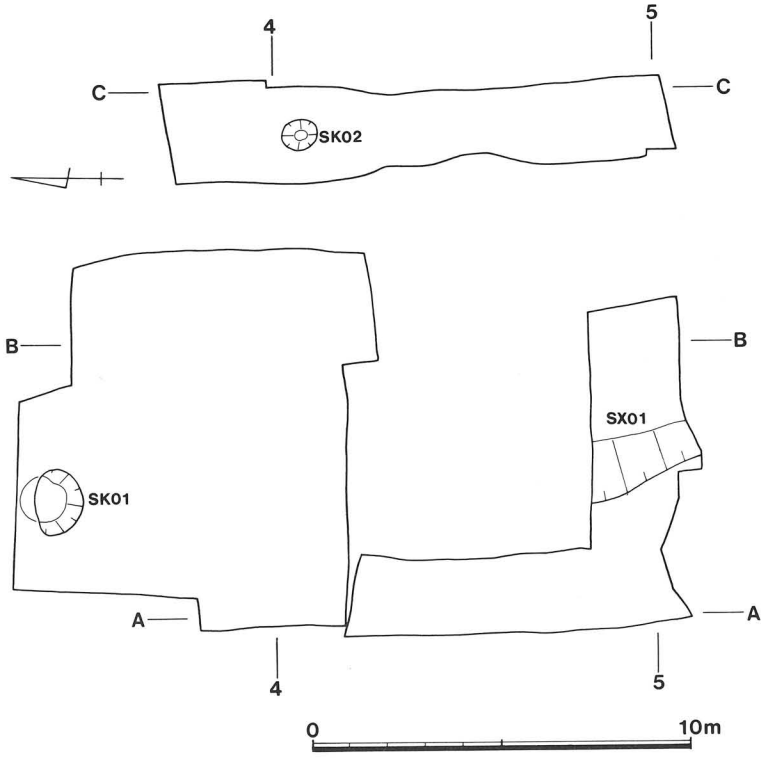


fig. 240
Ⅰ期遺構配置図

ＳＫ02　直径0.85ｍ、深さ0.35ｍの円形の土坑である。埋土中より壺形土器・甕形土器・高坏形土器・鉢形土器等が出土している。

ＳＸ01　後述する８号墳の周溝部分と重複する位置で検出した。西側の肩部しか検出できなかったため、遺構の全容を明らかにすることはできなかった。最深部で約0.6ｍを測る落ち込みである。埋土中より壺形土器・甕形土器・鉢形土器等の多量の土器が出土している。

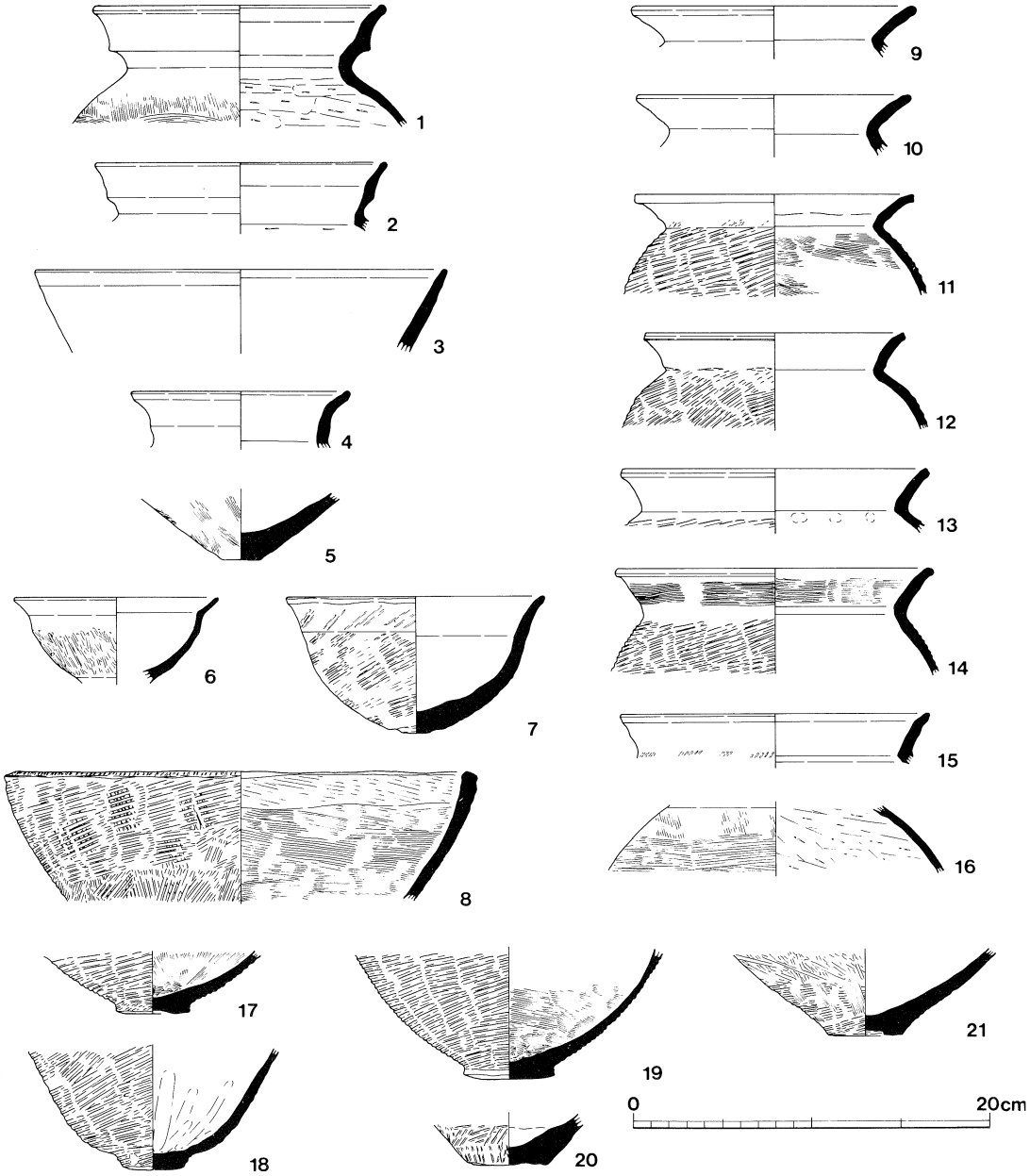
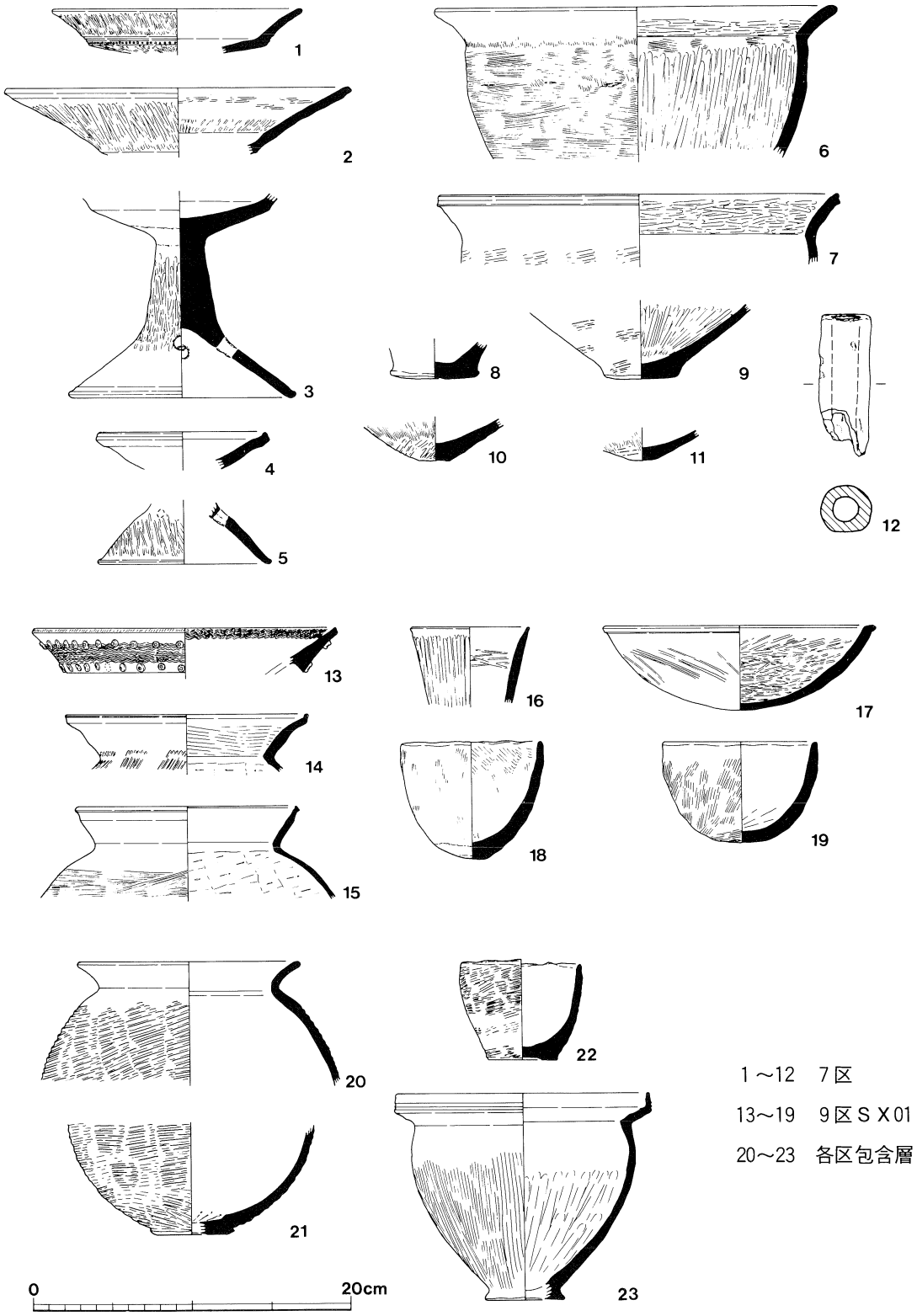


fig. 241　ＳＫ02（Ⅰ期）出土遺物



1～12　7区
13～19　9区SX01
20～23　各区包含層

fig. 242　Ⅰ期出土遺物

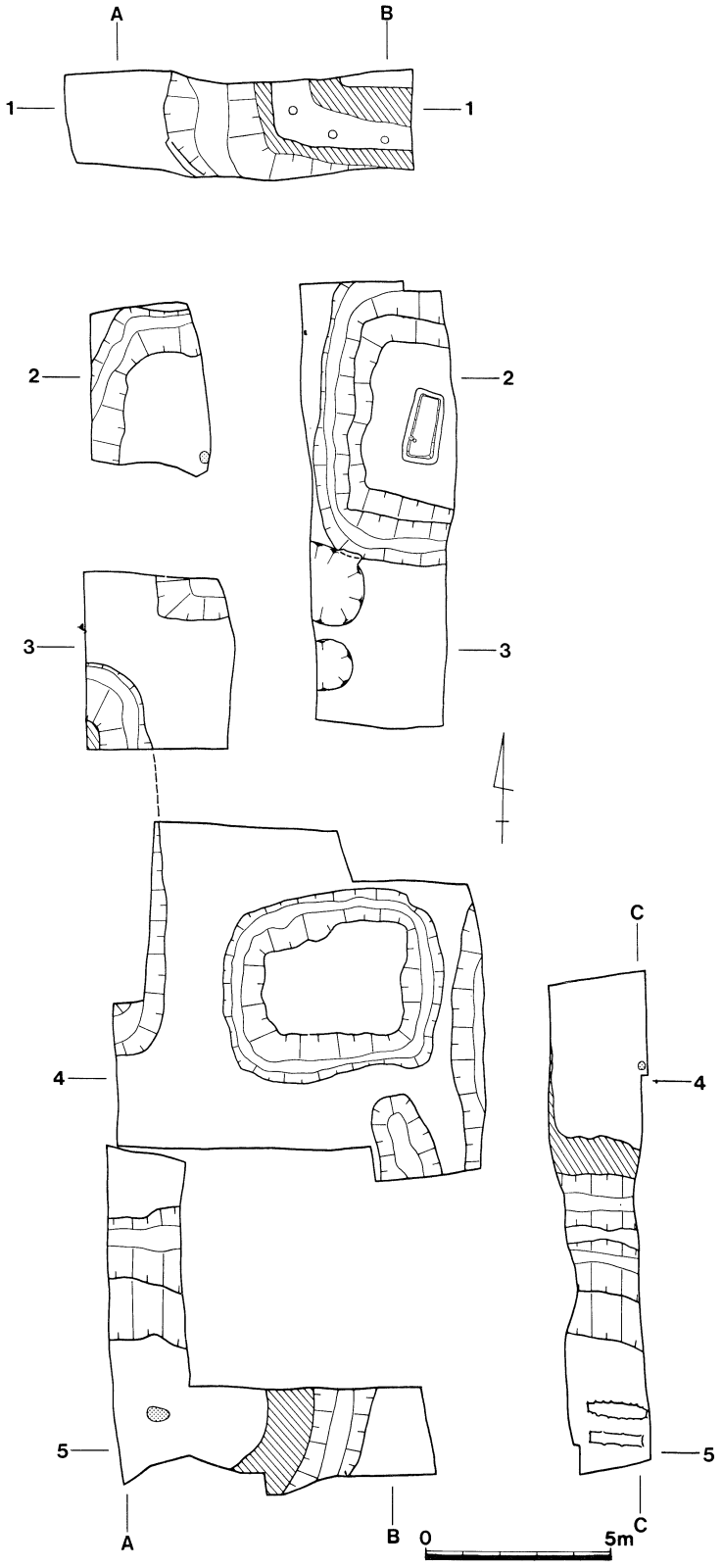


fig. 243
Ⅱ期古墳位置図

Ⅱ期（古墳時代後期初頭）

狭い調査区の中で合計８基の小型古墳を検出した。

(1) 築造方法

検出した８基の古墳の築造方法は、基本的に同一であり、Ⅰ期の包含層である黒褐色粘質土上面を基盤として、周溝を掘削することによって墳丘盛土を確保している。墳丘の遺存度に左右されるものの、墳丘規模が大きいほど周溝の幅と深さが大きいのは、このためであろう。また、盛土内にⅠ期の土器の細片を包含する点からも周溝掘削土が盛土として使われたことが想像できる。古墳に伴う周溝は墳丘を画するという意味を持ちながら、墳丘盛土の確保という大きな目的があったと考えられる。

また、外部施設としての葺石については、墳丘断面の観察からみると、墳丘の粗造が完成した段階でまず墳丘の基底ラインを決定する最下段と墳丘稜線上に大ぶりの石を据え、順次小さい石を葺き上げていったと考えられる。

円筒埴輪の樹立については、３号墳のみで確認されたものであるが、直径約30cmの掘形を墳丘上面から黒褐色粘質土の上面まで掘削し、この中へ埴輪を立てたようである。なお、埴輪樹立の詳細については、さらに検討が必要である。

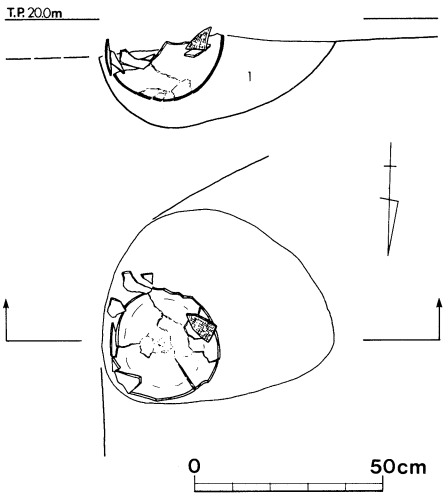


fig. 244　4号墳須恵器出土状況

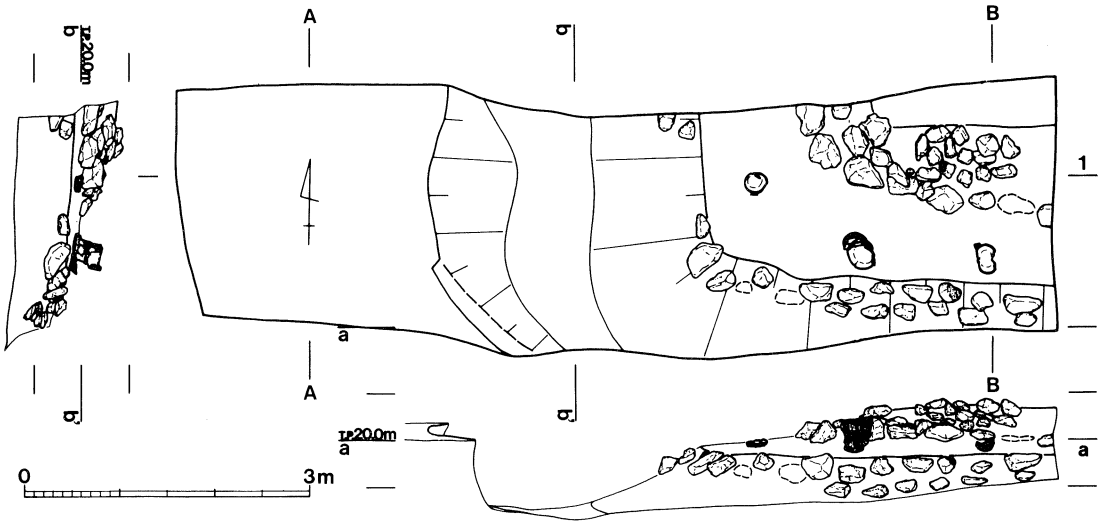


fig. 245　3号墳平面・立面図

fig. 246　3号墳

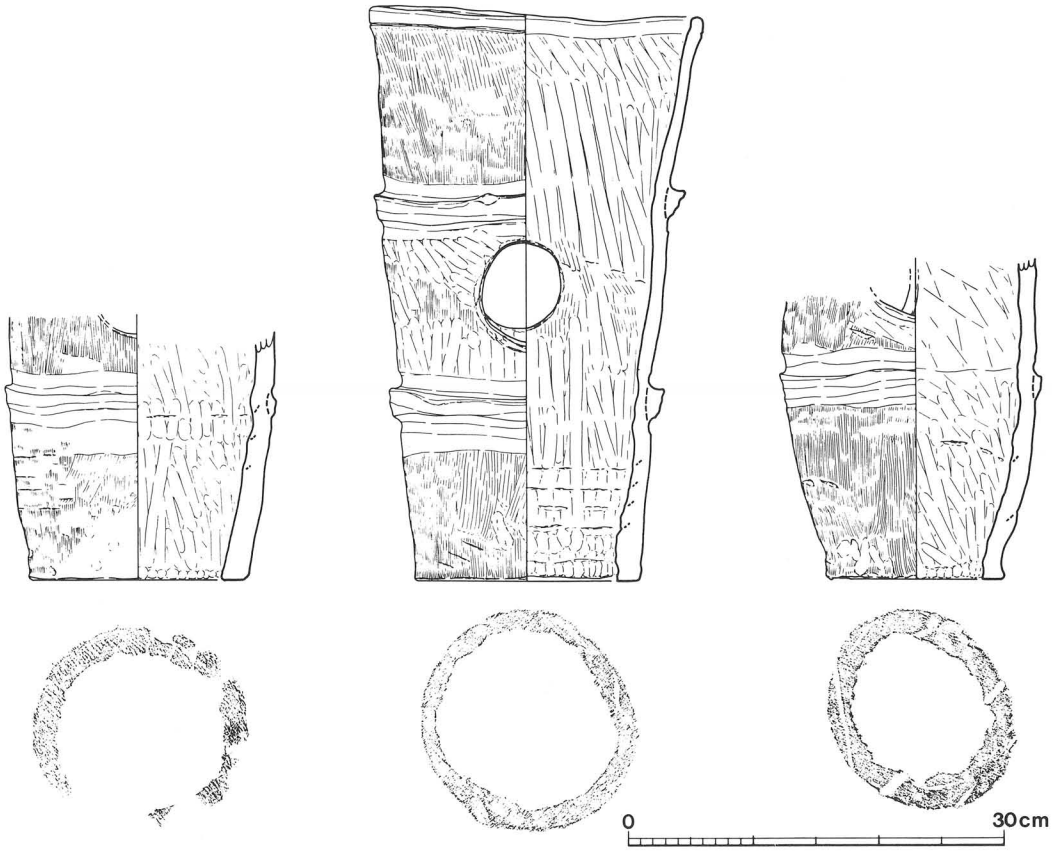


fig. 247　3号墳円筒埴輪実測図

(2) 古墳群の形成　ここでは、どのような時期変遷を経て、各古墳が築造されていったかをみていきたい。それぞれの古墳には、直接切り合い関係が認められないため、出土遺物の型式を軸に、墳丘規模やその位置等の諸条件を加味して判断せざるを得ない。

3号墳　最古段階に位置づけられるのは、葺石・埴輪で墳丘を飾り、最大規模を有する3号墳と考えるのが妥当であろう。川西編年第Ⅴ期に比定できる円筒埴輪を3本検出しているが、同一型式の埴輪片を7号墳の基盤上面で検出している。

7号墳　7号墳の埋葬施設内の須恵器が陶邑田辺編年（以下省略）TK 208型式に比定できることより、3号墳は7号墳より古く、TK 208型式より遡ることは確実である。

4・8・10号墳　また、4号墳・8号墳・10号墳の須恵器もTK 208～23型式にほぼ比定でき、7号墳よりやや時期が下がると考えられる。なお、8号墳の須恵器有蓋高坏の脚部形態は管見に触れないもので、その供給窯の追求が課題として残される。

6号墳　そして、最後に築造されたのが、他の古墳の隙間に占地し、かつ最小規模である6号墳と考えられる。

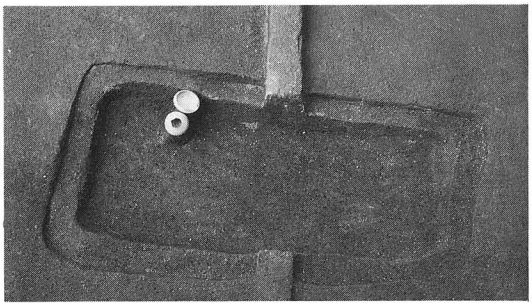


fig. 248　7号墳埋葬施設

fig. 249　8号墳墳頂須恵器出土状況

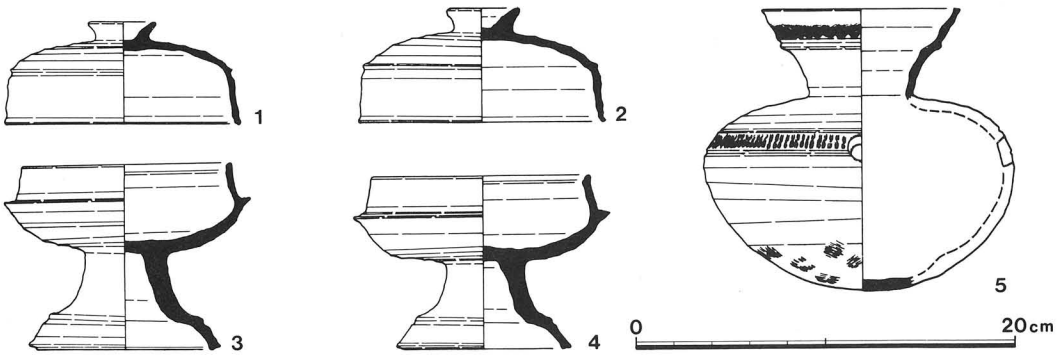


fig. 250　8号墳墳頂出土須恵器

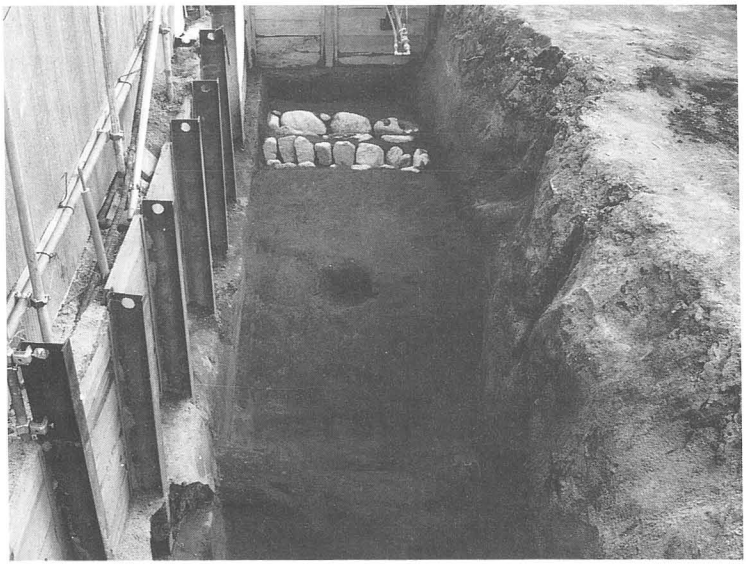


fig. 251
9号墳(北から)

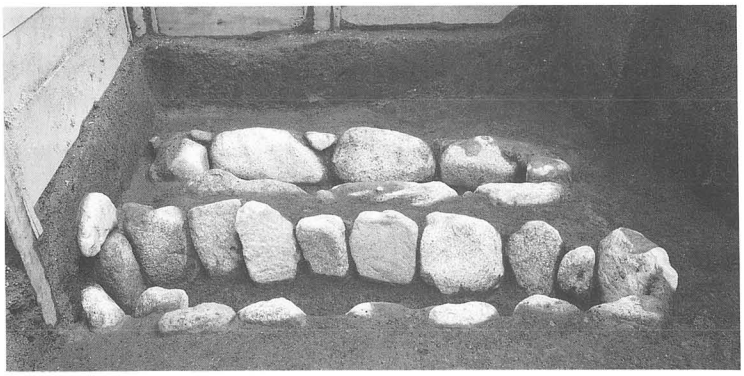


fig. 252
9号墳石棺(北から)

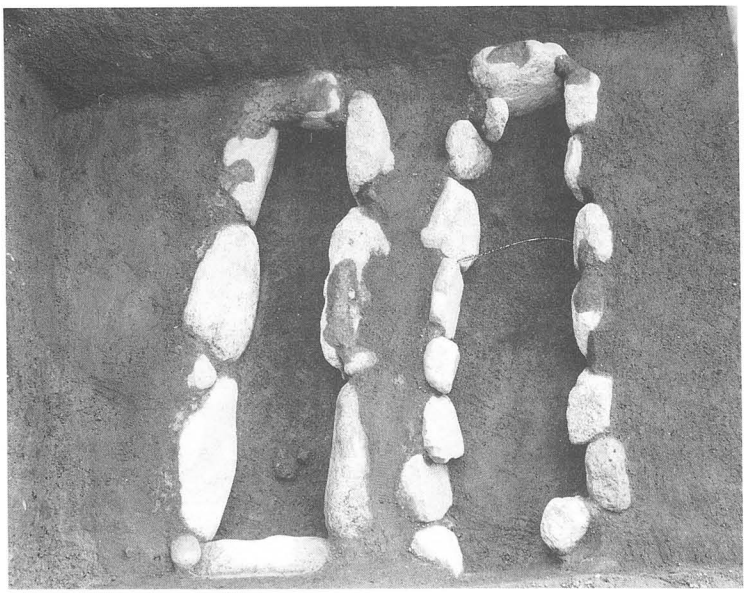


fig. 253
9号墳石棺(東から)